

---

# 太陽の消えた国、君の額の赤い花

青柳朔

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

太陽の消えた国、君の額の赤い花

### 【Nコード】

N7914C

### 【作者名】

青柳朔

### 【あらすじ】

私はあの男を許してはいけない、信じてはいけない　イシユウ  
イリアナの聖女・ノアは、オルヴィスによって国が滅ぼされた後  
も国に残った。そんな彼女のもとにオルヴィス王・ゲイルがやって  
来る。ゲイルの優しく、不器用な一面を知り、ノアは徐々に心を  
開いていく　……隠さなければいけない秘密、守らなければなら  
ないもの。ノアが選ぶ道は　？

太陽の消えた国、君の額の赤い花

## 1：出会い（前書き）

これは「月のない空、君と一輪の青い花」で、名前だけ登場したノアという少女の話です。  
こちらだけでも十分に読める内容になっていますのでご安心ください。

## 1：出会い

私の好きな色。

赤。

私の嫌いな色。

深紅。  
あか

それでも目を閉じれば鮮明に思い出す。

白黒の世界の中で、どこまでも残酷に、鮮やかなあの血色。

私を苛む、あの日の忌まわしい記憶。

イシュヴィリアナ王国において、王と王子は太陽の象徴とされてきた。その傍らで付き添うように、そつと静かに存在するのが月

神の愛娘、イシュヴィリアナの聖女。

イシュヴィリアナには数十年に一人、額に花のような痣を持つ乙女が生まれてくる。その乙女は幼いうちに親元から引き離され、王都の外れにある月の塔で、聖女に育てられる。必ず一人の聖女が三十、四十歳を迎えた頃に、新しい聖女が見つかるのだ。決して聖女が、聖女の継ぐべき意思が途絶えることないように。

聖女は特に難しい知識など教えられることはなく、一般教養の他に宗教学を少し学ばされる程度で、同い年の少女と何ら大差ない。

聖女は信仰の象徴で、月の象徴。

王家が明るくイシュヴィリアナの未来を照らし出す存在ならば、聖女はただそこにひっそりと、静かに人を導く　そんな存在なのだ。

現在イシュヴィリアナの聖女はいない。否、イシュヴィリアナが

ない。

イシュヴィリアナ王国は、オルヴィス王国から攻め入れ、地図上から永久的にその姿を消した。

国王は戦場で散り、たった一人生き残った王子は処刑される。

国が滅んだのはついこの間のことで、王子であるアジムが処刑されるのは明日だという。

「ノーア様。聖女様。逃げましょうよ、こんなところから。きっと今にオルヴィスの者がやって来るに違いありません」

怯える修道女達を宥めて、ノーアはため息を吐く。

いつもは凜として気高い彼女達も、戦争と　そして敗戦したとなると、いつもの自信はどこへやら、がたがたと震えて、皆で手を取り合つて己の身にふりかかった不幸を嘆いている。

「逃げたい者は逃げなさい。私はここに残ります。……どうせ逃げてみずくに見つかるもの」

ノーアは自嘲的に笑った。

ノーアの額には小さな、赤い花のような痣がある。イシュヴィリアナの聖女の証。消すこともできない、神の加護の象徴。

「そんな　聖女様を置いて逃げるなど」

「もう聖女じゃないのよ、イシュヴィリアナは無くなったんだから。あの優しい陛下も、もういないの」

ノーアはこみ上げてくる涙を堪えた。ここで自分が泣けば、この場は一層不安定になる。毅然として、彼女達を慰めなければいけない。

優しい、敬愛する国王を思つて泣くのは、一人きりの夜に寝台の上で十分だ。

生まれてすぐに月の塔に連れてこられたノーアには、家族はいなかった。先代の聖女はノーアが幼い頃に亡くなり、あまり記憶がない。ここを訪れたのは国王と、第一王子のアジムだけだった。

ノーアは国王を父のように思つていたし、アジムのことを兄のように慕っていた。

うつ、と修道女がすすり泣く声が響く。

「あなた達は逃げられるのよ。このまま故郷に戻ってもいいの。誰もあなた達を責めたりしないわ。もしかしたら私も殺されるかもしれない。ここは危険なの」

まだ十六歳になったばかりの少女が、一回りも年上の女達に優しい言葉をかけ慰める。本当は一番泣きたいのはノーアなのだ。でも彼女にはもう慰めてくれる存在はいない。

「お願いよ、皆は逃げて。私は大丈夫だから」

そう言つてノーアは修道女を皆送り出した。

故郷に戻れなくても、隣の町の修道院に駆け込めばいい。月の塔は危険だから避難してきたのだと言えばきつと助けてくれるだろう、と説明する。そんなことすら恐慌状態の彼女達には分からなかった。

「ニル」

ノーアは一番親しい修道女に声をかけ、紙を手渡した。

皆が泣き続ける中で、彼女だけがすぐに泣き止んで冷静だったのだ。

「一応、私の名前で手紙を書いておいたから、もしもの時はこれを使って皆を助けてね」

「……ノーア様」

ノーアは微笑んだ。上手く笑えたと思う。

月の塔にいる修道女は少ない。もともと聖女の世話をする為にいるのだが、聖女の暮らしぶりは王家と違って質素だ。

ノーア自らパンを焼くこともあつたし、畑仕事も出来る。あまりやらせてはもらえなかったけど。

だから彼女達が急にいなくなつたとしても、自分一人で生きていくことは出来る。

「大丈夫。………行つて」

今夜は満月だ。すぐに逃げなければ簡単に見つかつてしまう。

幸いにして、修道女が逃げ始めると雲が満月を包み込んだ。一瞬にして静寂と闇が訪れる。

「ノア様、どうかご無事で」  
ニルがそう言い残して、去っていく。

もともと静かな場所ではあるが、ノア一人になると一層静かだ。これからどうしよう、とぼんやりと考えているうちに、雲間から満月が姿を現す。もう遠くにも逃げゆく修道女の姿は見えないから、本当に短い間の奇跡とでも言うべきだろうか。

月が静かに光を放ち、ノアの足元には夜だというのに濃い影ができた。

「……太陽がなくなっただっていうのに、どうやって月に輝けというの」

月は太陽の光を受けて輝く。

王家が消えた今、ノアはただの少女に過ぎなくなった。それでも。

オルヴィスにとってノアは、これ以上ない脅威に違いない。

亡国の権力者なのだ、ノアは。王家に次ぐ　もしかしたら王家をも上回るかもしれない影響力をノアは持っているのだ。

イシュヴィリアナの国民は、皆信心深い。

ノアは殺されるだろうか、と思ったが、それを自分で否定した。殺すより、利用する方が賢い。ノアを殺せば民は黙っていないだろう。王家の者が殺されるのは違う。ノアに戦争の責任を負う義務はないのだ。

城のある方角から、馬が二頭走ってくるのが見えた。

ノアはそれがだんだんと近づいてくるのを、ただ呆然と眺めていた。

「……イシュヴィリアナの聖女、ノア・ルティスカ」

手前の男が口を開いた。

ノアはただこくりと頷く。

月夜だというのに、男の姿は鮮やかだった。

燃え盛る炎のような、夕日のような、赤い髪。光の加減で金色にも見える榛色の瞳。背は高く、身体は引き締まっている。

「まずは名乗るのが先か　俺はゲイル・イスヴェーダ・オルヴィス。イシュヴィリアナを滅ぼしたオルヴィス王国の国王だ」

ノアは息を呑んだ。

どうして国王自ら、こんなところに　供らしい者はたった一人、

無言のまま後ろに控えている男だけだ。

ゲイルが不敵に微笑んだ。

その顔が少しアジムに似ているなんて、ノアは不覚にも思ってしまった。

この男は、憎い敵なのに。

「俺の后になれ、聖女」

自己紹介を終えた、最初の一言がそれだ。ノアは驚きのあまり一瞬息をするのも忘れてしまった。

賢い男なら、ノアを利用するだろう。そう思っていた。

なのに突然后になれなんて、どうかしてる。確かにノアを娶るのは一番楽で、一番効果のある利用法だとは思うが、それをなんの前触れもなく、こんな形で言うなんて。

それに　ノアの中で、この男に対する憎しみがないかもしれない可能性なんて、ありえない。

「……あなたの後になるくらいなら、神に背くことになるうと舌を噛み切って死んでやるわ」

この男はあの父のように慕っていた国王を殺した。そして、明日の日の出と共に兄のように優しくしてくれた、アジムを殺すのだ。

ノアが睨みつけると、ゲイルは可笑しそうに笑った。

子供の虚勢だとも思っているのだろう。ノアは十六歳だが、

太陽の消えた国、君の額の赤い花

オルヴィス王は確か二十五歳くらいだったと記憶している。彼にはノアが幼い子供に見えているのかもしれない。そう思っていればいい。笑われても別にいい。明日にはきつとそれを後悔するだろう。

これは決して虚勢などではないのだから。

## 2：逃亡者

意地の悪い、不敵な微笑みを残してゲイルは去った。

胸の奥に燦る炎のような熱くかすかな怒りを胸に抱えたまま、ノアは月の塔に入る。ここは誰も汚せない、ノアの領域だから。塔の中は不思議なほどに静かだった。ノア以外誰もいないのだ。当然と言えばそこまでなのだが、静寂はノアの心を揺らした。守ってくれていた王家はもうない。

ノアはただの無力な少女になってしまった。重たい足を引きずるようにして、ノアは一階の、昼間に使っている部屋に行く。最上階にはノアの自室があったが、そこまで上る気にはなれなかった。

一階の部屋にも仮眠用の寝台がある。そこで今夜は眠ろうと。そう思って扉を開けると、窓が何故か開いていた。首を傾げて窓を閉めようと近づくと、窓の向こうから声がした。

「ノア」

それは長年聞き慣れた声だ。

しかしその声の主がここにいるはずはない。

「……アジム？」

いるはずがない、空耳だと思いつつも、わずかな期待を胸に呟いた。

一階の部屋に来て良かった、と自分の気まぐれに感謝した。

窓の向こう、そこには確かに兄のように慕った、イシュヴィリアナの王子がいた。

王子という身分には似つかわしくない、みすばらしい旅装束を着ている。

「随分と来れなくて悪かった。戦争中、不安だったろ？」

駆け寄ってきたノアに微笑みながら、アジムが言う。オルヴィ

スとの戦争が始める前は三日に一度は月の塔に来てくれたのだ。

「私、夢でも見てるの？ だってアジムは明日処刑されるって」  
そこで、ノーアは口を噤んだ。アジムの側にいた、青年を一人思  
い出した。

「まさか……ジルダスが？」

驚くほどアジムに似た青年は、アジムの影武者をしていた。イシ  
ユヴィリアナに詳しくないオルヴィスの者なら、きつと騙せるだろ  
う。

「……ああ」

アジムが複雑な面持ちで頷いた。

慰めになるような言葉も思いつかずに、ノーアは俯く。

息苦しく、重い沈黙の後でアジムが口を開いた。

「これから、国外に逃げる」

「じゃあ あのおアシスに行くのね？」

ノーアの言葉に、アジムはにっ、と笑った。肯定だ。

アジムの初恋の女の子の話は、もう随分と前から聞いていた。そ  
の女の子は砂漠最大のオアシスにいる。そしてアジムがまだその少  
女のことを今も好きだということを知っていた。

ノーアとアジムは一応婚約していたが、それは国が決めたことだ  
った。お互い兄妹のように思っていただけで、恋愛感情なんて抱い  
たことなどない。

聖女と王子の婚姻は、異例だった。

太陽と月。どちらも同じ世界にいることは叶わぬ存在。交わるこ  
とのない、二つの至宝。

ノーアとアジムの婚約は、イシユヴィリアナがそうしなければなら  
ないほど衰退していたことを証明していた。

「ノーア。おまえも来るか？」

少し迷ったように、慎重に言葉を選んで出された問い。ノーアは  
くす、と笑って即答した。

「何言ってるのよ、お邪魔虫じゃない」

そうじゃなくて、とやけに真剣なアジムの声が響いた。

「分かつてるだろ？ おまえは俺の次に危険なんだぞ」

「冗談でしょ？ 私に、身代わりなんていないもの。額に痣のある女の子が私以外にいるわけじゃないじゃない」

この額に咲く小さな花のような、赤い痣 たったこれだけでノアは聖女になった。生まれてすぐに。

アジムが押し黙った。無理だということくらい、彼にも分かっていることだ。

見つめてくるアジムの顔が、痛いほどに悲痛で、ノアの胸は苦しくなった。

「……大丈夫よ。私は処刑されると決まってるわけじゃないんだから」

むしろ 后になれ、というあのオルヴィス王の言葉から、ノアは利用されることはあっても、殺されることはないだろう。

「ノア。俺を恨むか？」  
射抜くような強い視線。

ノアはどうして？ と聞き返した。

「俺が、イシュヴィリアナを捨ててオアシスに行くから。本当なら、王子としてもう一度オルヴィスと戦わなければならないのに」

いくらノアが世間知らずだとしても、オルヴィスとの戦いが絶望的で、勝利など奇跡でも起こらない限り不可能だったということくらいは、知っていた。

たとえ再びアジムが戦を始めても、叶うわけが無いのだ。しかし王家の人間として、どこまでも抗わなければいけない。しかも

「恨んだりしないわ。これ以上戦争をして、なんの意味があるの？ また負けて、たくさんの人が死ぬことはそんなに偉いことなの？ ……王族だって、人間なのよ。自分の生きたいように生きて、いいじゃない」

「王は、非情でなければならぬ」

「アジムは王じゃないわ」

きっぱりとノーアは言い放った。

アジムはまだ悩んでいるのだろう。国外に逃げ、アジムというただの男となって自由に生きるのと、王子として国の仲間を集めて再び戦うか。

「あなたは王じゃないの、アジム。誰もあなたを恨んだりしないわ。形あるものはいつか消える。それは国でも同じことでしょうか？」

ノーアは精一杯笑顔を作った。

生きて欲しい。もう胸を抉られるような辛い悲しみに襲われるのは嫌だ。

「ありがとう、ノーア」

アジムが優しく、穏やかに微笑む。

彼はきつと誰でもいいから、ノーアが言うように言って欲しかったのだろう。

「……ほら、早く逃げて」

このまま夜明けまで居つきそうなアジムを、ノーアが急かす。ここで見つかってしまったら一巻の終わりだから。

「アジム、約束して？ また会おうって。そのときはオアシスの姫も一緒に」

守ろうとも思わない約束を取り付けた。

アジムはノーアの心情に気づくこともなく、柔らかに微笑んだ。

「分かった、約束しよう」

アジムは馬に跨り、私を見下ろしている。その瞳にはやはりまだ悲痛な色が濃く残っていた。

「ノーア。もしもおまえの身に危険が及ぶようなら 国にかまわず逃げる。もうイシュヴィリアナはなくなっただ。無い国のために、おまえが犠牲になる必要はない。民は王が変わっても、聖者がいなくても生きていける」

分かってる、と答えながらも分かっていたのかもしれない。

イシュヴィリアナがなくなったのだとしても　ノアはこの月の塔という狭い場所意外は知らない。その外に出るといふ勇氣もなかった。

「早く。また会えることを神に祈ってるわ。……兄様」

いつもは兄なんて呼ばない。でも今この場ではそう言うのが一番相応しいと思ったのだ。

「俺も神に祈ってるよ。もしも神が本当にいるのなら……どうか無事で」

アジムはそっと、ノアの額に口づけをして、二人はしばらく見つめ合った。もしも恋人同士だったのならこれ以上ない甘い雰囲気になるのだろうか　無言でアジムは離れ、最後に一度優しく微笑んで去って行った。

遠くでもう一人と合流していた。側近のガジェスあたりだろうな、と検討をつけて、少し安堵する。アジムは一人じゃない。オアシスに辿り着けば姫もいる。

どんどん小さくなり、やがて見えなくなったアジムの姿を静かに眺めて、ノアは小さくごめんなさい、と呟いた。

もう二度と会わない。

不幸にもアジムの存在がノアの決心を揺ぎ無いものに変えてしまった。

アジム・アブラシード・イシュヴィリアナは明日処刑される。彼が本当は生きているなんていう事実を知る者が、イシュヴィリアナに　オルヴィスに、いていいはずがない。

### 3：生命

塔の中を掃除するのに丸一日使ってしまった。

それでも手の行き届いていないところはあつて、全てを掃除したわけじゃないが、ノアにしてみれば人生初の重労働だった。身の回りのことを多少することはあつても、聖女という特別な立場だけあつて、ほとんどのことは人がやってくれたし、あまりノアがやるうとするとならされた。

太陽が西の空に傾き、空を鮮やかな朱に彩っている頃にノアは沐浴した。

掃除したおかげであちこち埃っぽいせいもあるのだが、心身を清めることが目的だった。

濡れた髪を拭き、白い服を着る。簡素なドレスだが、質はいい。長い銀の髪の水気を取り、そのまま背中に流した。結い上げるのは好きじゃないし、自分では結えない。

東の空はもう薄暗くなり、夜の到来を告げていた。

ノアは西の赤い空をしばし見つめた。

どこか胸に寂しく響くその美しい赤に、ノアの思考も休まる。

太陽がすべて飲み込まれ、世界は闇と静寂に包み込まれる。

ノアは深く息を吐き、月の塔に入った。一階の大部分は聖堂で、修道女達が祈りを捧げる場所だ。そのさらに奥に、聖女の為の祈りの間がある。

聖女の姿が見事に描かれた絵の前に、ノアが跪く。

懐から短剣を取り出し、どこを刺すべきか少し考えた。修道女は人々の治療をすることもあつたので、ノアも少しだが知識がある。首には大きな血の流れがあるから、切り裂けばたくさんの血を流して死ぬ。胸を刺せばそこは身体の中で一番重要なところだから死

んでしまう。

長く苦しめないほうがいいな、と思った。

出来れば一瞬で楽園に行ければいい。それとも自分は聖女だから、神の下へと行く事になるのだろうか。

短剣を鞘から抜き、握りなおした。

狙うのは胸。命の源。

長く長く吐息を吐き出して、ノアは固く目を閉じた。狙いに迷うことなく、短剣を突き刺す。

生暖かい、飛沫しぶきが頬にかかった。鉄錆の匂いがした。

「……………」

不思議と痛みはなかった。

やはり死ぬときはあまり痛みを感じないのだろうか。そんなことを考えたまま、天の使いがやって来るのを待とうと思った。

しかし。

「………てえっ………」

ノアの頭上 耳元で、そんな声が聞こえた。

驚いてノアが目を開ければ、目の前で短剣が固く握り締められていた。その切っ先はノアの身体に一つの傷もつけていない。

おそろおそろ、顔を上げて振り返る。すぐそこに 唇が触れてしまいそうなほどの至近距離に、ゲイルがいた。

「……オルヴィス王」

ゲイルはノアに覆いかぶさるように、ノアの自殺を食い止めた。

その存在にノアは憤りを感じ、さらに邪魔をされたということがノアの怒りを増幅させた。

短剣はゲイルに強く握り締められていて、まったく動かない。

強引に奪い取られ、遠くに放り投げられてしまった。

最後の手段しかない。

ノアは覚悟を決めて、いつか宣言したとおりに自分の柔らかかな

舌を噛もうと　　噛み切ろうとした。

「んんっ」

しかしノーアの次なる行動に気づいたゲイルに先手を打たれる。口にゲイルの指が入り込んで、舌を噛むことなど出来なくなった。せめてもの反抗にと、ノーアはその指に噛み付く。

口の中に、鉄の味が広がった。

それは指を噛んだ程度ではありえない量で　それが、さきほど短剣を握り締めた時にゲイルの手のひらについた深い傷だということにノーアは気づいた。

顎に触れる部分も、ぬるぬるした。生臭い、血の匂いが鼻腔を刺激した。

その事実を認識すると、ノーアは途端に怖くなった。

ゲイルの手のひらから流れる血がノーアの顎を伝い、そしてぽたりぽたりと落ちて、ノーアの白いドレスを紅く染め上げる。

すべては自分がしたことなのだ、そう思うと恐ろしくてたまらなかつた。身体は勝手に震えだし、瞳には涙が浮かぶ。

「……………これくらいのことでは怯えるなら、初めから死のうなんて考えるな」

耳元で声がする。

それは少し怒気を含み　そしてどこか優しくかつた。

ノーアは、所詮温室育ち　誰かを傷つけるなんてことはもちろん、こんなに大量に流れる血を目の当たりにしたこともない。祈りの間には血の匂いが充満していて、ノーアは吐き気がしてきた。

「……………ふ……………」

堪えきれずに、ノーアの青い瞳から涙が零れる。小さな嗚咽が漏れ、不思議なほど大きく祈りの間に響いた。

力を抜いてその場に座り込むノーアを見て、ゲイルは慎重にその口から手を離れた。短剣を握り締めた時の傷は、思ったよりも出血していた。これでは舐める気にもなれない。

ノーアにはもう自害しようとする気配はない。

すぐ側で、抱きしめられるほど近くで泣いている少女の姿は、儚く美しかった。

涙の理由はノアにも分からなかった。憎悪か、恐怖か、安堵か、悲哀か。

羞恥心なんて関係なかった。とめどなく流れる涙を止める術など、ノアには分からなかった。

イシュヴィリアナが消え去った時から、凍らせていたたくさんの思いが一気に溶け出したようだった。

ノアはゆっくりと目を開けた。

辺りはまだ暗い。太陽はまだ闇に飲み込まれたまま、姿を現していない。

泣きつかれて、ほんの少し眠ってしまったみたいだと起き上がる。頭に鈍い痛みがはしり、瞼が重かった。たぶん驚くほどに腫れているんだろうな、とノアは苦笑する。

服は眠る前のまま。あの紅い血痕もそのまま、白い服を汚していた。

「……オルヴィス王は」

どうしただろう。あの怪我はちゃんと手当していただろうか。

そしてすぐに、どうして自分が彼の傷の具合の心配をしているのかと不思議に思った。確かに怪我をさせたのは自分だ。しかしそれは彼が勝手にノアの自害を妨害したのだし、結果的には自害することを放棄したのだけれど、敵であるゲイルに、ノアが剣を向けてもそれはそれで仕方ないことではないだろうか。

……頭が混乱している。

外の空気でも吸おう。それで少し冷静にならなければ。

そう思ってノアは扉を開けた。すぐ外は階段しかない。

そこでやっと、自分が今まで眠っていたのが塔の最上階にある自

室だったということに気がついた。

ノアがここまで上った記憶はない。

「まさか……オルヴィス王が？」

それ以外に考えられなかった。

泣き崩れるノアの側に、ゲイルはいた。慰めるわけでもなく、叱り付けるわけでもなく、ただ側でノアを見つめていた。

敵である男が自分の寝室に入ったのは嫌だった。敵でなくとも、寝室に異性が入ってきたことなどない。

しかし、手のひらに怪我をしていたのに　そう思うと少し申し訳ない気分になった。

階下に下りる。外に出ると、そこにはいるはずもない葦毛の馬がいた。木に繋がれている。

月の塔に馬はいない。

「……………」

ノアは踵を返し、塔に入る。

昨夜自分が眠った一階の部屋に忍び寄り、静かに扉を開けた。

そこには、やはりゲイルが眠っていた。

どうして城に戻らなかつたのだろう、とノアは思う。一国の国王がこんな簡素な寝台で眠るなんて。

テーブルに、ノアが使った短剣があることに気づく。きちんと鞘に収められていた。

そうして黒い感情が浮かんできた。

今ならこの男を殺せる。

無防備に寝ているだけの男なら、ノアでも簡単に殺せる。自害しようとした時のように、首か、胸を刺せばいいのだ。

短剣を握り締めたまま、ノアはゆっくりと寝台に眠るゲイルに忍び寄った。

まだ短剣は鞘にしまったまま。頭の中では何も考えられず、どう

すべきかもよく分からない。

胸に置かれた、ゲイルの右手につい目がいく。  
乱暴に巻かれた布。それもきちんとした包帯ではない。タオルか何かを巻きつけただけだ。

わずかな明かりの中でも分かるほどに、その白い布は血で染まっていた。きちんと止血していないのだろう。

「……………馬鹿な人」

この部屋にはちゃんと包帯も、薬もあるのに。きちんと手当てしないと治りも遅くなるし、傷によくはないのに。

ノーアは短剣をテーブルに置き、薬箱を持つてくる。ランプに火を点けて手元を照らした。

起きてしまっただろうか、というわずかな不安を胸にノーアはゲイルの右手を消毒し、薬を塗った。器用に包帯を巻いて、元通りに胸の上にそつと置く。

ふっ、と息を吹きかけてランプの火を消す。

途端に部屋の中は暗くなり、窓から零れる月と星の輝きだけがノーアを照らす。

夜はまだまだ明けない。

ノーアは静かに扉を閉めて、ゆっくりと階段を上る。

手当てしたのは、彼があんまりにも杜撰<sup>ずさん</sup>だったから。怪我させてしまったのは自分だから。そのままにしておくのは後味が悪いから。眠ってしまった自分を、部屋まで送ってくれたから。

さまざまない訳を胸に、ノーアは眠りについた。

#### 4：たゆたう

ゲイルはノアが部屋を出て行ったのを、耳で確認してから目を開けた。

彼女が扉を開けて入ってきた時に目は覚めていたのだが、起きる気にはなれなかった。殺されそうになっても少女の一撃くらいどうにでもできたし、起きても話なんてできるとは思えなかったからだ。しかし彼女は、短剣を見つけて一度は握り締めながらも、傷の手当てをした。

「馬鹿な人、か」

確かにそうかもしれない。

あのまま眠ってしまった彼女を運んで、城に戻れば良かったのだ。もともと泊まる気なんてなかったのだから。

ここで彼女に殺されても可笑しくはないのだ。彼女は自分を憎んでいるのだから。

彼女を後に迎えるというのは ほぼゲイルの独断だった。

それをあの頭の固い貴族に提案すれば、反対されるのは分かりきっている。いつ寝首をかかれるか分からない状況など、あいつらが許すはずもないし、自分達の可愛い娘を差し置いて正妃の座を他国の娘に奪われるのも我慢できないのだろう。

後は、つまり国王の正室。ノアのイシュヴィリアナにおける地位を考えればそれは相応なものだ。

イシュヴィリアナの聖女を殺すわけにはいかない。

そんなことすれば民はおそらく蜂起する。それだけ聖女は重要な存在だと聞いている。ある意味では 王族よりも性質が悪い。

民は王族が死んでも心を痛めることはない。しかし聖女は信仰の対象だ。目に見える神なのだ。

手のひらが痛んだ。

彼女を殺すなど訴えてくるかのように、痛みは断続的に訪れる。

彼女の青い瞳から零れた涙が、脳裏に焼きついて離れない。

俺のものになるくらいなら死んでやると言っただけの強い眼差しが、  
今もゲイルの胸を貫いていた。

手のひらに巻かれた包帯にそつと口付ける。

血の匂いと、消毒液の匂いの他に、何か優しい甘い香りがする気がした。

ゲイルは苦笑する。

もう捕らわれているのだ。彼女の青い瞳に。

彼女はほんの短い出会いでゲイルの心に確かな居場所を作った。

ならば手に入れる。

運命の赤い糸だろうが、鎖だろうが、彼女を絡め取る。

逃げられないように。

朝の眩しい光に、ノアは目を覚ました。

あまり良く眠れなかった分、頭はぼんやりとしている。

どうして誰も起こしに来ないんだろって思ってから、もう誰もいないのだと首を振った。

「楔、行かないと」

いつも朝起きると最初に身を清めた。

それが毎日の日課だったので聖女でなくなったとしても、変える気はなかった。

白い簡素な服を着る。今着ている血のついたドレスよりもずっと飾りがなく、白い布をそのまま被ったのとさほど変わりはない。

階段を下り、一階に来てノアはあ、と呟く。

「……………オルヴィス王」

彼がいることを忘れていた。

寝るときには脱いでいた上着をしつかりと着込み、今まさに月の塔から去ろうとしている。

ノアに気づき、ゲイルは振り返った。

朝日に照らされる赤い髪。瞳が金色に輝いて見えた。

薄い服一枚でいることに気づき、ノアは頬を赤く染めた。咄嗟に袂の後に羽織ろうと思っていたシヨールを引き合わせた。

「……………早いな」

ほんの少しの沈黙の後、ゲイルが呟いた。

まだ外は肌寒い。太陽が東から顔を出したばかりで、朝の遅い貴族はまだ夢の中だろう。

ノアは何を言っているのか分からず、ゲイルの顔を見ることもできずに俯いた。この格好も恥ずかしいし、気安く話しかけることも躊躇われた。

戸惑っているノアに苦笑しながら、ゲイルはそっと扉を開ける。

外には葦毛の馬が大人しく待っていた。

「そうだ」

扉の前で、ゲイルが立ち止まる。

なんだろうと、ついノアが顔をあげる。

「手当て、ありがとう」

わずかに微笑んだゲイルに、ノアは思わず見惚れた。

この塔にいたのはゲイルとノアだけなのだから、放置していたままの手が手当てされていればノアがやったのだと簡単に気づくだろう。まさかノアはゲイルが起きていたとは気づかない。

ゲイルは馬に跨り、そのまま何も言わずに去って行った。

扉まで駆け寄り、ノアは小さくなったその後ろ姿を、何も言わずにただ見つめていた。

清らかな水に半身を浸し、ノアはただ目を閉じた。  
何も考えない。

何も思わない。

楔とはそういうもの。

冷たい水と、まだ温まらない外気でノアの身体は冷やされる。

小さな頃から毎日繰り返してきたことだ。夏も、冬も。もちろん  
苦ではない。

濡れた銀の髪から一滴の水が滴る。

泉に落ちて、波紋を描いた。

「オルヴィス王」

ぼつりとノアが呟く。

その響きは思いのほか固く、中身のない言葉だった。当然だろう。  
彼の立場であってそれは彼の名前ではない。

しかし彼の名前を口にするつもりはない。

憎まなければいけない。

彼はノアからあらゆるものを奪った。

家族のように慕っていた王家を。よりどころであった国を。親し  
い人達すべてを。ノアの居場所を。

それでも彼は微笑むのだ。

あんなにも優しく、あんなにも柔らかく。

「どうして」

ノアは俯いた。

その拍子に髪から雫が落ちる。

どうして殺せなかったのだろう。

あの時、彼を殺めていたならば

「こんなに、心が揺らぐこともなかったでしょうに」

太陽の消えた国、君の額の赤い花

あの赤が消えない。  
瞼を閉じても浮かぶのはあの優しい赤。  
夕焼けのように温かい、あの穏やかな赤。

## 5：笑顔

修道女しかいなかった月の塔に、数人の女官がやって来た。その他にも塔の外には二、三人の衛兵。一日に何回か入れ替わっていた。監視だろう、とノアは思った。

自分のことをほとんど自分でしたことのないノアにとって、女官というのは便利でもあったが、オルヴィス側の人間なのだと思うと、あまり心休まるものでもなかった。

后になれ、と言った。

それが戯言でないのであれば、城に移されるだろうと思っていたのだが、それは予想が外れてしまった。

見知らぬ城に閉じ込められるよりも、月の塔で軟禁の方がまだましだった。

ここは城から離れていて、静かだ。

何より、ここがノアが知る世界のすべてだった。

ゲイルは頻繁に月の塔を訪れた。王都の外れにあるといっても、馬で走れば城からすぐだ。

特にノアに無理強いするわけでもなく、ただ側にいる。

あまり会話を交わすことはなかった。ノアが全身でゲイルを拒絶しているのを悟っていたからだろう。

気を許してはいけない。親しくしてはいけない。……アジムのことを、死ぬまで守り通さなければ

呪詛のようにノアは繰り返し繰り返し自分に言い聞かせた。

そうしなければ、今の非力な自分を庇護してくれる彼に寄りかかってしまいそうだった。

「陛下は、良い方ですよ。ノア様……」

ほんの少し他よりも多く口をきく、セリという女官にそう言われ

た。

あんまりにもノーアがゲイルを拒んでいるので、それを見かねてつい口出ししてしまったのだ。

「良い方かもしれないけれども、私はあの人に婚約者を殺されたの。そうきっぱりと言い放つと、セリも黙り込んだ。」

世間的にはそうなっているのだ、こういうのが一番説得力があったし、アジムが生き残っていても代わりに一人の青年が亡くなったことに変わりはない。

「そこまで、王子を愛していたか」

良く響く、低い声。

部屋の入り口で、苦笑しながらゲイルが立っていた。その姿を見てノーアは何故か、しまったと思った。やましいことなんて何も無いのに。

ノーアが沈黙を保つと、ゲイルは何も言わずに部屋に入った。セリが一度腰を折って一礼し、何も言わずに部屋を出る。ゲイルは窓辺にある椅子に腰掛けて、ノーアと一定の距離を取った。

扉には、ノーアの方が近い。彼なりの配慮なんだろうと気づいたのはもう随分前のことだ。

「……愛していたのか、王子を。イシュヴィリアナを？」  
もう一度問われる。

質問を二度繰り返されるのは初めてだった。だから思わず、ノーアも答える。

「愛していたわ」  
ノーアは迷いなく即答した。

それは恋心じゃなかったけど。

愛にもたくさん種類がある。恋愛、友愛、親愛、家族愛 数え始めればきりが無い。アジムに感じていたのは間違いなく家族愛に近いものだった。

「イシュヴィリアナも？ 国王も？」

「もちろんよ。私はこの国を愛しているし、陛下は敬愛していた。

……父親のようにも思っていたわ」

最後は余計だったかもしれない、とノーアは言うてから思う。

「あの王は素晴らしい王だった」

窓の向こうの、青い空を見上げてゲイルが呟く。

その言葉でノーアに火がついた。

「だったらどうして侵略なんてしたの！？ 放っておいてくれれば

良かったのよ！ 国を豊かにするためには何をしてもいいというの

！？」

「国を豊かにするのは王の使命だ でもイシュヴィリアナに攻め

た理由はそれじゃない」

射抜くような強い目で、黄金に輝いて見えるようなその瞳でゲイ

ルはノーアを見つめた。ノーアは射竦められて何も言えない。

「いずれイシュヴィリアナは滅んだだろう。その先にあるのは周辺

の国々による土地の奪い合いだ。国は分裂し、民は死に、文化は失

われていく。イシュヴィリアナという国があったという証拠すら残

らない」

それが耐えられなかった、とゲイルは呟く。

「イシュヴィリアナという国は何百年後も 何千年後も残らなけ

ればならない。たとえ国という形を成していなくても。この国の文

化はそれだけの価値がある」

「……………そんなのあなたの勝手じゃない。今じゃいけなかった理

由なんてないわ」

怒りか、悲しみか、ノーアは瞳に涙を溜めて、それでもそれを零

さずにゲイルを睨んだ。

今でなければ おそらくオルヴィスはイシュヴィリアナを攻め

られなかった。国がまだ未熟である今だからこそ、出来たことだ。

国が成熟し、平安を求めるようになってからでは戦争は起こせない。

強引な戦いは出来ない。

そして現在のイシュヴィリアナ王家は、王と、その長男である王子だけとなっていた。その他の王子も姫も皆何らかの理由で亡くなっていた。それも一つの大きな要因だ。

しかしそんなことをこの目の前の少女に言っても意味はない。彼女は帝王学を知らないから。

ノーアにしてみればゲイルの自分勝手な理由で、当たり前前の日常を、親しいもの達を奪われたのだ。

「罵ってくれてかまわない。それはおまえに与えられた権利だ」  
ゲイルが静かに呟く。

ノーアは何か言おうとして口を開き、困惑して黙り込んだ。

育ちのいい彼女には、人を罵るような言葉が分からなかった。心を深く抉るような言葉があれば迷わすそれを目の前の男に向かっていうのに、彼女の頭にそんな言葉はなかった。

迷いに迷った末で、呟いた言葉は

「……陛下は、今」

どうなさっているの、と言った。

イシュヴィリアナ王が死んだのはもう二週間も前だ。そしてイシュヴィリアナは戦争に負け、侵略され、王子が処刑されて五日。

「……戦場から運ばれて、丁寧に埋葬した。……王子も」

「……陛下は、どんな顔をしていた？ アジムは？」

結局父のように慕っていた王の眠る顔を見ることも出来ず、ノーアはそれが悲しかった。一国の王が死んだというのに、葬儀も行わない。

ゲイルが迷っているのか、沈黙していた。

「正直に教えて」

「穏やかな顔をしていた。二人とも。少し微笑んで……信じないかもしれないが」

そう、とノーアは呟く。

アジムとして死んだジルダスに、悔いはなかったのだろう。彼は本当にアジムに尽くしてきた。病魔に冒された身体を使って、最期

にはアジムとして死んだ。それはきつと彼にとって誇りある死だったのかも知れない。

「……楽園には、王妃様も姫君もいらっしやるもの。陛下はきつと寂しくないわね」

愛した妻が待つ場所に逝ったのだから、そう悪くはなかったのかも知れない。

ゲイルが教えてくれた真実は、嘘かも知れない。でもノアアのは少し救われた。悔いのない死だった。それはノアアにとって、ほんの少し喜ばしい知らせだ。失った悲しみは癒えないにしろ、少しは心が軽くなる。

アジムはきつと、長い時間をかけてオアシスへ辿り着くだろう。

あの土地は不可侵の場所。逃げ切れればアジムの将来も穏やかで優しいものになるに違いない。

「 ありがとう。教えてくれて」

儚く微笑みながら、ノアアは初めてオルヴィス王に感謝した。

ゲイルに見せる、最初の笑顔だった。

ノアアは気づかない。

それがどれだけゲイルの心を揺さぶるかを。

どんな罵りよりも重い言葉だったのだと。

ゲイルはノアアの、散りゆく花のような微笑みを見つめて、胸を痛めた。

罵ってくれば楽なのに。

よりもよって、ありがとうなんて。

この瞬間　ゲイルの心には確実に、ノアアの笑顔が焼きついていた。

太陽の消えた国、君の額の赤い花

## 6：隔たり

「いつまで聖女を生かしておくのですか」

「生かしておくだけならまだいい。あの女を后にするのは危険です」

「どこかに　そうあの塔でもいいでしょう。幽閉して一生外に出さない方が……」

「陛下、ご決断を　」

頭痛がする。

いつもいつも同じようなことばかり言いやがって。他にすることがあるだろう。

苛立ちを押さえながらあの少女に会いに行く。

ほんの少しずつ、会話をしてくれるようになった。もう少し心を開いてくれるようなら、あの塔の外に連れ出そうとも考えてる。話に聞くと、聖女はあの塔から出ることが出来なかつたらしいから。

月の塔はそれほど遠くない。周りのうるさい連中がいなければ、出来るだけ顔を出したいと思う。一人できつと彼女は心細いだろうから。

愛馬からおり、入り口の兵に声をかける。

「聖女は？」

彼らには様子をいつも聞くようにしている。毎朝楔に行くらしいから、彼女と言葉を交わす機会が多い。

「お変わりなく。今は奥の花園にいらっしやいます」

わかった、と答えて塔に入らずに花園へ向かう。彼女に会いに来ているのだから彼女のところへ行くのは当然だ。

塔の敷地は広い。堀に囲まれた中に広い庭がある。色とりどりの

花が毎日咲いている。そのさらに奥に、聖女が身を清める泉があるらしい。

様々な花が咲き乱れる花園に、ノアはいた。

月光を集めたかのように輝く銀の髪に、ゲイルは思わず目を細めた。

小鳥のさえずり、木漏れ日、花の間を舞う蝶。それはまさに楽園のようで、厳しい現実からゲイルをほんの少し和ませてくれる。

「……………」

声をかけようと思って、なんと呼べばいいのか分からず口を閉じた。

しばらくノアの姿を眺めていたような気もして、ただその場に立ち尽くしたまま温かい日の光を全身に浴びる。

「……オルヴィス王」

ノアがゲイルに気づき、振り返る。

わずかに微笑んでゲイルはノアに歩み寄った。

「何か、困ったことはないか」

いつも必ず、最初にこう問いかける。

「いいえ。ここは慣れ親しんでいる場所だもの」

そうしてノアは必ずこう答えるのだ。決まりごとのように、会うたびに交わされる言葉。

普通の姫なら、宝石やドレスを贈れば喜ぶのだろう。だがノアはそんなものでは微笑んですらくれない気がした。だからゲイルはどうすればいいのか分からず、いつも大したことを話せなかった。

ノアはあれからさっぱりと、自らを傷つけようとはしない。それが自分には無理なことだと悟ったのかどうか、ゲイルには知る術がなかった。逃げる様子もないので、塔の入り口に兵がいる以外にノアを拘束するようなものはない。

「葉がついてるわ」

ノアが手を伸ばし、それでもゲイルの赤い髪には手が届かなか

った。必死で背伸びしている様子が微笑ましく、ゲイルは少し屈んだ。

ノアの小さな手がやっとその葉を捕まえ、ゲイルの髪に触れる。「本を読んだのか」

大きな木の下にある一冊の本を見つけて、ゲイルが問う。

「ええ、天気が良かったから」

「では、俺もここで一休みするか」

置いてある本のすぐ隣に腰を下ろし、木に背を預けた。

ノアが少し戸惑う素振りを見せながら、そっとゲイルの隣に座る。かすかにノアから甘い香りがして、ゲイルは何の香りだろうと思う。

「……頻繁に塔にやって来るけれど、国王ってそんなに暇な職業なの？」

本に目を落としながらノアが問いかける。

皮肉だろうな、とゲイルは苦笑した。聖女であるノアは王家に詳しいはずだ。国王が多忙であることくらい知っているだろう。

愚かな王でなければ、の話だろうが。

「暇を見つけて、来てるんだ。話し相手くらいほしいだろう」

「……話し相手くらいだったらあなたじゃなくても事足りるわ」

最近は何の塔にいる女官とも、それなりに会話を交わすようになったらしい。女官からそう聞いている。

「ここは思いのほか居心地がいい。城はどうにも落ち着かない。早く身を固めるだのうるさい爺どもが多くて」

「まだ、私を后にするつもりなの？」

困惑した、ノアの声。

ああ、身を固めるという意味をそうとったのだろうか、とゲイルはぼんやりと思う。あの爺どもはきつとノアを相手には考えていないだろうが。

「俺はそのつもりだ。おまえが良いと言うならすぐにも城に迎える準備を始めるが？ 俺の妻になるくらいなら死んだほうがましだ

と言ったのはおまえだぞ」

意地悪なセリフかな、と思ったが、あえて言う。

案の定ノーアは黙り込んで、読みもしない本を睨みつけていた。

死ぬことも出来ないが、俺の妻になる気もない、か。

少し心が痛む。

ほんの少しずつだが、確かに打ち解けてきてくれていると思ったのに。

「偏屈爺どもは、おまえを後に迎えるのに猛反対してるがな。あいつらは自分の可愛い娘なり孫なりを王妃にしたいんだろうな」

沈黙。

ゲイルはため息を隠さずに吐き出した。

このことに関してはノーアは話す気がないらしい、彼女から話し出したことだというのに。

「……………オルヴィスには後宮はないの？」

沈黙。

今度はゲイルが黙る番だった。

まさかノーアからそんなことを聞かれるとは思わなかったのだ。

「……………一応形だけは残ってるが、俺はそんなものつくる気はない。金の無駄だし、俺は何人も妻を持つ気はない」

「……………そう　イシュヴィリアナにも昔はあったそうよ。陛下が廃止なさったけど」

ぱたん、とノーアは本に頬を挟んで閉じた。

そしてゲイルの榛色の瞳をじっと見つめた。

「でもだったらなおさら理解できない。わざわざ敵国の女を后にするなんて。殺してくれと言っているようなものだわ」

「おまえにはその権利があると思ってる」

きっぱりとゲイルは即答した。

彼女には少なくとも一度、ゲイルを殺す機会があったにも関わら

ず、彼女はゲイルに傷一つ負わせなかった。

「……イシュヴィリアナの聖女を後にすれば、民が懐柔できるのも？ 無駄なことよ。民は聖者がいなくても生きていける。」  
いつかアジムに言われたことを、ゲイルに言う。

「しかし聖女を殺せばイシュヴィリアナの民から反感を抱くだろうな。下手すれば反乱が起きる」

「あなたは愚かだけど、馬鹿じゃないのね」

ノーアが苦笑した。

彼女なりの精一杯の反抗だったのかもしれない。

「おまえは、賢いな」

ゲイルは素直にノーアを賛美した。

十六歳という若さでそれだけ理解していれば十分だ。見る限り基本的な教養もあるし、礼儀作法も備わっている。ただの貴族の美しだけの娘よりも、何倍も魅力的だった。

「私を殺せという意見もあるんでしょう？ 大丈夫なの。無視して」

冷静なノーアの言葉に、ゲイルは苦笑した。

「安心しろ。おまえの身は守る」

「そんなこと言っても絆ほだされたりしないわ。あなたはちゃんとしたお姫様をお后様にしたほうがいいと思う」

ふい、とノーアが顔を逸らす。

少し照れているように見えるのは錯覚なのだろうか。

「俺としてはおまえ以外は視野に入れていないんだけどな」

最初はもちろん利用価値だけで考えた。

イシュヴィリアナの聖女。神の愛娘と呼ばれる少女。殺せば民から不満の声が湧くのは分かりきっていたし、逆に後にすればイシュヴィリアナの民が従順になるだろうと思った。

ゲイルから見れば正直ノーアは幼いと思う。しかし芯はしっかりしていて、聡明だ。美しく着飾ることしか考えていない貴族の娘なんかよりよっぽど良い。

「……つりあわないわ。年齢も、外見も」

そうだろうか。年の差は九歳離れているが、そんなものが気になるのは今のうちだけだろう。外見だって、気にするようなものだろうか？ ノーアの美しい、絹糸のような銀の髪も、青い瞳も肌は透き通るように白く、手足は強く握り締めれば簡単に折れてしまふいそうなほどに細い。

「それに」

ノーアは呟く。

いつになく暗い瞳だった。

「私、あなたを信じられない」

頭を殴られるような衝撃だった。

どうしてこんなに胸が痛むのか、ゲイルには分からない。

けれどたぶん、自分は彼女に信頼して欲しかったのだ。

彼女を支えられる人間になりたかったのだ。

## 7：死の予感

何度、自分に言い聞かせればいいのだろう。

彼を信じてはいけない。

彼に心を許してはいけない。

彼に頼ってはいけない。

やはりあの時、この命を絶つていれば良かった。

あの時、彼の胸に短剣を突き刺していれば、こつも胸が苦しくなることもなかった。

私が願うのはアジムの幸せだけ。

この世に残されたたった一人の家族の無事だけ。

私のことなんてどうでもいい。

そう、どうでも。

「ノーア様、ご気分でも悪いのですか？」

セリが心配そうにノーアの顔を覗いてくる。

「風邪でもお召しになったんでしょうか。今日は少し寒かったですもの」

「……大丈夫よ、心配しないで」

無意識に笑顔を作つて、ノーアが答える。

聖女として常に人に見られる立場だったから、平気な顔をするのに慣れていた。

「陛下と、何かあったんですか？」

躊躇うように問いかけられる。この女官はなんでもお見通しじゃないかと思うほどの確に話しかける。

ノーアは苦笑した。

なんと言えばいいのだろう。

后になれと、そう言われた。無理だと、理解できないと答えてそれから、何と言っただろうか。

『私、あなたを信じられない』

そう言った時に、彼が悲しい顔をしたような気がしたのは、錯覚だったのだろうか。

自分に言い聞かせるための言葉だった。喉に張り付いて離れないまま、声にすることが出来ずにいたそれを、ようやく口にして、私は生まれて初めて人を傷つけてしまったのだろうか。

「何もないわ。何かあるほど、長く話なんてしないもの」

イシュヴィリアナが消え、かつてアジムや国王が暮らしていた城にオルヴィスの者が居座るようになって、もう一ヶ月以上になる。

「私から見ると、陛下はノーア様を大事になさっているように見えます」

「可笑しな話ね。たかが一ヶ月と少しのことでしょう？ オルヴィス王は私を手駒としか考えていないわ」

そう言いながらもノーアもどこことなく感じていた。

ゲイルが少し距離を置きながらも、自分を見守っていてくれるような視線に。そうやって見守られることに慣れていくから。

「手駒ならば、ここまでしません。陛下は良き王でもありますから利用するおつもりなら、とつくに……」

セリはその後には口籠もるだけで、はつきりと言わない。

「とうの昔に、后にされているわね」

躊躇いなくノーアがそう言つと、セリが頬を赤く染める。

ノーアには男女に関する知識がないので、セリが顔を真っ赤にし

ている意味が分からない。

「周りが許さないだけじゃないかしら。私は敵国の者なのだし」

「でも 町ではけっこう盛り上がってますよ？」

町で？ とノーアは首を傾げた。

城下ではオルヴィス王がイシユヴィリアナの聖女を後に迎えると、早くも噂されていた。

戦争が終わり、王家の人間を処刑していながらも聖女を生かし続けていたということを、そういった方面に結びつけるのは無理もないことだ。何より国王が忙しい政務を抜け出してまで聖女に会いに行っているのは事実で、それが妙に噂に信憑性をもたらした。

元は敵同士でありながら恋に落ちた二人と、民は楽しんでるよ  
うだ。

「どこからそんなものが……愛し合ってなんてないし、オルヴィス王だってそういう意味でここに来ているわけじゃないでしょう」  
はあ、とノーアはため息をつく。

ずっと立ち上がり、薄い夜着の上に着を羽織る。

「ノーア様？ どちらに……」

「少し散歩に行くわ。夜風に当たりたいの。庭に出るだけだもの、  
かまわないでしょう？」

セリはお気をつけて、と言っただけで後をついてきたりはしない。

ノーアが逃げるとは思っていないし、門と入り口には兵もいる。

不審者がこの月の塔に入ってくることはありえない。

だから、油断していた。

月は変わらず、夜空に浮かんで輝きを放っている。

少し肌寒く感じる風を頬に受けながら、ノーアは淡い光を地上に

落とす月を見上げた。

月は自分と同じだ。

激しく輝くことなく、太陽の光を受けてそっと光る。いつだって

主役にはならない。太陽の傍らで見えなくなっていればいい。いつだったか アジムが、ノーアの髪は月のようだと言った。同じ銀髪なのに、と首を傾げるノーアを見てアジムはただ微笑んでいた。銀の髪も、青い瞳も同じ イシュヴェイリアナではありふれた色彩だ。

その時ノーアはアジムのことを太陽のようだとは思えなかった。むしろ太陽のようなのは。

あの燃えるような、夕日のように温かな赤い髪。金色にも見えるはしほみ榛色の瞳。

「オルヴィス王」

呟いてどこか違う、と感じた。

そして当たり前前だと思う。それは彼の地位。あの赤い髪の青年の名前ではない。自分が聖女と呼ばれるのと同じ。

「…………ゲイル」

彼の名前。

一度も口にしたことのない響き。

心のどこかにすんとん、と何かが落ちた。太陽のようなのは、あの青年だ。ゲイルという名前の。

「それが、オルヴィス王の名前ですか」

ノーアは声が聞こえた方に振り返る。

誰もいないはずだった。女官はもう皆休んでいる。兵がいるのは門と入り口だけ。

暗闇から人が浮かび上がる。

その声は女性のもので、ノーアにも聞いたことがあった。

「…………ニル？」

長い間、この月の塔で共に暮らした修道女。イシュヴェイリアナが

滅んだ夜に、この塔から逃げたはずだ。

「お久しぶりです。ノーア様」

にっこりと優しい微笑みを浮かべる彼女は、少し痩せたようだ。

「ニル、どうしてここに……皆は無事に逃げたのよね？」

「ええ、ノーア様が持たせてくれた書状もあって、新しい修道院に入れました。ありがとうございます」

良かった、とノーアは安堵する。

ゲイルに聞くことも出来ず、確かめようがなかったので、ずっと気がかりだったのだ。

「噂を聞いて、じつとしていらねずにこうして会いに来ました。ノ

ーア様。オルヴィス王の后になるというのは本当ですか」

「それは」

ただの噂だと、すぐに言えなかった。

后になれと言われたのは事実だし、ゲイルが強行すればそれはすぐにも現実になってしまっただろう。

「……本当、なんです」

「ニル、違うわ。その」

慌ててノーアは説明しようとした。

どうしてだろう。焦る必要などない。やましいことなど何一つないのに。

怖い？

ニルが？ どうして？

ずっと一緒に、この塔で暮らしてきたのだ。仲も良かった。姉のように感じていることもあった。

なのに、ノーアは目の前に立つ彼女を怖いと思った。

「いけません。ノーア様。あなたは聖女なのです。あなたの相手はアジム様だけです。あのような愚かな王になど心を許しては」

「許してなんかない！ 信じてなんかない！」

ニルがノーアの耳元で囁く。

「本当ですか？ ならば何故、先ほどオルヴィス王の名を呟いていたのです？ 何故あんな顔で」

分からない。そんなことノーアには分からない。

ただ、何故か思ったのだ。太陽のようだと。あの温かい赤が。

「あのような男に穢されてはいけません。大丈夫ですよ、ノーア様。私がアジム様のもとへ連れて行って差し上げますから」

そう言っただけ微笑むニルの顔は狂気じみていた。

優しい面影など微塵もない。

「ニ、ル……？」

足が凍り付いてしまったかのように動かない。声も掠れて、そう遠くない場所にいる兵に助けを求めることもできなかった。

うつすらと微笑むニルの手には、短剣が握られている。

「楽園へ行きましょう、ノーア様。アジム様が待っていますからね。私もすぐに後を追いますからね」

違うの。ニル。

天の楽園にアジムはいないの。彼は今頃、地上の楽園に 神に愛されるオアシスに ……。

そう言おうとした時には、ノーアの腹部に短剣が突き刺さっていた。ノーアの夜着がじわじわと紅くあか血色に染まっていく。

あまり痛みはなかった。

ああ やはり死ぬ時には痛みを感じないものなのね。

これで良かったのかもしれない。

ノーアだけが知る、アジムの生存もこれで闇に葬られる。

彼を信じてはいけないと言いつつ聞かせ続けて苦しむこともない。

太陽の消えた国、君の額の赤い花

「

太陽の名前を呟いた。

.....」

それが、声になっ  
ていたかは分  
からない。

7：死の予感（後書き）

ええと……かなり凄いところで続いてますが、とりあえず書き上げ  
れたら即掲載、という感じでいきたいなあ、と思います。あんまり  
読者様をお待たせしないようにと心がけてます。

感想いただけましたらたぶん小躍りしながら喜ぶので良ければ「読  
みました」の一言でも。

急いで続き書きます。

## 8：君の側に

全身の血が凍った気がした。

いや、本当に凍り付いてしまったのかもしれない。こんな体験は初めてだった。

「陛下、月の塔で聖女が刺されました」

その報告を聞いた瞬間に飛び出した。仕事なんて放っておけばいい。

誰が、何のために、あんなに小さな弱い少女を傷つけるというのか。

「報告は全部聞くものでしょう。陛下」

ついて来た幼馴染兼有能な部下であるロハムは、呆れたように呟く。

ゲイルの愛馬に追いつくことができるのはこの男くらいだろう。

「うるさい。目で確かめたほうが早い」

「一応聞いといてくれよ、聖女を刺した犯人は女だそうさ。兵が駆けつけた時には既にそいつは自害していた。聖女は腹部を刺されて現在は意識がない。すぐに応急処置を施されておまえよりも早く城の侍医が向かった」

自分よりも他の人間に早く知らせがあつたことを腹立たしく思いながら、医者がすでにノーアの手当てをしているだろうということにがせてもの救いだつた。

「命は」

助かるのか、というゲイルの呟きに、ロハムは冷静に答える。

「そこまで詳しいことは報告されていない」

チツ、とゲイルは舌打ちする。

やはり自分の目で確かめるしかない。

どうしてこんなにも自分が動揺しているのか、少し不思議に思いながらもゲイルは馬を走らせた。

そう可笑しいことばかりだ。彼女に関しては

王子を愛していると言われた時も、自分を信じていないと言われた時も、そして今も。こんなに心が揺れているなんて。

答えが分からないほど子供でもない。

とうの昔に気づいている。

自分は、あの幼く気高い、イシュヴィリアナの聖女に心を奪われたのだと。

暗い。

寒い。

楽園はどこだろう。あの優しい陛下はどこにいるんだろう。……

ニルは、いるのだろうか。いないで欲しい。

ノーアはきつく目を閉じたまま、暗い闇の中に漂っていた。

手足に感覚はなく、瞼が重くて開かない。

死んだのだろうか。

……死ねたのだろうか。

『ならば何故、先ほどオルヴィス王の名を呟いていたのです？ 何故あんな顔で』

どんな顔をして、私は彼の名を呟いていたんだろう。

ノアには分からない。分かるのは、自分がニルを裏切ってしまったのだということくらいだった。

やはりノアはゲイルを許してはいけなかった。信じてはいけなかった。ほんの　ほんの少しでも、心を開いてはいけなかった。

信じるなど自分で言い聞かせながら、彼の訪れを心地よく感じていた。時々見せる、穏やかな微笑みが好きだった。日だまりにいるように、優しく包み込まれるような眼差しに安堵していた。

しかしそれはニルに対する裏切りだったのだ。

だから、これは当然の報い。

私が受けるべき当然の罰なんだ。

寝台に横たわるノアは青白く、どこか生气に欠けていた。

セリが目を真っ赤にして泣いている。それを宥めている他の女官は比較的冷静だった。

「……………陛下」

セリがゲイルにいち早く気づき、顔をあげる。

「……………聖女は」

一階の、いつかゲイルが一晩泊まった部屋だった。塔の最上階までノアを運ぶ余裕はなかったのだろう。

「意識が戻りません。かなり出血したようですが、傷は塞ぎました。幸い急所は避けてました。内臓に傷もありません。ですが……………」

医師が言葉を濁らす。ゲイルは眉を顰めて、続きを促した。

「何か問題でも？」

「　屈強な兵士とは違います。体力もない。このまま意識が戻らないようだと、危険かもしれません」

ゲイルは血の気のないノアの顔を見つめる。

びくりとも動かないそれは、まるで人形のようにだった。死んでしまっているのではないだろうか、不安になる。

「……そうか。引き続き彼女についていてくれ」

静かにゲイルが医師にそう告げ、ノアの枕元まで歩み寄る。

今までそこにいたセリが場所を空け、他の女官に引きずられるように部屋を出て行った。

細い絹糸のような銀の髪をそつと撫でる。そのまま流れるように触れた頬は驚くほどに冷たく、そして滑らかだった。

「……ロハム。報告の続きを」

ノアの顔を見つめたまま、ゲイルが静かに命じる。

今まで黙って、扉に寄りかかりながらゲイルを見ていたロハムは姿勢を正すと淡々と話し始める。

「聖女を刺したのはもとはこの塔に住んでいた修道女で、名前はニル・ルヴィータ。年齢は二十八歳。門以外のどこから侵入した模様。今、兵に探させている。イシュヴィリアナがオルヴィスの占領下になった時に、ここから少し離れた修道院に逃げ、保護されている。その際聖女の名の書かれた書状も持っていた……今のところはこのくらいだ」

「……なぜ聖女を刺した？」

「俺が知るかよ。本人に聞け。もう死んでるけどな」

「もしも死んでいなければ、考えられるだけの残酷な方法で殺している。」

ゲイルはそう呟いた。

ロハムは聞かなかつたふりをして、沈黙した。

「その女の死体は？」

「現場にある。シーツをかけられてるけどな」

ゲイルの問いに、ロハムは即答した。

静かに問いかけるゲイルを見て、相当に怒っていることは察し出来る。あまり刺激しないように最低限の言葉で答えた。

「野犬の餌にでもしてしまえ」

吐き捨てるように言われたその言葉に、ロハムはため息を吐き出す。

「聖女様の知り合いなんだろう？ そんなことしたら目が覚めた時にどう言い訳するんだよ？」

「自分を刺した人間の心配をするか？」

ゲイルがやつとロハムを見て、そして苦笑した。

たぶん、この少女ならするんだろうと心のどこかで思ってしまった。

「相手は聖女様だからな。目が覚めてから決めても遅くないだろう

恨まれるのは嫌だろう？」

「もう恨まれてる」

そつとノアの頬を撫でながらゲイルが即答した。

「なんとも難儀な女に惚れるな、おまえは」

はあ、とため息を吐きながらそう呟く幼馴染を驚いたように見つめながら、ゲイルはいつ気づかれたんだろうと思う。

「なんだよその顔は。俺を誰だと思ってる？ オルヴィス王の幼馴染様だ。見てりゃバレバレなんだよ。朝になったら帰るぞ。陛下

下

ひらひらと手を振って部屋から出て行く幼馴染を、ゲイルは呼び止めた。

「ロハム。悪いが頼みがある」

何を今更をいった顔で振り返ったロハムに向かって、ゲイルは真剣な顔で城に戻るように言った。

「なんで？」

「目を通さなければいけない書類があるから、全部持ってきてくれ」「はあ！？ 全部！？」

いつも執務室の広い机に何束も積み重ねられたそれは、どれほどの量があるか分かっているのだろうか。

「なんでんな書類持ってこなきゃならん！？」

「城には戻らない」

きつぱりと、ゲイルは告げる。

「彼女が目覚めるまでこの塔から出ない。書類はすべて運べば済むだろう。朝議は　二、三日無視してもかまわないだろう。どうせオルヴィスに戻ろうだの、とつとと聖女を殺せだの監禁しろだの拳句には自分の娘はどうだのと意味のない話ばかりだ」

「……いやあ、あの爺さんどもにしてみりゃ真剣な話なんだろうよ」  
ロハムは開き直ったゲイルを見て呆れながらも、結局は彼に力を貸してしまう自分は馬鹿だな、と思う。

「じゃあねえ、行ってきますよ。ええ、国王陛下からのお願いですからねえ」

「頼んだ」

馬で運ぶよりも馬車を使った方が効率がいいだろうな、と考えながら、ロハムは入り口で振り返る。

「いいこと教えてやるう。国王陛下」

「……なんだ。さつさと行け」

鬱陶しげにロハムを睨みつけてくるゲイルを、ロハムは意地悪そうに笑いながら見る。

「お姫様は王子様の口づけで目覚める。物語の黄金のルールだ」

そう言い残して、ロハムは部屋から出て行った。

馬鹿なことを　とゲイルは失笑しながら、ノーアの顔を見つめる。

いつも赤く色づいている唇も、今は血の気のない紫色で。

そつとその唇に手で触れて、かすかな呼吸を感じて安堵する。試してみようかなんて気分で、顔を近づける。

「……愛していたのか、王子を」

「愛していたわ」

あと数センチもすれば唇が触れるだろうところで、ゲイルはそんなやりとりを思い出す。

彼女の返事に迷いはなかった。

「……王子様は、俺じゃないか」

自嘲的に呟き、それでもせめてもの抵抗でノアの額の、赤い花の痣　聖痣に口づける。

「……ノア」

何度も口にしようにして出来なかった、狂おしいほどに愛しいその響きに、ゲイルは切なくなる。

間近で彼女を見つめても、その目が開くことはない。

あの澄んだ青い瞳を覗かせることはない。

やはり自分のキスでは目覚めない。

楽園で、王子に死の口づけでもされてるんだろっかなんてゲイルは苦笑する。

それがありえないことだと、ゲイルは笑い飛ばすことができないから。

太陽の消えた国、君の額の赤い花

8：君の側に（後書き）

今回はかなり急ぎました。  
そして次も急いで書きます。待っていてください！

## 9：楽園の住人

ノーアが重たい瞼を開けて、一番初めに飛び込んできた色。

銀の髪。

青い炎のような瞳。

それはノーアにとって馴染み深い人の色彩。

「……………アジム？」

柔らかく微笑んでノーアが呟くと、『アジム』は困ったように微笑み返した。

アジムはそんな風に笑わない。いつもノーアが呼んだ時には優しく、そして自信に満ちた笑顔を見せてくれるのに。

「……………あなたに間違われたのは初めてですね。ノーア様」

その声もアジムのそれとよく似ていた。けれど違うと、ノーアは断言できる。アジムはノーアを様なんてつけて呼ばない。

「……………ジルダス？」

そうして辿り着いた答えは、アジムの影武者であり、彼の代わりに処刑された青年だった。ジルダスはまた、困ったように微笑む。

「ではここは楽園？　ああ、やっぱり私は死んだのね？」

「……………はい、そしていいえ。ここは楽園　死者の国です。しかしノーア様は死んでいません」  
ふわ、と風が吹いた。

甘い花の香りが鼻腔をくすぐる。ノーアが横たわっていたのは花畑の中だったようで、ノーアとジルダスを囲むようにたくさんの花が咲き乱れている。

「死んでない？　だってここは楽園なんでしょう？　そして私は楽園にいるんでしょう？」

「ノーア様の身体はまだ地上と繋がってます。今ならまだ戻れる。」

案内します」

「いらないわ」

立ち上がり、優しく手を差し伸べたジルダスに、ノーアはきつぱりと答えた。

自分は死んだほうがいい。その方がいい。いろんな人のためにも。

「……ノーア様、アジム様と約束なさったんでしょう？」

諭すように優しくジルダスに囁かれ、ノーアは驚いたように顔をあげてジルダスを見つめた。

それは、ジルダスを知るはずのない約束だ。

「アジム、約束して？ また会おうって。そのときはオアシスの姫も一緒に」

『分かった、約束しよう』

ノーアの喉がからからに渴いていた。

言葉が上手く出てこない。

「……それは」

アジムを逃がすための、偽りの約束だ。

初めからノーアは守ろうと思っていなかった。その時には自分の命を絶つ覚悟を決めていたから。

「約束は守らなければ駄目だと、教わったでしょう。もう子供じゃないんですから、きちんと守ってください」

ジルダスはかがみ、座り込むノーアと視線の高さを合わせる。

「ジルダス。私には分からないの」

ノーアは服の裾を握り締めた。

駄々をこねる子供のように、感情に任せて言葉を吐き出した。

「どうすればいいの？ あの人を信じなければいいの？ 私が死ぬばいいの？ でも でも私もう分からない。あの人を心の底から憎むことができない。だって本当に、優しく笑うの。私のことをそ

つと見守ってくれるの。悪い人だなんて思えなくて　私は何をすればいいの？　あの人の后になるの？　そうしてもいいの？　それでイシュヴェリアナの人達は怒らない？　ニルは怒ったのよ。あの人の名前を言ったから。親しくしてしまったから。だから私のこと

「

刺したのよ、と最後は力なく呟いた。

ああ、本当に子供みたいだ、とノーアは冷静な部分で苦笑する。

でもこうして吐き出したかった。誰かに聞いて欲しかった。それはゲイルでも、セリでも、アジムでもいけなかった。

「……ノーア様の、望むように」

優しく微笑んで、ジルダスは答えを教えてくださいました。

「わたし、の」

望むことはなんだろう、とノーアは思った。

今まで恵まれた環境で育つたのだと思う。食べ物に困ることも、ぼろぼろの服を着ることもなく、月の塔という箱庭で大事に大事に育てられた。

ノーアは聖女で、人々の信仰の対象で、常に気高く、美しく、そして常人であってはいけなかった。そう言い聞かせていた。

小さな頃、月の塔の外に出たいと願った。

でもそれは無理だった。聖女は月の塔を離れることは許されない。

アジムのように、恋がしたいと思った。

でもそれは不可能だった。ノーアにはアジムという婚約者がいて、そしてノーアにはアジム以外に二人きりになる異性などいなかった。恋に落ちる機会が与えられなかった。

無理だから、不可能だから、いつからか望むことを止めて、与えられるもので満足するようになった。

「……憎むのは、もう疲れた」

ぼつりと、ノーアが零した呟きに、ジルダスはただ相槌を打つ。

「許せないけど、許しちゃいけないけど、憎み続けるのはもう嫌なの」

信じられないと、そう言った時の顔が頭を離れない。傷つけてしまった。

本当は、もう少し彼の話が聞きたい。いつもただ黙って側にいるだけじゃなくて、彼がどういう人なのか、どんな風に育ったのか、知りたい。

彼の名前を呼びたい。あの温かな太陽の名前。

あの赤い髪に触れてみたい。手のひらの傷は、痕が残ってしまっただろうか……確かめてみたい。

心の中に浮かんできた願いを口にするには曖昧で、ささやかで、そしてどうしてそう願うのかノアには分からず、俯いた。

「分からない。どうすればいいの？」

「……したいようにすればいいんです。ノア様、イシュヴィリアナに縛られてはいけない」

躊躇うようにジルダスは手を伸ばし、ノアの髪を撫でた。

生前は、こんなことしなかった。することも許されていなかった。何故かここで座り込むノアは、いつも以上に幼く、弱々しい生き物で、そうして慰めることが一番に感じた。

「ノア様、遺された者がしなければいけないのは、復讐ではありません。相手を恨み続けることでも、拒み続けることでもない」

さら、と髪を撫で続ける。

ノアは捨てられた子犬のように、無垢で無力で、ただじっとジルダスを見つめる。

「ノア様も、アジム様も、イシュヴィリアの生き残りとして、生きなければいけません。生き続けなければいけません。簡単に生を手放してはいけません。長く長く生きて、誰かと寄り添って、そうして幸せになってください。……それが、ノア様の使命です」

それは至極簡単で、難しいことのように感じた。

ジルダスは優しく儂げに微笑んでいて、ノアの髪を撫でてくれた。それは思いのほか心地よく、ノアは安堵していた。

「生きてください。ノア様。死んでいった者達のために」

ジルダスは髪を撫でていた手を離し、ノアアの小さな手をとって立たせる。自分の力で立ち上がるのはまだ出来ずにいたノアアは、少しふらつく。

ジルダスの肩越しに、壮年の男性を見つけた。

「……………陛下」

父のように慕っていた、優しいイシュヴェリアナ最後の国王。

生前と変わらない優しい微笑みを浮かべたまま、ノアアを見つめていた。

傍らには国王よりも少し若い女性がいた。おそらくノアアが会ったことのない王妃だろう。その隣に、幼い少女もいた。後ろには、どこことなくアジムに似た青年が。

イシュヴェリアナの国王一家だ。

「幸せになりなさい。ノアア」

国王はただそれだけ、ノアアに言った。

優しい微笑に、涙が流れた。

許されるんだろうか。

ノアアが望むまま、幸せに生きていくことが。

「ノアア様、向こうの明かりまで歩いてください」

ジルダスが指差す先に、明るい光が見えた。

「……………あなたは、後悔していないの？」

「何をです？」

ノアアの問いに、ジルダスは微笑みで返す。

なんでもないわ、と呟いて、ノアアは光を目指して歩いた。彼は後悔という言葉すらないのだ。

光が目前に迫り、ノアアの身体を包み込もうとした瞬間、ノアアは振り返った。

ただ穏やかに微笑み、見送ってくれる死者達に微笑み返す。

太陽の消えた国、君の額の赤い花

「  
……ありがとう」

光はノーアのすべてを包み込んで、真っ白な世界に誘った。

## 10：眠り姫

赤い。

赤い光がノーアの目に飛び込んだ。

眩しそうに目を細め、ノーアはその光に手を伸ばす。

温かい、優しい赤。

血の紅は嫌いだけど、こんな穏やかな赤は嫌いじゃない。どち  
らかといえは、好きだった。

そうまるで、太陽みたいな。

「……ゲイル？」

目を覚ましたノーアは、目の前に。今にも顔がぶつかりそうな  
ほどの至近距離にいる青年を見て、驚いた様子もなく、ただ名前を  
呟く。

飛び込んできた光はゲイルの赤い髪だったのか、なんてぼんやり  
と考えながら、何故かまだ夢を見ていると思った。

だって、彼がここにいるはずがない。

自分の寝室にいるはずがない。

一方ゲイルは突然名前を呼ばれたことに、そしてノーアが目覚め  
たことに驚いて、しばらく思考が停止していた。

伸ばしていたノーアの手が髪にそつと触れてきて、意識も戻る。

「目が 覚めたのか」

ほつと安堵したように、ゲイルは優しく微笑んだ。

つられてノーアも幸せそうに微笑む。

「夢を……見てたわ」

これも夢なのに、とノーアは誤解したまま、額がぶつかりそうな  
ほどに近くにいるゲイルに話しかける。

「とても、都合のいい夢 …… もう、あなたを恨まなくていいと私が幸せになればそれでいいんだと、言われたわ」

ノアはそう言いながら嬉しそうに微笑んだ。鬨りのない、綺麗な笑顔だ。

ゲイルは少し迷いながら、そつとノアの頬に触れた。彼女は嫌がる素振りもせず、ただゲイルを見上げていた。

「……誰に？」

そつゲイルが優しく問いかける。

「……陛下よ、それと ……」

すべてを言い終える前に、ノアの瞼は再び閉じられた。規則的な寝息まで聞こえてくれば、問い詰めようがない。

ゲイルは苦笑して、ノアの額に口づける。毎日何回か、密かに続けられた行為だった。

実は今さつきも額に口づけた直後で、ノアが目を覚ましたことに喜ぶよりも先に動揺してしまった。

ノアが刺され、意識を取り戻すまで、二日かかった。

初めて、名前を呼ばれた。

もう恨まなくていいと、そう言われた夢を都合のいいと つまり彼女も本心では、もう恨みたくないのだ。自分を。オルヴィスを。都合の良い夢を見ているのは自分じゃないだろうか。

本当は彼女の意識はまだ戻らずに、眠っているんじゃないだろうか。

彼女が微笑みながら名前を言ったのも、幻じゃないだろうか。

しかし今目の前で眠っているのはノアで、一度ゲイルの髪に触れた手はぱたりと落ちている。布団から出た右手だけが、ノアがほんの一瞬目覚めたことを証明してくれている。

王子様からじゃないキスも、少しは効くらしい。

「国王陛下、様子見もそれくらいにしていいかげん仕事……なにかあったのか？」

勘の鋭い幼馴染に、ゲイルは緩んだ頬を直すこともできずに素直に頷いた。

「聖女が今、ほんの少しだが起きた。意識が戻ったみたいだ」

へえ、とロハムは眠るノアの顔を見る。

「まあ、顔色もいいし、呼吸もしっかりしてる。もう大丈夫みたいですねえ、聖女様」

「ああ」

思わず微笑みながら、ゲイルは答える。

ついさつき起きた出来事を噛み締めることで精一杯だ。

「じゃあ陛下、いいかげん城に戻りますよ」

「は？」

「は？ じゃなくて。聖女様の目が覚めるまでは大目に見ましたが、もう見逃せません」

ロハムはゲイルの腕を掴み、引きずるように部屋から出る。

二日間城に戻らなかったことで、多少なりとも仕事が滞っていることは確かだ。

「休暇は終わりか。短いな」

ため息を吐き、ゲイルは大人しく城に戻る支度を始める。

正直ノアのことはまだ心配だが、また仕事の合間に様子を見に来ればいい。

「二日うるさい爺どもの相手をしなくて済んだだけ、よしとしたらどうですか」

「代わりに今日たっぷり厭味を言われるわけだ。まあ、覚悟の上でやったんだが」

今日の彼女の笑顔と、言葉だけで、それらに耐えるのは充分過ぎるほどの活力だ。

「一応、俺はあんたの味方ですよ。国王陛下」

幼馴染の遠まわしな声援に苦笑する。

「耄碌爺に負ける気はない」

きっぱりとゲイルは宣言し、ロハムは不敵に微笑み返す。

ノアを手放すつもりは、もう欠片ほどもなかった。

ノアは目を覚ました途端、腹部に痛みを感じた。

顔を顰めて、起き上がるうとするが力が入らない。諦めて大人しく頭を枕に預けた。

長いような、短いような、夢を見ていた。

あれは本当に楽園だったのだろうか。本当の、陛下とジルダスの言葉だったのだろうか。

そして　あの赤い髪に触れた。ゲイルの、あの優しい赤に。思っていたよりもさらさらとして柔らかかった。

間近で見下ろされながら、壊れ物にでも触れるかのように優しく頬に触れてきた。大きくて、温かなてのひら。傷跡の有無を確かめるのを忘れてしまった。

「ノア様！　お目覚めになったんですか！」

明るい声が聞こえてきて、枕元までセリが駆け寄ってきた。

そして自分でも、現実に戻ったのだと気づく。今までどこかぼんやりとされていた世界がはつきりと形作られる。

ニルに刺されて、そして　。

「……私は生きてるのね」

「ええ！　本当に良かったです。二日も意識が戻らずに、大変だったんですよ。陛下は城に戻らないと言ってここで仕事をなさってましたし　」

ノアが、え？　と聞き返す。

「……オルヴィス王が、ここにいるの？」

「いえ、もうお帰りになされました。一度ノア様もお気づきになりましたし、命に別状はないということでしたので。まあ、半ば強引に臣下の方に連れて行かれました」

ノアが目丸くする。

一度、目が覚めた？ ……自分が？  
では

「あれは、夢ではなかったの？」

そう呟いた途端に、事実が脳内に伝達され、体中が熱くなった。顔が火照って、赤く染まる。腹部から伝わる痛みすら気にならなくなるほどに、ノアは混乱した。

どこから、どこまでが？

まさか名前を呼んだ、あの瞬間には自分は目覚めていたのだろうか？

恥ずかしい。

何故か無性にそう思った。

「ノア、様？」

セリが首を傾げてノアを見つめてくる。

「な、なんでもないわ。なんでもないの」

必死で真っ赤になった顔をどうにかしようと試みても、どうにもならない。ノアの穏やかな人生の中でここまで顔が赤くなったのは熱を出した時以外にあっただろうか。

「？ 熱でもあるのでは お医師様を呼んできますね。ノア様は安静になさってください！」

セリが慌てて部屋を飛び出した。

静かになった室内で、ノアはこっそりため息を零す。

「……もう、あなたを恨まなくていいと」

そう、本人に言ってしまった。

次にどんな顔で彼に会えばいい？

彼の后になるくらいなら舌を噛んで死ぬとまで言い切った相手だ。  
嘘じゃない。そう、嘘ではないから余計に困る。

ゲイルがもう月の塔にいないことに少し安堵しつつ、少し寂しく感じる。

声が聞きたい。顔が見たい。触れたい。触れられたい。

そう思うは何故なのか、それがどんな感情なのか、ノアはまだ知らなかった。

## 11：月の塔

『ノア様の、望むように』

肩の荷がおりた。

あれほどまで彼を拒み続けていたのが嘘のように、心が軽くなった。

私が望むように　もう彼を憎まなくていい。

アジムのことはもちろん話せない。話せるわけがない。けれどそれ以外のことでは彼に頼るのは、悪いことではない気がした。

だから　三日ぶりに彼が月の塔にやって来た時、素直に嬉しかった。

嬉しいと、思った。

「オルヴィス王」

愛馬から降り立った赤毛の青年を見つけ、ノアは呟く。

持っていた花束を落としそうになって、慌てた。

「……あまり、出歩くなと言ってもきかないだろうな。傷の具合はどうだ？」

優しく微笑みながら、ゲイルはノアを見下ろした。

その後ろに見知らぬ男性がいるので、少しノアは緊張する。もともと異性と話すのは得意ではない。

「お医者様が散歩程度なら良いと　傷の治りが早くて驚かれまして」

言いながらノアはそう言った時の医師の顔を思い出した。普通ならまだ寝台から離れることは出来ないはずだと、目を丸くしてい

た。

昔からノーアは傷の治りが早い方で、さほど気にしていなかったのだが、今回のことで少し異常なのだろうかと首を傾げる。自分の出生を調べる方法もないので、どうにもできないのだが。

「そうか。無理はするなよ。傷口が開く」

ゲイルは少しだけ、迷ったように手を伸ばし、そっと優しくノーアの頭を撫でた。

「その花は？」

「……………ニルに、あげようと思って」

ノーアが小さな声で答える。

ニルに対してゲイルがかなり怒っているということは、セリなどから聞いた。しかしノーアの願いもあって、亡くなったニルは月の塔の、あの美しい中庭の片隅に埋葬された。罪人として扱うのは止めて欲しい、とノーアがゲイルに手紙を出した。

やはりゲイルは一瞬、優しかった顔を曇らせた。

「私の願いをきいてくれて、ありがとう」

ゲイルはこのことを公式に発表しなかった。

月の塔に不審者が侵入したということはゲイルの口から出されたが、ノーアが刺されたということは一部の人間にしか知らされず、ゲイルの二日間の滞在も結局はただの我がままということになってしまった。

「……………理解はできないが、当事者に言われれば仕方ないだろう。おまえはまだ俺の後ではなく、ただの聖女だから」

「聖女でもないわ。もうイシュヴィリアナはないから　ただ額に珍しい痣があるだけの、ただの女の子よ。特別な力なんて何一つない。だから、ニルを止めることができなかった」

そつとノーアが腹部に触れる。まだ包帯の巻かれているそこは、痕が残るだろうと言われた。

聖女とはつまり、イシュヴィリアナの聖女を略した呼び名に過ぎない。そもそも聖女はイシュヴィリアナの建国に関わる乙女から派

生した聖者だ。

他国の人間には聖女を敬う理由などない。だからオルヴィスの重鎮は皆ノーアを処刑しろと口うるさいのだ。

「ニルにとって私は理想の『イシュヴィリアナの聖女』だった。私がニルの理想を打ち砕いたから、ニルは己を失ってしまった。……見捨てられないように、見放されないようにと理想を演じ続けてきた私がいけなかったの。私にはこの小さな箱庭しかなかったから、ここの人達に嫌われたら最後だった。強く、気高く、汚れないそんな存在でなければいけなかった」

ぼつぼつと語るノーアの話に、少しゲイルは苛立った。

それでどうしてこの小さな女の子が刺されなければいけない？

勝手に理想を押し付けて、こんな狭い場所に縛り付けて　こんなに孤独で。どうしてこのか弱い少女がそんな風に扱われなければならないのか。

「ニルは特別に信心深くて　王家に対しても忠誠を誓っていたから、こうなったの。ここにいた修道女が皆そういう人なわけじゃないわ。だから、余計な心配は必要ありません。これはイシュヴィリアナに遺された者の問題で、あなたには関係ないことだもの」

そつとニルが眠る場所に花を供えたノーアが、振り向いてゲイルを強く見つめる。

ゲイルはその強い瞳を見つめ返ししながら、釘を刺されたのだと、すぐに気づいた。

国王というゲイルの立場からして、ノーアを刺した犯人がここにいた修道女だったと知った時点で、その他の修道女にも奇妙な動きがないか、監視をつけている。それに気づいて　もしくはそうなるだろうと予測して、ノーアはそれを止めようとしているのだ。

「……関係ないからといって、無視するわけにはいかない。おまえはもうオルヴィスのものだからだ」

まるで俺のものだと言っているみたいだと、ノーアは思った。

初めて出会った時に后になれと、そう言われた時より不快感はな

い。不思議だった。

「それなら、私に護衛をつければいいでしょう。一日中側にいるよ  
うな。その方が負担も減るはず」

賢いな、と後ろに控えていたロハムが呟く。

何ヶ所かの修道院に散らばった複数の人間を監視するより、守る  
べき者の守りをより強固にした方が確かに楽だった。ましてノア  
は、状況が変わればオルヴィスの人間からも狙われるだろう。

「……そうしたいのも山々だが、オルヴィスの人間におまえの護衛  
を任せるわけにはいかない。そしてイシュヴィリアナの者にもだ。  
それに男だと色々面倒だしな」

ノアが俯く。

自分のせいで他の人の迷惑になるようなことは避けたい。自分に  
見張りが増えるくらい、我慢できる。今だってそう良い状況ではな  
い。セリ以外の女官は相変わらず事務的な態度だし、話し相手とい  
えば今はセリと医師と。時折訪れるゲイルくらいだ。  
オルヴィスの者では暗殺の危険が高まる。イシュヴィリアナの者  
では、ノアを扇動して反乱を起こすかもしれない。

「おまえがこの塔から出て、俺の目の届く城まで来てくれればもっ  
と問題は簡単になる。后になれとは今は言わない……それは無理  
なのか？」

ノアは体中が熱くなったような気がした。

それはまるで 彼が、ノアを守ると言っているようなものだ。  
しかしそれは。

「……無理よ」

私はここから出ない。出られない。出たくない。  
ゲイルが不満げに眉を顰める。

どうして、と言い募ろうとしたゲイルを後ろにいたロハムは止め  
た。

「……無理だ。おまえが言ってることは聖女様にとってはおかなりの  
決断がいることなんだ。決めるとしても、今は急すぎる」

「しかしいずれは」

「ここから出て、城に来てもらつと、口に出しそうになつてゲイルは手で自分の口を塞ぐ。」

本音を言えばすぐ側にいて欲しい。危険な時にいつでも駆けつけられるように。月の塔と城でも充分に近いと思つたが、それは誤りだつた。近くない。知らされた時にはもうノーアは危険な目にあつているのだ。

「陛下、あなたはあまりにもイシュヴェイリアナについて知らない。これにはそれなりの理由があるんだ。俺の言うことなんだから、信じてくれるだろう？」

ロハムが真剣な顔で、そう言う。

彼はイシュヴェイリアナについて詳しい。それもそのはず、彼の母親はイシュヴェイリアナの貴族出身で、幼少期はイシュヴェイリアナを訪れることも多かつたそうだ。彼の情報は今回重宝された。聖女を殺すなど進言したのも彼だ。

母親似のロハムは白銀色の髪で、目は緑色だ。オルヴィス人というよりは、イシュヴェイリアナの人間に近い外見をしている。イシュヴェイリアナは銀髪が特徴的で、瞳も青や緑が多い。対してオルヴィスは赤や茶色の髪が多く、瞳も比較的濃い色ばかりだ。肌もイシュヴェイリアナ人に比べると少し濃いだらうか。

「……分かつた。無理強いをするつもりはないからな。警護をさらに増やせ。ロハム、後で聞かせろ」

かまわないが、とロハムは笑う。

「聖女様に聞いた方がいいんじゃないか？俺より正確だらう」  
突然矛先を向けられたノーアは目を丸くして、驚いている。

「え、その」

それもそうか、とゲイルはロハムの気遣いに感謝した。

戸惑うノーアの腕を掴み、中庭から塔の中へと向かう。あまり外にいと、傷に障る。

「別に特別なことじゃない、どうしてここから出ないのか、その理

由が知りたいだけだ」

でも、とノアはまだ迷ったように呟く。

一階の、すっかりノアの第二の寝室となってしまうた部屋まで連れて行き、寝るように言う。寝ながらも話ができる。

「問題でも？」

ゲイルの問いに、ノアは首を横に振った。

「ただ　　長く、なると思っけど」

ノアの言葉に、ゲイルは微笑む。

それはむしろ、ゲイルにしてみれば喜ばしい知らせだ。

## 12：神の愛娘

どうして、彼女が縛られなければいけない。

どうして、彼女がたくさんの重荷を負わなければいけない。

聖女だからか？

額にあの小さな花のような痣があるからか？

それだけで、彼女は　　。

この小さな箱庭から、出ることができないのか。

一人の人間をそこまで束縛する、聖女とは一体なんなのか　　。

ノアは部屋にお茶を運んできたセリに、自分の部屋からとある本を取ってきてくれるように頼んだ。自分で取りに行っても良かったが、目の前の青年がそれを許してくれそうになかった。

「オルヴィス王、あなたはどれだけイシュヴィリアナについて知ってるの？」

どこから話せばいいのか、それを探ろうとノアはゲイルに問いかけた。

オルヴィス王、という単語にゲイルは少し不満を覚える。出会った時からノアにはそう呼ばれていた。名前で呼ばれたのは、たっ

た一度きりだ。ついこの間のことではあるが。

名前で、呼んでくれないのかという眩きを飲み込んで、一度ゲイルはため息を吐き出す。

「……さっきいた 俺の幼馴染に聞いたくらいだな。つまりはほとんど知らない」

「あの人は、イシュヴィリアナの人？」

ノーアが控えめに問いかけてくる。

「いや、と端的にゲイルが答える。銀髪だから勘違いしても仕方ないだろうなと思う。」

「母親がイシュヴィリアナ出身で、幼い頃に何度か滞在したこともあるようだ。オルヴィスの人間だ」

「そう、だから詳しいのね」

あのタイミングで、誰かにノーアは月の塔から出れないと庇ってもらえるとは思えなかった。

「ノーア様、お持ちしましたけど」

「こんこん、と小さなノックがして、セリの声が聞こえた。ノーアはどうぞ、と答えて入るように促す。思ったよりもセリが来るのが早くて助かった。ゲイルと長い会話をしたことはそれほどないので居たたまれない。」

ゲイルとノーアの二人を交互に見た後、セリがそろそろとノーアに近づく。

「この本で、大丈夫ですか？」

「ええ、合ってるわ。ありがとう、セリ」

ノーアが受け取ったのは臙脂色の表紙の、古めの本だった。

失礼します、とセリが部屋から出てからゲイルが「それは？」と問う。

「イシュヴィリアナの、建国について書かれてる本。神話に近いわ。初めから話すとなるとそこからなんだけど 時間は本当に大丈夫なの？」

国王という仕事がどれだけ多忙なものなのかくらいは、知ってい

るつもりだ。ましてゲイルにはイシュヴィリアナに滞在中にする」とは山ほどあるはず。

「数時間くらいはどうにでもなる。気にするな」

むしろ無理やりどうにかするのだが。

それならいいけど、と　少し戸惑いながらノーアは本を開く。

天の神には四人の美しい娘がおりました。

中でも末の娘の力は強く、そして娘の中で一番美しかったのです。淡く輝く銀の髪に、透き通るような青い瞳を持っていました。しかし残念な事に、末娘の額には小さな赤い花のような痣がありました。

神はそれぞれ娘達に使命を与えました。一の娘には空を、二の娘には大地を、三の娘には海を見守るように言い渡しました。そして一番強い力を持つ末娘には「人」を見守るように命じました。

人の世界に生き、人と同じ目線で人の世を見ると。強い力に酔っていた娘に対する神なりの配慮でした。

娘は地上をあちこち旅をして、一人の青年と出会いました。

娘は青年を気に入り、力を貸しました。次第に仲間が増え、勢力は大きくなり、すぐに一つの国が出来上がりました。

青年はその国に娘の名をつけました。

イシュ・ヴィ・リアナ、と。

ノアの声はまるで小川のせせらぎのようで、澄み切っていて、穏やかで心地よかった。

「イシュ・ヴィ・リアナは古語でリアナの国、という意味なの。神の末娘の名前がリアナだ伝えられているわ。それがイシュヴィリアナの始まり。青年が初代国王」

ノアは口に出さないが、この神の娘が聖女の由来なのだろうと予想できた。額に赤い花の痣　まさに目の前の少女にもある。

「娘と王は結ばれ　そうして何人かの王子と姫が生まれた。その子孫がイシュヴィリアナ王家とされているの。一応系図では血が途絶えたことはないみたい。よくある話でしょう?」

王家は神の末裔だという話は、どこの国にでもあるものだ。素直にゲイルは頷いた。オルヴィスも似たり寄ったりだ。

聖女は何か、その疑問はまだ解決していない。ノアも再び本に目を落としたのでゲイルは自然に口を閉ざした。

涼やかな声が、部屋に響く。

娘と王は子をなし、そして国を豊かにしました。

神の子である娘は変わらず美しいけれど、王はどんどん老いていきました。

そして人であるが故に、娘を置いて天へと召されました。

娘は空の姉に聞こえるほどに悲しみを叫び、大地の姉に響くほどに身体を震わせ、海の姉のもとまで流れ着くほどに涙を流しました。そうして娘は、父である神に、王と共に眠らせてくれと懇願しました。

神の命はいらないから、人として彼と共に死なせてくれと。

神はその願いに一度、否と答えました。

娘には神から与えられた、「人」を見守るといふ使命があったか

らです。

すると、大地が荒れました。

天が裂け、雷が落ち、海が荒れ狂い、嵐が起きて、人の世は壊れかけました。

娘の状態を見て、使命を果たすのは無理だと察した神は、娘の強い力と身体を引き離し、力を失った娘は望むように王の傍らに、人として眠らせました。

そうして荒れた世界は元に戻りました。

娘が果たせなかった使命を、神は人に負わせました。

娘の強い力を人に引き継がせ、決して絶えることのないように仕組みました。その代行者である印として娘と同じ痣を額に刻みました。

力は必ず乙女に受け継がれ、その力は再び国を導くために使われました。

そうして人々は乙女をこう呼ぶようになりました。

聖女。

神の愛娘、と。

### 13：鳥籠の鳥

ばたんと本を閉じて、ノーアは一息ついた。

「聖女はそうして生まれたと言われているわ。本当かどうかなんて確かめる術すべがないから何とも言えないけれど」

苦笑してノーアが呟く。

イシュヴィリアナは大陸の中でも長い歴史を持った国だ。その国が出来た当時のことなど誰も知らない。

「聖女が起こした奇跡も両手では数え切れないほどあるわ。未来を予知した、傷を治した、聖女に危害を加えようものなら何か見えないう力で阻まれた……先代の聖女様も随分と慕われていたみたい。流行り病で死ぬ人が増えた時に自ら看病なさったって……」

たくさんの患者の側にいても、聖女は病にかからなかったという。次々にあげられていくノーアの例に、ゲイルは耳を傾けた。そして疑問に思う。

「外に、出たのか」

控えめな問いだった。

ノーアはゲイルを見つめて苦笑し、その問いには答えなかった。

「……この塔にはね、初代国王と神の娘が眠っているの。ここは大きな墓標なのよ。知ってるかしら？ 城の、王の執務室からは月の塔が見えるそうよ。この国が誰の国なのか、忘れることのないように」

イシュ・ヴィ・リアナ。

リアナの国。彼女が作った国だと、この名前はそう訴え続けているのだ。

「聖女も、昔はとても力が強かった。でもそれもしだいに弱まってきたわ。特別な力なんてない、額に痣があるだけの聖女が増えた。」

それでも聖女はリアナの力。この国を作り上げた神の娘の代行者。放置できないから、仕方なく探し出し、月の塔に閉じ込める……そういう考えがここ何代かの王では強かったみたい」

しかし子供を手放したいと思う親はそう多くない。広大な国の中からただ一人を探し出すには時間がかかった。聖女が月の塔に連れてこられるのは、平均して八〜十歳くらいなのだと、ノアは説明した。

「私が月の塔に来たのは、生後三ヶ月の頃よ」

ゲイルが眉を顰めた。今の説明と比べると、早い　早すぎるくらいだった。

ノアは閉じた本を見つめ、淡々と続けた。

「だから親の顔も、名前も覚えてないわ。ノアという名前だけが親からもらった唯一のもの。ルティスという名前は、親の姓ではなくて、聖女に与えられる称号ではないから」

辛い話であるはずなのに、ノアは落ち着いていた。彼女にとってそれは辛いと感じることもできないような、当たり前の話になってしまっているのだ。

「私の、聖女の力が強かったみたいなの」

奇妙な言い方だ、とゲイルは思った。

強かった、と過去形であり、そしてみたいだと人から聞いた話であるように。

それに、彼女はついさっき言ったはずだ。

「ただ額に珍しい痣があるだけの、ただの女の子よ。特別な力なんて何一つない」

顔に出ていたのだろうか、ノアがゲイルを見て笑う。

「この塔にいたのだけでは、ただの女の子なのよ。月の塔は神の娘が眠る土地。もともとは彼女のものである聖女の力も抑えられるの。」

そして私は生後三ヶ月の時からここに暮らしているから、自分の力を見たことも、使ったこともない。　赤ん坊の頃は、力が制御できなくて感情の起伏のままに色々な現象が起きたらしいわ。物が壊

れるのは当たり前、機嫌が良いと天気良くて、泣き出した途端に雨が降る……ひどいと嵐になったって」

全部聞いた話だけだね、とノアは苦笑した。

奇妙な現象が起きるといことが王家に伝えられ、その原因を探られ　　すぐにノアの居所が知れたのだという。

「大人になれば赤ん坊の時のように力が暴走することはないって、先代が調べてくれたから、短い時間だけど外に出たこともあるわ。

聖女はもともとの塔からあまり出ないように育てられるし、私も不自由を感じたことはない」

「世界を、知りたいとは思わないのか」  
するりとその言葉は簡単に零れた。

外に連れ出して、あの澄んだ青空を、深い海を、砂の大地を、見せてやりたいと思う。こんな小さな箱庭で、一生を終えるというのか。

「……知りたいと思うこともあるけど、それ以上に自分が恐ろしい」  
ノアがそう呟いた。

そこで初めて、ノアの小さな手が震えていることにゲイルは気づいた。今まで気づかなかった自分に、内心で舌打ちする。

「私が外に出て、何が起きるのか　　少しの間は平気でも、塔の外で暮らすなんて考えられない。怖い。自分の中の、強すぎる力が

……」

震える身体。涙ぐむ声。目の前の少女からは、そんな強い力を感じない。ただの華奢な、女の子で　　。

耐え切れなかった。

小さな手を握るだけ、そう思ったのに　　ゲイルが手を握り締めると、驚いたように見上げてくるノアの目にはやはり涙が浮かんでいた。そんな顔を見たら、抱きしめずにはいらなかった。

ノアの身体は小さかった。長い銀の髪は絹糸のように滑らかで、

甘い香りがした。腕は力を入れれば折れてしまつんではないかというほどに細い。

鳥籠の鳥だ、とゲイルは思った。

しかも鳥籠の扉は開け放たれている。それなのに中の鳥は、狭い世界しか知らないから、その中で飛ぶことしか知らないから大空へ行くことを恐れている。

いつでも飛び出せるのに、籠の中で怯えているのだ。

なら、自分が手を差し伸べよう。

空が怖いのなら、最初はこの腕にとまっていればいい。

籠の外が恐ろしくないと、教えてやればいい。

「……………オ、オルヴィス王……………？」

戸惑ったようなノアの声が、今までで一番近くから聞こえる。

抱きしめる力を強めれば強めるほど　ノアの身体は緊張して強張った。

「……………もう、名前では呼んでくれないのか」

ゲイルが苦笑しながら、ノアの耳元でそう囁いた。びく、とノアの身体が揺れる。気配から怯えているのではないと、勝手に解釈した。

「あ、あれはっ……………その、ね、ね、寝ぼけて　いや、違うの。あの　っ！」

ノアは激しく、この腕の中から逃げ出したい衝動に駆られた。

しかしゲイルの腕はびくともしない。非力なノアがこの腕から逃れる方法はなかった。

くく、と笑い声が聞こえる。からかわれたのだと気づいて、ノアは憤慨した。

「オルヴィス王！？ ふざけるのもいいかげんにして！」

「ゲイル、だ」

ノアの耳に吐息がかかる。

わざとしか思えない行為に、ノアはますます腹を立てた。ゲイルの行為に顔が赤くなってしまっていると分かっているから、余計に悔しい。

「外へ行こう。俺が連れ出してやる。おまえはまだ世界のことを、何も知らないんだ。最初は近場で、短い時間で それから徐々に慣らしていけばいい。そうすれば、外にいることも、自分の力も恐ろしくなくなる」

優しい、夕日のように温かな声。

ノアの身体も、いつの間にか固くなくなっている。

ああ 本当にこの人は、こんなにも優しい。

いつの間にか消え去っていた涙が、先ほどとは違う意味で再び湧き上がった。

鳥籠の扉は開いている。

差し伸べられた手を受け入れるかどうかは、鳥しだい。

## 14：君の名前

ノアの白く滑らかな腹部に、引き攣った傷跡が残った。セリはかなり嘆いていたが、ノアは特に何も感じなかった。

ニルに刺された傷も完治し、安静にしてると口うるさく言われなくなった。

ゲイルは足繁く月の塔に通い、ノアの身体を気遣ってくれた。傷が治ったら、外に出ようといつも言い残した。

「どこに行きたい？」

昼下がりの穏やかな日の光の下、芝生の上に腰を下ろしながらゲイルは隣に座るノアに問いかける。

外に出るのはやはり恐ろしい。しかしゲイルと一緒になら、平気ではないかと思うのだから不思議だ。

「……海が見てみたい」

砂漠も見たいけど、と付け加える。

しかし距離的には、手始めに海にしておくべきだろう。この大陸の六割は砂漠だが、国は海に面した平地にある。海路が発達しているため、王都も海の近くにあるのが普通だ。イシュヴィリアナも例外ではない。

「そうだな、砂漠よりは海の方が近いか。馬で行けばすぐだ。日が暮れる前に帰ってこれる」

馬に乗れるか？ と問いかけられ、ノアは首を横に振った。

月の塔からそう出ないのだから、当然だろう。ゲイルも答えが分かっていたから、驚くことはない。

「……試しに乗ってみるか？」

どうせ乗れなければ海に行くなど無理な話だ。一人乗りは出来なくとも、ゲイルと同乗することに慣れなければいけない。

しかし、馬に乗るには月の塔の中庭では狭い。不安そうな顔のノアを見て、ゲイルは苦笑する。

「この辺りを散歩する程度だ。すぐに戻る。徐々に慣れていけばいいと言っただろ？」

確かにすぐに海まで出かけるのは無謀かもしれない。しかし心の準備というものができていなかった。

立ち上がり、手を差し伸べるゲイルをノアは座ったまましばらく見上げた。

ほんの少し、出てみるだけ。

大丈夫だろう。

そう自分に言い聞かせる。外に出てみたいという気持ちがノアの中で強くなっていく。

差し出された手を握り、ノアも立つ。手を握ったままゲイルの愛馬のもとへ行く。照れくさくて手を離したいとノアは思うのに、ゲイルは強く握り締めたまま離してくれない。

「馬は、怖くないか？」

ゲイルの問いに、ノアは首を横に振る。

女官の中には馬を怖がって近寄らない者もいるが、ノアはむしろ動物は好きだった。馬は肉食獣ではないし、優しい目をしている。どうして怖がるのかと首を傾げるくらいだ。

馬の首筋を撫でているノアを見て、ゲイルも平気そうだと安堵する。

ノアを持ち上げて先に乗せ、ゲイルも軽々と馬に跨る。本当はノアに後ろに乗ってもらい、ゲイルにつかまっかけていてくれる方が楽だが、ノアは案外非力なので前に乗せてゲイルが落ちないように気を配る方がいいだろう。

いつになく密着している状態に、ノアは緊張した。

「俺にしっかりつかまってる、じゃないと落ちるぞ」

さらにこの上密着しろというのは拷問か何かかとノアは思うが、落ちたらただではすまない。しかたなくゲイルに寄りかかるように体重を預けた。

「そんなに速く走らないわよね？」

おそろおそろの問いかけると、ゲイルは意味深な笑みを浮かべる。

悪戯を思いついた子供のような。

思わずノアの顔も引き攣る。

「行くぞ」

そうゲイルが言った途端、馬は駆け出した。

はやりと言うべきか　ゲイルは馬を速く走らせた。それでも加減しているのだろうが、ノアにしてみればかなり速く感じる。

ノアはただ固く口を閉ざして目を瞑るしかなかった。

それからどれくらい走ったのか　ずっと目を瞑っていたノアには分からない。速度が緩やかになったと思うと、頭上からゲイルの低い声が聞こえる。

「もう開けてもいいぞ」

くすくすと笑う声も聞こえ、ノアはむっとする。

「あんなに速く走るなんて聞いてない」

「それほど速くないぞ。全速力の方が良かったか？」

ゲイルが意地悪そうに笑う。

反駁する勢いも失せ　ノアはゲイルをただ睨みつけた。

「そう怒るな　何も、起きなかつただろ？」

ゲイルはノアの頭を優しく撫でて、微笑む。

何のことだろうとノアは思い　自分が恐れていたことだと気づいた。

赤ん坊の頃、聞いた話のように自分の感情のままに何か起きるのではないか。ずっとそう思ってた。怖くて外に出れなかった。

しかし今。

速度を上げた馬に乗りながら、悲鳴を噛み殺していた。その後でゲイルに腹を立てた。

「……何も、起きていない？」

ノアは空を見上げる。

不安な心とは裏腹に、空は澄み切った青さを保ち続けている。雨雲の気配など微塵もない。

「とりあえず、今日は何も問題なさそうだ」

そう言いながらゲイルはするりと馬からおり、ノアをおろしてくれる。

ノアはただゲイルの顔をじっと見つめた。

わざと　だろうか。

外は安全だと教えるために、ノアの不安を振り払うために、わざと怖がらせたり、怒らせたりしたのだろうか。

「向こうが砂漠で、その反対が海だ。今度時間が出来たら海まで行く」

ゲイルが遠くを指差しながらそう教えてくれる。

東が海で、西が砂漠。その向こうに水の都、神に愛される土地アジムが向かっているだろう、オアシスがある。

「オルヴィスは、あっち？」

「ああ、普通で王都までは一週間はかかるか。それでも近いほうだぞ。まあ、もともとのオルヴィス小さい国だしな」

しかし今ではオルヴィスも強国の仲間入りだろう。イシュヴィリアナの土地は広く、豊かだから。

「……………いつまで」

イシュヴィリアナにいるの、と問いかけて、ノアはその言葉を飲み込んだ。まるでまだいて欲しいと言っているようなセリフだ。

「まだしばらくはいる事になりそうだ。いつまでも王都に帰らないわけにもいかないから、後一ヶ月か二ヶ月つてどこか」

聞かずに飲み込んだ問いに、ゲイルは律儀に答えた。

一ヶ月　それまでに、自分は外に出ることに臆病にならずにいられるのか。そんなことを考えて、ノアは首を振る。

オルヴィスに行きたいんじゃない、側にいたいんじゃない、ただ

ゲイルがいなければ外に連れ出してくれる人がいなくなるから。

「ノア」

低い声。

ここにいるのはノアとゲイルだけだ。つまりノアを呼ぶのもただ一人で。

「……………今、なんて？」

一瞬呆然として、意識を取り戻すまでに時間がかかってしまった。今まで一度も名前と呼ばれたことなんてなかったから。

「ノア、と。何か問題でもあるか？」

「い、いえ、ないけど……………」

空耳ではなかったか、とノアは火照る頬を手で隠す。きっと赤くなっている。

「乗馬を、やってみたらどうだ？」

「……………乗馬を？」

本題はそれだったのだろう、ゲイルがノアの赤い頬に気づくとなく問いかけてくる。

「見たところ、馬は嫌いじゃないみたいだし……………上達すれば外に出るのも楽しくなるだろう」

「……………随分、私を外に連れ出したいみたいね？ オルヴィス王」

厭味だっただろうか　ゲイルがノアを見て苦々しく顔をゆがめた。

「別に、后にするために外に連れ出そうとしてるわけじゃない。そんなことはどうでもいい。ただ俺は、おまえがただ誰かに連れ出されるだけではいけないから、そう提案しただけだ」

ふて腐れたようにゲイルがノアから顔を逸らした。

「おまえに無理強いするつもりはないし、しているつもりもない。対等でありたいと思っている。だから、俺を王と呼ぶ必要はない

何度言えば分かる？」

ノーアの顔が熱くなった。

抱きしめられた時の体温、力強い腕、耳をくすぐる吐息　　そう  
古くない記憶が鮮明に思い出され、体温が急上昇している。

でも。

「一国の王と、対等であるはずがないでしょう……私にはもう大した価値がないのよ?」

イシュヴィリアナにおいては、ノーアは高い地位にいた女性だった。しかしそれがなくなってしまうえば　　額にある聖痕でさえ、無意味なのだ。

「価値なんてどうでもいい。俺が、おまえと対等でいたいんだ……  
ノーア」

どうして。

その問いは口に出せなかった。

ゲイルがそつと、ノーアの頬に触れる。

温かいその手のひらに、安堵してしまう自分に気づく。

外に出よう　　そう言って差し伸べられたその手を。

もう、振り払うことは出来ない。

「……………ゲイル」

その手のひらに伝えるように、自分の手のひらを重ねる。  
優しく微笑むゲイルに、ノーアはぎこちなく微笑み返した。

太陽の消えた国、君の額の赤い花

## 15：恋心未満

私が聖女でなければ

彼と共にいることに、不安を感じたりしなかっただろうか。  
彼と対等であることに自信を持てただろうか。  
なんの憂いもなく、彼に微笑み返せただろうか。

すべてはたった一言で崩れ去る。

聖女でなければ、出会うことすらなかった。

名前を呼ばれて嬉しいと思う。  
名前を呼ぶことができ嬉しいと思う。  
目の前にいるだけで、幸せだと思う。  
側にいて、楽に呼吸ができる。  
微笑まれば、微笑み返したくなる。

抱きしめられれば、心臓が驚くほどに跳ねる。

今までに一度も感じたことのない感覚だ。  
分からない。分からないから、困る。

ノーアはため息を吐き出して、本を閉じた。

ほんの数週間前に、ゲイルに聖女について話すために書庫から出してきた本だが、戻す機会を失って、ずっと手元に残したままだ。イシュヴィリアナの人間なら、誰でも知っている恋物語。

今まで聖女と王家が婚姻を結ばなかったのも、この建国神話に基づく。この話によれば聖女は国母たるリアナの化身なのだ。その化身たる女性がリアナの子孫ともいえる王家との婚姻を結ぶことは禁忌とされてきた。

そしてその禁忌を無視して、ノーアとアジムの婚約は成立した。表向きの理由としては薄れていく王家の血と聖女の力を再び取り戻す為。つまりは、それほどイシュヴィリアナが衰えていたということだ。

アジムに対して、特別な感情は芽生えなかった。恋しいとか、愛しいとか、そういう甘い感情は。アジムに恋とはどんなものかと聞いたことがあった。困ったように笑いながら、それでも話してくれた。

『病気みたいなもんだな』

アジムは苦笑しながらまずそう言った。照れているだけだとノーアには容易に分かる。誤魔化す必要はないのに。

『会いたくて、会えれば触れたくて、触れれば心が知りたくて。そういうもんだよ。頭で考えることじゃない、恋をするのは心だ。感覚って言ってもいい。気がつけば始まってるんだ』

会いたい？

アジムの想う人は遠く、砂漠の中のオアシスにいる。イシュヴィリアナの王子であるアジムは昔ほど簡単に訪れることが出来なくなっていた。唯一の後継者だから。

『会いたいよ。ガキの頃の恋だからって馬鹿には出来ない。あの頃感じていたことは錯覚でもなんでもなくて、ガキなりの本気だからな。それは何年経っても褪せない』

いいなあ。

私も恋がしたい。

すべてを捨ててもいいと思えるような恋が。この身を焦がすような情熱的な恋が。

アジムは優しく微笑んで、いつかその時が来ると言ってくれた。その時はそんなことあつてはならないはずだった。アジムと私はいずれ結婚するはずで、お互いに恋を応援するわけにはいかなかった。

たぶん、オルヴィスが攻めてこないまま、アジムと結婚してもそれはそれで後悔しなかったと思う。アジムも同じだろう。遠くにいる初恋の人を想いながら、ノーアも大事にしてくれたはずだ。

しかし運命はアジムを見放さなかった。

アジムはイシュヴィリアナという鎖から解放されたれ、今愛しい少女のもとへ向かっている。ノーアにも、自由が与えられたのだ。

会いたい、触れたい、知りたい。

その欲求はすべて一人の人へ向かう。

たとえばこれがアジムの言っていたとおり、恋心なのだしたら。

「私は、どうすればいいんだろう」

このまま流れにまかせて、オルヴィス王妃となるか？

ゲイルの後として生きていくのか。

ノアは俯いて違う、と呟いた。

何か違う。このまま何もしないでいれば、たぶんゲイルの後として、妻として恋は叶うことになるのだろうか。

そんなことでもいいのだろうか？

もとより、これは本当に恋なのだろうか？

考えても答えは出ない。

恋は心でするもの。感覚によるもの。ならきつと、こつして悩んでも意味のないことなのだろう。

いずれきつと、はつきりと分かる時がくる。

それまではノアが望むように、自由に生きてみれば良い。

まずはゲイルに誘われたように、乗馬を始めることに決めた。ゲイルから早くも白馬が贈られてきたのだ。優しい気性の、ノアとの相性も良さそうな馬だ。すぐに気に入った。

そうしてこの塔から少しずつ、巣立とう。

ゲイルはさりげなく、ノアを支えてくれるだろう。

転んだら手を差し出してくれるだろう。道に迷えばそつと手をひいてくれるだろう。無条件に、そつ信じられた。

「ノア」

低く優しい声がノアの耳に届く。

木の陰で読書に没頭していたノアは声に気づいて顔をあげた。誰かなんて聞かなくても分かる。

「ゲイル」

呼ぶと彼は少しだけ顔を綻ばせる。

何がそんなに嬉しいんだろうと思うが、いつも聞かない。聞くの

がどうしてか躊躇われた。

もうそろそろ外で本を読むのは寒くなってきた。葉も赤く色づきはらはらと地面に落ちていく。実りの秋も終わり、じきに眠りの冬が訪れる。

「聞きたいことがあったんだ。聖月祭についてなんだが」

ああ、もうそんな季節ね　とノーアは呟いて、目を丸くする。

「どうして知ってるの？」

聖月祭はイシュヴィリアナの祭だ。一年の終わりに、聖女の住まう月の塔が民にも解放される。広い聖堂で祈りが捧げられ、民にとっては聖女を見ることのできる少ない機会だ。

もとは月の塔に眠る神の娘に詣でるのが始まりだ。それから形が少し変わり、聖女の祭となった。

「ロハムだよ。やったほうがいいだろう？」

最近覚えたゲイルの部下の名前に、納得する。ゲイルのイシュヴィリアナに関する知識はほとんどロハムの受け売りと考えて間違いない。

「そうね、毎年たくさんの人に来てくれるから……どうせ私がするのは聖歌を歌うくらいだし」

聖月祭に合わせて城下も賑やかになる。商人にしてみれば年に最後の稼ぎ時だ。

「なら、その前には海に行きたいな」

さりげなくゲイルがそう言いながら微笑む。

忘れていないのだと、ノーアも嬉しくなる。

「そうね」

「何かやらなければいけないようなことはあるか？」

聖月祭についてだ。ノーアは毎年のことだが、大して覚えていなかった。準備はほとんど修道女の皆がやっていた気がする。

といっても、聖堂を掃除して清めていたくらいだろうか？ 祭の三日間はノーアはこれでもかというくらいに飾り立てられるという記憶しかない。

「……私に聞くより、イシュヴィリアナの城の誰かか　近くの修道院にいる修道女に聞いた方が早いかもしれないわ」

ニルがいてくれれば良かったのに、とそこで思ってた。去年の今頃、ニルは慌しく動き回っていた。

「心当たりはあるか？」

「……そうね、ラトヴィアならたぶん全部採配してくれると思うわ。修道院のことはいつも彼女が仕切っていたから」

月の塔にいた、最年長の修道女だ。

ノアアの母親くらいの年齢で、真面目で、しっかりした人だ。叱られた記憶もあるのでノアアは好意と苦手意識の二つが常に両立している。

「わかった、その他もこちらで手配しよう。ラトヴィアという女性だな？」

「ええ。それで分かるでしょう？」

どうせこの月の塔にいた修道女はすべて調べがついているはず。今どこにいるのかもノアアより正確に分かるだろう。

ゲイルは苦笑して、ノアアの頭を撫でた。

「聖歌の練習でもしとけ。あと乗馬もな」

そう言い残してゲイルは帰ってしまった。

もう少ししてもいいのに、と思うと同時にどうしてそう思うのか、と首を傾げる。

ノアアは大人しく塔に戻り、素直に聖歌の練習をしようと楽譜を探し始めるのだった。

## 16：幸せの時間

まだ少し幼さの残る、聞きなれた歌声。

この頃になると朝も昼も夜も、月の塔からは歌声が聞こえてくるのだ。

三ヶ月ぶりくらいになるだろうか。懐かしく感じながら長い階段を上る。オルヴィスの人間がやって来た時には何事かと思ったが。

月の塔の最上階。

聖女の住まう部屋。まるで捕らわれたお姫様が閉じ込められているような場所で、彼女は育った。

長く真っ直ぐな銀の髪。透き通るほどに白い肌。深い水底のような青い瞳。記憶と変わらないその姿に安堵する。

「ノア様」

声をかけると、ノアは弾かれたように振り返った。

その青い瞳が声の主をとらえた途端、子供のように駆け寄って抱きついた。

「ラトヴィア！」

他の目からすれば、それは親子の再会のようだった。

ラトヴィアは黒い髪を一つに束ねた、もう成人した子供がいても可笑しくなくらいの年齢で、いかにも母親らしい。事実、先代の聖女が亡くなってからはノアの母親代わりだった。

「お元気そうですね、安心しました」

「ゲイル……オルヴィス王ね？ あなたを呼んだのは」

名前で言っても分からないだろうとノアが言いなおす。ラトヴィアの名をゲイルに出したのは一昨日のことだというのに、その対応の早さには驚かされた。

「ええ、修道院に使いがきまして。改めて月の塔に住まわせていた

だくことになりました」

「聖月祭のことだけじゃなく？」

もちろん気心の知れたラトヴィアがいてくれるというのならノーアは嬉しい。月の塔に新しくやって来た女官達のほとんどはノーアとの接触をできる限り避けているようだったので、未だ楽に会話できるのはセリだけなのだ。

「出来るのならいてやって欲しいと一国の王にお願いされたら断れませんよ。もとより逃げるのは不本意でしたしね……ニルのことも聞きました。辛かったですよ」

ニル。

姉のように親しかった修道女。

ノーアを理想の聖女としてしか捕らえられず、この腹に短剣を突き刺した。

「……私も、悪かったの。ニルを責めないであげて」

そう言ってノーアが無理に微笑んだ。上手く笑えているか、自信がない。

「……少し、安心しました。そこで『私が』ではなく、『私も』と言えるようになったのですね」

ラトヴィアがそう微笑む。

意識した言葉ではなかったの、ノーアは安心したというラトヴィアのセリフに首を傾げる。

「以前のノーア様なら、自分がいけなかったのだと言ったでしょう。変わられましたね」

「よく、分からないわ」

イシュヴィリアナがまだ国であった頃の暮らしよりも、楽に呼吸しているとは思う。周りの視線を気にしなくていい。人の理想である必要はない。それが思いのほか心にとっては負担にならないものだったのだ。

「オルヴィス王は、思っていたよりも良い方ですよ。とんでもない男だったらノーア様を連れ出して逃げようとも考えたのです」

が

「大丈夫よ」

くすくすと笑いながらノーアはラトヴィアならやりかねないな、と思う。

「聖月祭の衣装も少し直さないといけませんねえ。去年より身長が高くなったでしょう、ノーア様」

「そうかしら？」

「年寄りの言うことに間違いはありませんよ」

年寄りなんて　　まだそんな風に言う年じゃないだろう、とノーアは笑う。

忙しくなりますね、と意気込むラトヴィアにノーアは苦笑する。

実のところ、聖月祭はあまり好きじゃなかった。

いつもは静かな月の塔に、これでもかというほどの人が集まる。

誰もがノーアを見ている。死角なんてない。息が詰まるほどの人の群れ。逃げ出したくなるほどの視線。

皆ノーアの姿を見て安心したいのだ。

神様はまだ自分を見放していないと。この国に聖女が生まれ続ける限り、神様はいるのだと。

「……元気がないな」

どうした？　と問いかけながら、ゲイルはノーアの頭を撫でた。

いつもと変わらないように笑っていたはずだけど、と思いながらノーアは苦笑した。二、三日に一度会うゲイルにはあまり心配をかけたわけではない。

「何もないわ。でも、ちょっと疲れてるかも」

「なら遠乗りはまた今度に……」

「いや」

考えるまでもなく言葉は出た。

ノアが馬に乗るようになってからは練習の意味も込めて二人で出かけることが多くなった。外に出ることへの不安も薄まり、最近ではノア一人でも馬に乗って散歩に行く。

今は月の塔にいるより、ゲイルと二人で外にいたかった。月の塔は聖月祭の準備で忙しい。

「じゃあ、そう遠くないところまでな」

ゲイルは優しく微笑んでもう一度ノアの頭を撫でる。

そのぬくもりが嬉しくて、ノアも微笑み返した。

子供扱いだと思っ気持ちも少なからずあるが、ゲイルとの年の差を考えれば当然だろうと思う。それに嫌なわけではない。

「明後日、どうにか時間が出来た。おまえも上達したし、約束とおり海に行くか」

さらりと、まるで天気の話をするかのようにゲイルは話す。一瞬聞き間違いかとノアは自分の耳を疑ったが、そうではないらしい。「……大丈夫なの？」

今は聖月祭の準備やら、オルヴィスへの帰還やらで忙しいはずだ。「大丈夫だ」というより、ここでしか時間が作れない。聖月祭が終わればオルヴィスに戻るようになってるからな。今機会を逃したら終わりだ」

オルヴィスへの帰還の日程も決まったようだ。

急遽聖月祭を整えることになったので忙しさは倍になったはず。

大仰な祭ではないのだが、やるとやらないとでは大きく違ってくる。「連れて行くと約束したからな、約束は守る」

ありがとうと、言葉はすんなりと出てきた。

ゲイルは照れたのか、黙り込んだ。その横顔を見てノアはくすくすと笑う。

ゲイルがノーアに対して真摯であろうとしていることは、充分に理解しているつもりだ。その理由がノーアから祖国やいろいろなもの奪ったからだということも分かっている。

だからゲイルは優しい。

何もかもを失ってしまったノーアを、放っておけるような人ではないのだ。

そう考えて、何故か胸が痛くなる。

どうしてだろうと思いつながら、それすらどこか心の遠いところへ飛ばして忘れたことにする。

こんな幸せで、穏やかな時間がいつまでも続けばいい。

そう願うことが何よりも残酷なことであると、ノーアは知っていた。

知っていたけれど、願わずにはいられなかった。

## 17：求めるもの

乾いた風が頬を撫で、ノアは眉を顰める。

ここ数週間、雨が降っていない。降る気配もない空を見上げてノアは分厚い、灰色の雲を探した。

大陸の六割が砂漠というこの荒れ果てた世界で、水はどの国でも貴重なものだった。雨は降って喜ばれることはあっても、降らずに喜ばれることはない。

もちろんゲイルと一緒に海に行く今日に降られるのは困るけれど、もう作物は収穫した後だし、困るといつても生活する為の水くらいなのだが、その確保すら毎年厳しいというのに、晴れ間の続く最近の天気はきつと疎まれているだろう。

たぶん、ゲイルも気にしているだろう。

こんな時に自分の力が自由に使いこなせばいいのにと思ってしまう。自由自在に天気を操れたら、雨を降らせるのに。

ノアの強すぎたという聖女の力も、今となっては本当だったのかも怪しいものだ。もう数え切れないくらいに月の塔の外に出ていくが、何も起こらない。成長すれば自然と制御できるようになるというのは本当だったのか、それともノアの力が実は大したものはなかったのか。

まるで普通の女の子になれたみたいだと、最近思う。

嬉しいと思う反面、心苦しく思うなんて可笑しいのだろうか。

「晴れたな」

ゲイルは会って最初にそう微笑んだ。

長い間雨が降らないということは喜ばしいことではないはずなのに、ノアと出かけるこの日に晴れたことを嬉しいと感じてくれているのだと、ノアも微笑み返した。

「ゆっくり行こう、急がないで」

ゲイルにどれだけ自由な時間があるのかは分からないが、ノアは素直に頷いた。

一緒にいられるのは嬉しい。

澄み切った空の青が今だけはいとおしい。どうか今日はこのまま、一滴の雫も落とさないままでいてほしい。雨が嫌いなわけじゃないけれど、初めて見る海は青空と見分けがつかないような日が良い。

「……疲れてる？」

ゲイルの横顔を見つめながら、ノアが問いかける。

帰還と聖月祭の準備でゲイルは多忙のはず。そんな中でこうしてノアのために時間を作ることとは簡単じゃなかったはずだ。

「少しな。朝方まで書類と睨みあっていたから」

「……無理しなくてもいいのに」

ノアと遠出することよりも、休むことを優先してほしい。倒れてしまったら元も子もない。

「そう言うな。俺だって楽しみにしてたんだしな」

私だって、と言いつ返すのはさすがに恥ずかしくてノアは黙る。

その横顔を見て、ゲイルが笑った。たぶん赤くなっているのだろう。

青。蒼。藍。碧。

あらゆる青がそこに交じり合っていた。

どこまでも、どこまでも、見渡す限り青い。  
息を呑んだ。言葉を失うということはこういうことを言うの  
だろう。

「……すごい」

これがすべて水なんて、信じられない。

潮風がノーアの髪を攫う。独特の香りではあるが、嫌いではな  
かった。どこか懐かしく感じるなんて言ったらゲイルは笑うだろうか。  
どこまでこの海は広がっているんだろう。

同じように広がる空はどれだけ高いだろう。

自分が知っていた世界がどれほど小さかったのか、思い知ら  
されるようだった。

「これが、全部真水なら良かったのに」

純粹な感動の後には、そんな感想が生まれた。

そしたら水に困ることもないのに。

「世界は上手く作られてるってことだろうな。これほどの水があっ  
たら人間は進化を止めたかもしれない」

水がない。植物が育たない。少しでも生活が豊かになるように

人は努力し続けてきたから。

「難しいわね」

「ないものねだりだ。結局は。どれだけ欲しいと思っても空にある  
太陽にも、月にも手が届かないのと一緒だ」

どこかで聞いた話だな、と思った。

「月が欲しいと泣く子供ね、昔よく我儘を言うとラトヴィアに言わ  
れたわ。可笑しいのよ。普通は月は手に入らないものなんだっ

て言い聞かせる話なのに、ラトヴィアは『ノーア様が月なんだから  
欲しがったって駄目ですよ、もう持っているんだから』って言うの

変よね、とノーアが笑う。

「聖女は月の象徴、か」

太陽の傍らで、ひっそりと輝く。太陽が輝いている昼間は見えな  
くなるくらいに光を失う。時折青い空に白く浮かんでいるだけ。

「だからラトヴィアに太陽が欲しいって言ったら『それは無理です。だって太陽が今より近くにあつたら眩しくて目が開けられませんか』って……」

その後で、まだ自分は何か言った気がする。思い出そうと記憶を掘り返すが、まったく見つからなかった。

「ノア」

呼ばれて見上げると、ゲイルは真剣な顔でノアを見つめていた。何かを予感するように、心臓が脈打つ。

どうして、そんな顔で見つめてくるの。

ゲイルがそつと、ノアの頬に触れる。

いつもは安堵させてくれる優しいそのぬくもりが、今だけはノアを緊張させた。

「聖月祭が終われば、俺はオルヴィスに戻る」  
知っている。そう言おうとした。

言えなかったのは、ゲイルの強い瞳がノアが何か言うのを止めているように見えたからだ。

「おまえは、どうする？」

切ない、瞳。

ノアの口から出される答えに、怯えているようにも見えた。

オルヴィスに共に行くか、イシュヴィリアナに残るか。ゲイルが聞いていることはそういうことだ。オルヴィスに行くということはずなわち、ゲイルの後になることと同意と考えて間違いないだろう。

ゲイルと一緒にいたい。

それが素直な気持ちだった。

だけど、慣れ親しんだイシュヴィリアナを離れるなんて考えられ

なかった。月の塔にいらなくても、聖女の力が暴走するようなことはない、最近実感することが出来たけれど、それでもやはりどこか不安だった。

オルヴィスに帰ってしまったら、今までのように会えない。それも分かっていて。

動揺してノアは俯いた。

ゲイルがそつと手を下ろした。ぬくもりが去った後の頬は風がやけに冷たく感じた。

下ろされたゲイルの手のひらを見つめる。

手のひらを深く切った、傷跡。

ノアが自害しようとした時、止めに入って出来た傷だ。

あの時は本当に死のうと思っていた。舌を噛んででも、どんなことをしてでもこの男の言いなりになるくらいなら死んだほうがましだと思っていた。

ああ、思い出した。

『昼間の太陽が駄目なら、夕日ならいいでしょう。真っ赤で綺麗な太陽なら、側にいても眩しくないもの』

『まあ、ならノア様。あの短い間に太陽を捕まえられるんですか？』

『できるもの、と強がって夕暮れ時にいつも夕日に手を伸ばした。』

月の塔の一番西側に行って、何度も捕まえようとした。

結局捕まえることなんて出来るわけがなくて、大泣きしたんだ。

あの頃から、私は太陽が欲しくてしかたなかったんだ。

傷の残る手のひらにそつと手を伸ばす。  
両手でその手のひらを優しく包み込んだ。

「……………考えさせて」

結局、そんなことしか言えなかった。

太陽の消えた国、君の額の赤い花

17: 求めるもの(後書き)

ご感想、ご指摘など随時募集中です。  
ほんの一言でもいいのでぜひ。泣いて喜びます。

## 18：聖月祭

朝、目が覚めると一番に窓を開け放つ。

からりと晴れた空は恵みの雫を零す気配など微塵もなく、どこまでも澄み切った青さを保っている。

民は今頃必死だろう。水がもうそろそろ枯渇してしまう。

胸に不安がよぎる。

民が継るのは国王ではない、神の御使いたる聖女だ。

不安が消えることがないまま、聖月祭の当日を迎えてしまった。

『おまえは、どうする？』

共にくるか。この地に残るか。

その問いにノアは答えなかった。答えられなかった。

様々な感情が胸の奥で渦巻いた。この月の塔の外で暮らしても大丈夫なのだろうか。ゲイルの後となることは正しいのか。見知らぬ土地で、頼る人はゲイルだけ。そんな状況で自分は。

「顔色が優れませんね。ノア様」

ノアに衣装を着せていたラトヴィアが心配そうに問いかけてくる。

大丈夫、と短く答えてノアはまた黙り込んだ。聖月祭が近づいてくるにつれ、否、ゲイルの帰還が迫るにつれ、ノアは部屋に閉じこもるようになった。

彼が帰ってしまう前に、答えを出さなければいけない。

「綺麗ですよ、ノア様。ご覧になります？」

セリだけが祭の雰囲気に酔って元気がいい。

ノアが着ているのは白いドレスだ。幾重にも重ねられた絹に、金糸と銀糸で見事な刺繍が描かれている。光の加減で浮かぶその刺繍の美しさには誰もが息を呑んだ。

まるで花嫁衣裳だ、とセリが褒め称えるのを聞いてノアはいたたまれなくなった。

ノアの長い銀の髪はそのままおろされ、背中を覆っている。イシュヴィリアナは女性が髪を結う習慣はない。髪には生花が飾りつけられた。赤い花だ。

聖月祭は、午前中にノアが聖堂で聖歌を歌い、昼頃に町を馬車で巡る。そして午後にもノアが聖歌を歌い続け、民のほとんどはノアを一目見た後はお祭騒ぎだ。もともと祭は、騒ぐ口実のようなものだ。

「さあ、ノア様。参りましょう」

こくりと頷いて、ノアはゆっくりと聖堂に向かう。

足が鉛にでもなってしまったかのように、重かった。引きずるようにしてノアは自分を無理やり歩かせることに必死だった。

初めにどの歌を歌ったのか、ノアはよく覚えていない。

ただ貴賓席にいるゲイルの姿を見つけて少しだけほっとしたのを覚えている。けれど同時に答えを迫られているような錯覚に陥り、記憶はあやふやになった。

静まり返った聖堂。

たくさんの人がまるで人形のように話さず、ただ響くのはノアの歌声だけ。澄み切った青い空のような涼やかな声。

無心になったことはかえって良かった。人々の視線を気にすることなく、自分の務めを果たすことが出来たから。

窓から差し込む光がノアを照らす。銀の髪がそれを反射してきらきらと輝いて、白い衣装を彩る金と銀の糸も光が当たるたびに模様を浮き出していた。

数多の人々の視線を一身に受け止めるノアはまさに神々しかった。この世に舞い降りた女神　普段のノアを知る者なら否定しそうな言葉さえ、今の彼女には合っている。

何曲か歌い終え、一度ノアが下がる。

その後は集められた修道女が聖歌を歌っていたりしたが、人々は町に戻っていった。

これからノアは馬車で町を巡る。

質素ではあるが適度に装飾を施された馬車にノアは乗り込んだ。屋根のない馬車だ。そうでなければノアの姿が見えない。

去年まではアジムと一緒に乗っていた。ゲイルを乗せるのは違和感を感じたし、話すことが少し気まずいので説明もせずノアは今年初めて一人で町を巡る。

慣れた作り笑顔を浮かべて手を振る。

祭の雰囲気はそれほど悪くなく、皆ノアの姿を見つけると花やお菓子を投げて寄越した。例年と変わらない、穏やかなものだ。

良かった、これで何もなく終わる　。

ノアがそうほつと安堵した時だ。

馬車の前に一人の女性が立ち塞がった。

御者が慌てて馬を止める。衝撃で馬車はひどく揺れた。町人も皆

「様にざわめく。」

「聖女様!!!」

女性は馬車の前に跪き両手を組んでノーアに懇願した。

「雨を、どうか雨を降らせてください!! もう水がないんです!」

泣きながらそう願う女性を、護衛が退けようと腕を掴む。しかし女性は強い目でノーアを見つめたまま何度も同じ事を願った。

「お願いです! 雨を! 雨を降らせてください! 聖女様!」  
予感はしていた。

誰もがいつかは聖女に縋るだろうと。

女性の願いはしだいに周りの人々にまで感染し、いつしか町人がノーアの乗る馬車を囲い必死に雨を、水を、と叫んでいる。

「聖女様!」

「どうか雨を!」

「助けてください!」

「水を!!」

「聖女様!」

「聖女様!!!」

その人々の目にノーアは恐怖した。

誰もがノーアを信じてやまない。神の愛娘ならばどんな奇跡でも起こせると思っっているのだろうか。もとの生まれはさほど変わらな  
いだろうに。

人は弱い。

何かに縋りつかなければ生きていけない。同じ行動をとっていれ  
ば安心できる。

縋りつかれる人間のことなど、何も考えず、ある意味無邪気に助  
けを求める。

やめてやめてやめてやめてやめて。

私にそんな力はない。雨なんて降らせることは出来ない。期待しないで。願わないで。私は神様じゃないんだから。

護衛がノアに近づこうとする町人を必死で抑えるが、こんな状況を予測していなかったために人数が足りない。

縮るように伸ばされる手からノアは逃げるように身を引く。

怖い。もう何も聞きたくない。

ノアは馬車の中で小さくなり、耳を塞ぐ。

恐怖から涙が流れた。

「……………たすけて」

誰に救いを求めているのか。

ノアの頭にはただ温かい太陽の光だけが浮かぶ。

人々の懇願は時間が経てば怒りに変わりそうな気がした。それほどまでに人々の勢いはすごかった。

ぼつりと、水滴が落ちる。

それはノアの瞳から落ちた涙ではなく、空から降り注ぐ恵みの雫だった。

気づいた人々が一人また一人と空を見上げる。晴れ渡った空には雨雲なんてない。雫はしだいに強くなり、人々を、ノアを濡らした。

「雨だ！」

「雨が降ってきたぞ！」

歓声が耳に届いてもノアは馬車の中で一人震えていた。

雨に喜ぶ人達を退かし、ノアを乗せた馬車は急いで月の塔へと向かった。

「聖女様！」

「ありがとうございます！ 聖女様！」

「聖女様！」

感謝の言葉が重くノアにのしかかる。

聖女様、と呼ぶ声は紛れもなくさきほどとは違う声色であっても、ノアの力か、偶然か、それを判断することは出来なかった。しかしあの場にいた人達にとってこの雨は間違いなくノアの起こした奇跡となった。

月の塔に戻るとノアは恐怖からか部屋に籠もった。

予定されていた午後のノアの出番は皆修道女達によってカバーされ、事なきを得た。人々の間に降りだした雨の奇跡は伝わり、午後のノアの欠席に大きな反感は抱かれなかった。

雨は雨雲を呼び、あれほど晴れていた空は今どこにも見当たらない。

聖堂から響く修道女達の歌声を聞きながら、ゲイルはノアの部屋までの長い階段を上る。

「…………ノア」

扉の前で声をかけるが、反応はなかった。ラトヴィアが何度も呼びかけたらしいが同じように何も返ってこなかったらしい。

ゆっくりと扉を開けると、寝台の上でノアは毛布にくるまって震えていた。

「ノア」

優しく声をかけるとびく、と肩が震えた。振り返ったノアは泣いていた。よほど恐ろしかったんだろう。

「…………ゲイル」

温かな太陽の光を求めるように、ノアはゲイルに抱きついた。ゲイルは寝台に腰を下ろし、抱きついてきたノアを優しく抱きしめた。子供を宥めるように背中を撫でる。

ノアの嗚咽が部屋に響く。

もう大丈夫だと囁きながらゲイルは震えるノアを慰めた。

俺がいるから。俺が守るから。悪意からも、善意からも。ノアを傷つけるすべてのものから。

雨をと求めた人々に悪意はなかった。

誰かに縋り、神に願うしか彼らには方法がなかった。

彼らの目にノアは聖女としてしか映らない。ただの一人のか弱い少女だなんて誰も思わない。

あんなにたくさんいた人々の、恐怖するほどの願いをこの少女が背負うなんて誰も考えていないのだ。残酷なことに。

ノアはゲイルの上着をきつく握り締める。

一人にしないでと訴えてくるようでゲイルはいとおしくなった。

「……………たすけて……………」

震える声でそう訴える。

やっと自分が助けを求めていた存在が彼だったのだと、ノアはこの時になって気づかされた。

太陽の消えた国、君の額の赤い花

## 19：疑問

このひとはわたしをまもってくれる。

私は何もしなくていい。

このひとはわたしにすがりつかない。

私は何もしなくていい。

ずっとずっと、イシュヴィリアナの人のためにあるごとく、良き聖女でいようと思った。

だけでもう、それが怖い。

泣き疲れたのか、気が緩んだのか　ノアはゲイルにしがみついたまま眠りに落ちていた。

手はしっかりとゲイルを離すまいと、彼の服を握り締めている。

苦笑しながらゲイルが頬にかかるノアの銀の髪をはらう。

いつからこんなに無防備になっただろう。

出会った時、彼女は何の感情もなく見つめ返してきた。しかし后にすると言った瞬間に目つきが変わり、自分を睨みつけてきた。憎悪をいう感情を含みながら。

いつから彼女が自分に頼るようになったんだろう。　どうして？

劇的に変わったのはやはり、ノアが生死の境を彷徨ったあのときか。

「……陛下、ノア様は」

ラトヴィアがノックをして、ゆっくりと扉を開ける。

よく出来た女性で、ノーアのことをよく考えている。彼女を探し出したのは正解だった。

「もう大丈夫みたいだ。疲れて寝てる」

「まあ、淑女が男性に寝顔を見せるなんて」

と冗談を言いながらも、ラトヴィアが安堵しているのはゲイルにも分かった。

「……ノーア様は辛いことを溜め込む人なので、心配だったんです。いつも宥めるのは殿下の役目で……と、申し訳ありません」

言うなれば殿下、つまりアジムはゲイルの恋敵だ。死人は美しいとはよく言ったもので、生きた人間が勝とうとすればかなりの強敵であることは間違いない。

「気にするな。……王子はどんな人柄だった？」

それは単純な好奇心だった。

恋敵がどんな人間だったのか、ただ純粹に気になったのだ。

「外見は陛下よりずっと繊細な感じですよ。まあイシュヴィリアナ人は皆そう見えるんですがね。幼い頃は本当に絵に描いたような完璧な王子様でいらっしやいましたよ。優雅で穏やかで優しくして」

ゲイルが一番覚えているのは王子の死に顔だった。

穏やかに、ただ穏やかに眠っているようなその顔は印象に残っている。

「しかしまあ、大人になると結構やんちゃで……本質は変わらないんですけどね。ノーア様に対しては本当に妹のように可愛がっていらっしやいましたよ。二人が寄り添う姿はとても絵になるって皆で騒いでね」

そこでまたラトヴィアがすみません、と一言謝る。

ゲイルは内心苦々しくも思いながら気にするなと答える。

「小さな頃から三日と間を置かずに会いに来られてました。ノーア様には気心の知れた人が少なかったので、心配だったんでしょうね。

いつだかの戦であやうく失明しかける怪我をしましてね。右目のよこに傷跡ができてしまって、せっかくの良い男が台無しになっ

て

「傷跡？」

「そんなものあったらどうか。」

「ええ、凄く目立つわけじゃありませんけどね。じっくり見ると気づくくらい。」

記憶の中の王子の顔を何度も思い返す。

右目の横に、傷跡。

何度思い返してもその傷跡が思い浮かばない。それほど長く見たわけではないし、記憶が正しいとは言えない。しかしゲイルの胸に小さな疑問が浮かぶ。

遺体に傷跡はなかったとする。

それはなぜか。

別人だったから。たとえば影武者だった。

では王子は？

「……楽園には、王妃様も姫君もいらっしやるもの。陛下はきっと寂しくないわね。」

ノアが以前死んだ国王と王子の最期の様子を聞いてきた時にそう言っていた。

なぜ王子のことは何も言わない？ 父のように慕っていた王よりも、恋人のことを考えるのが普通ではないのか？

死んでいないと、知っているから？

王子は生きている？

まさかと笑うことはできなかつた。

身代わりや影武者なんていくらでも作れる。

そしてもしも王子が生きているのなら　それはオルヴィスの脅威になる。もしかすれば再び戦になる。

なにより　ゲイルにとっての強敵だつた。

『愛していたか、王子を』

『愛してたわ』

即答だつた。何の迷いもなかつた。

彼が生きていると、ノーアが知っているとしたら、彼女は永遠に自分を見つめてくれないかもしれない。

永遠に、王子を想い続けるのか。

もしも、生きているのなら。

もう一度ゲイルは『イシュヴィリアナの王子』を殺さなければいけない。

一国の王として。

一人の男としても。

たとえノーアに再び恨まれるようなことになっても。

腕の中の少女は、安心しきって眠っている。

そこまでの信頼を、失うことになるのだろうか。

ノアは今限りなく不安なはずだ。このまま上手く誘導すれば

共にオルヴィスに来てくれる可能性はかなり高い。そうしてしばらく時間が過ぎれば、后になることも承諾してくれるだろうとゲイルは予想している。それほど嫌われていないはずだ。

しかしそれでいいのか。

彼女の中にもう一人の男を住まわせたまま。

それで自分は満足できるのか？

ああ　　なんて醜い独占欲。

ノアが心を許してくれるようになってから、どれほど自分は欲深くなっただろう。

彼女を誰にも渡したくない。

## 20：波紋

目覚めるとゲイルはいなくなっていた。

いつの間にか長い夜は明けて、朝日が眩しく、目覚めたばかりのノアの目を刺激する。

ぼんやりと起き上がると、寝台の上にゲイルの上着が何かの抜け殻のようにそこにあった。その上着をしっかりと握り締めている自分の右手に驚いた。

ぎゅ、と上着を抱きしめるとかすかにゲイルの香りがした。ほっと安堵する。

雨は一晩降り続いたようだ。木々がしっとりと濡れている。

聖女でいることが、怖い。

誰かに縋りつかれることが辛い。

皮肉にも昨日の出来事がノアの意味を決めた。

ゲイルと一緒にオルヴィスへ行こう。

そこでは聖女として扱われることもなくなるし、過剰な期待もされない。それは今のノアには何よりも幸せなことだった。

后になるといふ決意はまだ、固まらない。

ゲイルが好きなのかと聞かれても正直どう答えていいのか分からない。でも側にいたい。

ゲイルの側にいることが今はどんな場所よりも安心できるのだ。

山ほど積み重ねられた書類を睨みながらゲイルがため息を吐き出す。

オルヴィスへの帰還ももう秒読み段階といって良いだろう。そんな時に新たな問題を見つけるとは思わなかった。

「ロハム」

同じように書類と睨みあっている幼馴染に声をかける。

「なんですか国王陛下」

「……少し気になることがある」

「なんですか、遠まわしに言うのは時間の無駄なんでとつとと白状してください」

書類から目を離さず、ロハムは国王相手とは思えない口調で答える。

「……おまえ、処刑前にイシュヴィリアナの王子に会ったよな？」

「会いましたよ。何ですか今更」

「王子の右目の横に、傷跡はあったか？」

ロハムが顔をあげた。

訝しげにゲイルを見てくる。

「ありましたよ。確か。そう、けっこう目についたんで覚えてます」

「おまえが王子に会ったのは処刑前だよな？」

「そうですね。何なんですか、一体」

「遺体に、傷跡はなかった」

埋葬を任せた部下にも聞いた。何人に聞いても、答えはゲイルと一緒にだった。

ロハムが言葉を失う。何度か何か言おうと口を動かすが、結局何も言わなかった。

「……………身代わり、か」  
ゲイルが背もたれに身を預け、天井を見上げてため息を吐き出す。  
これではば確定した。

王子は生きている。

「一体いつ……………それに顔はまるで一緒だったじゃないですか。急に  
しらえであんな身代わりが見つかるとは思えません」  
「イシュヴェリアナの人間を呼べ。問いただすしかないだろう」  
王子の影の存在があつたかどうか。  
それは今どうしているのか。

呼ばれてやってきた男は驚くほど簡単にすべてを吐き出した。身の  
保身の為だろうか。もとより忠誠心の薄そうな男だ。

王子には昔から驚くほどに似た影武者がいたということ。それが  
ジルダスという名の青年であつたこと。彼は終戦間際に不治の病を  
理由に城から去り、もうこの世にいないこと。それがその男の知る  
すべてだつた。

出来すぎてはいないだろうか？

「……………困りましたね。王子は今どこにいるのか……………しかしイシュヴ  
イリアナの中できな臭い話は聞きませんよ」

「国外に逃げたんだろう」

「イシュヴェリアナと友好関係にあつた国はすべて押さえてありま  
す。王子に似た人物の入国があれば気づく」

もし王子が生きているのなら。

普通ならもう一度国を取り戻そうと動くはず。国内で味方を集め  
るか、縁戚関係にある国に助力を求めるか。

そのどちらも動きはない。

何が目的だ？

知っているとしたら、たった一人しかない。

「どこに行くんです？」

立ち上がったゲイルに口ハムが問いかける。

「月の塔に。聖女なら何か知っているだろう」

「……いいんですか？」

その問いには答えず、ゲイルは部屋を出た。

ノアは昨日たくさんの人に傷つけられたばかりだ。

こんな話本当ならしたくない。

けれどももうオルヴィスへの帰還が迫っている。イシュヴィリアナの情勢を知りづらい状況になる前に、手は打たなければ。

自分は、国王なのだから。

「ゲイル？ どうしたの？」

昨日やってきたばかりじゃない、とノアが微笑む。

ノアは部屋からは出ないものの、昨日よりは落ち着いたみたいだ。とゲイルはひとまず安堵した。

「ちよつとな」

「ああ、そうだ。上着、ごめんなさい。帰り寒かったんじゃない？」

綺麗に畳まれた上着を返されて、ゲイルは苦笑した。昨日の格好は馬鹿じゃないのかと言いたくなるほどの大仰な正装なので、一枚脱いだところで寒さは感じない。

いつもと違うゲイルの笑顔に、ノアは首を傾げた。

風邪でもひいてしまったのだろうか。それとも、何かあったのか。

しかしゲイルが今日会いに来てくれたのはちょうど良かった。オルヴィスへ共に行くと、言う機会がいつ来るかと心配だったのだ。オルヴィスへ帰る日はもう間近だから。

「ゲイル、私ね」

あなたと共に、オルヴィスへ。

「ノーア」

決意の言葉はゲイルによって遮られた。

その低い、冷たい響きにノーアは思わず言葉を飲み込む。

なんだろう。

どうしたっていうんだろう。

「……アジム・アブラシード・イシュヴィリアナはどこにいる？」

その言葉はとても鋭く、ノーアの胸に刺さった。

飲み込まれたままの決意の言葉は、声になることはなかった。

## 21：天秤

「……何、言ってるの」

ああ、駄目だ。声が震えた。

予想しないゲイルの言葉は、完全にノーアの不意をついていた。

「ラトヴィアから聞いた。王子には右目の横に傷跡があった。でも遺体にはそんなものなかった。しかしその傷跡を記憶してる奴らが何人もいる」

「……あなたの勘違いじゃないの？」

どうにか誤魔化そうとするが、もうゲイルの中で確信に近い位置にあるのはノーアにも感じ取れた。

「ジルダスという影武者がいたことも確認がとれた」

ノーアは唇を噛んだ。

誰がそんなことまで話したのだ。怒りにも似た感情がノーアの中で湧き上がった。

アジムが生きているということも、ジルダスの存在も、かつての部下はほとんど知っている。おそらくアジムの行き先までは知らされていないだろうが。

「処刑したのは影武者の方で、本物の王子は生きている　そうだろう？」

どうして今なの。

きつとアジムはオアシスに向かってる。遠回りをしているだろうから、まだ辿り着いていないはず。まだアジムの生存が知られるわけにはいかなかったのに。

オアシス 神に愛される土地。そこは水に溢れ、神の守護があるとされている。手を出した国は必ず滅びると言われている不可侵の都。

「そこまでアジムが辿り着けば、オルヴィスは手が出せない。それまで、知られるべきじゃなかった。」

「……もしそれが真実だとして、私があなたの味方をすると思うの？」

そう言いながらノーアはゲイルを睨んだ。

アジムのことを話せば、確実に殺される。兄とも慕う人の運命が分かっていて、ゲイルにすべてを話すわけがない。

「まさか。愛してるんだろ、王子を……今も」

ゲイルが苦笑する。

ノーアは即答はできなかった。ゲイルの言う愛は違う。

「……アジムは大切な人よ。たぶん、自分よりも」

以前のように愛しているとは言えなかった。ゲイルにその言葉を言うことは、ノーアにとってもなぜかひどく苦しかったのだ。

「このまま放っておくことはできないの？ アジムはイシュヴィリアナを取り戻そうなんて考えていない。もう彼は国の名前を捨てたのよ。オルヴィスの脅威になんてなり得ない」

もう生存を誤魔化そうとするより、アジムを守るためにゲイルを説得する。

「不安の芽を残しておくわけにはいかない」

冷たいゲイルの言葉にノーアは泣きそうになった。

いつもあんなに優しく笑うのに、少ない言葉でいつも簡単に通じていたはずなのに、どうしても今日に限って伝わらないんだらう。

「不安の芽なんかじゃない。もしもアジムがもう一度オルヴィスと戦うつもりがあったなら、私をここに置いていくはずがない」

オルヴィスの本拠地となるであろうこの場所に、ノーアがいることをアジムは望まない。ノーアを連れて逃げようと本気で思っていたのだ。彼は。旅慣れない女一人が増えればかなりの足手まといに

なるとわかっていても。

「たとえ本人にその気がなくとも周りが煽るんだ」

「そんなこと………」

言葉が続かない。どうすれば上手く説明できるだろうか。どうすればゲイルに届くだろうか。

『ノア様の、望むように』

どうすればいい？

ゲイルもアジムも、同じように大切な人なのに。どちらも失いたくないのに。

アジムが見つかって、処刑されたら、きっとゲイルのことを許せない。憎まざる得なくなる。同時にゲイルも失うことになるのだ。今までのような穏やかな時間はもう訪れなくなる。

「大切な。あなたもアジムも。私にはどちらかは選べない。あなたがアジムを殺そうとするならアジムを庇うし、アジムがもしもオルヴィスに戦を仕掛けようとするならそれも止めるわ」

ゲイルは何も言わない。

零れそうになる涙がゲイルに見えないように、ノアは俯いた。

長い銀の髪はノアの顔を隠してくれる。

「お願い、もうあなたを憎ませないで」

もうゲイルを憎みたくない。

頬に温かな手のひらが触れる。

拒むことなくそのぬくもりに甘えた。

どうしてこんな時にも優しいの。どうして私を甘やかすの。

「泣くな」

手のひらが優しく涙を拭う。

見上げれば困ったようにゲイルが自分を見ていた。

共に行こうと。

ゲイルと一緒にオルヴィスへ行こうと、そう思った。

でも出来ない。アジムの生存が知られた今、これ以上彼に歩み寄ることは出来ない。

たぶんこのままゲイルに優しく守られ続ければ、この唇は意に反してアジムのことを話してしまうかもしれない。彼と一緒にいたいという願いを叶えるために。大切な家族を切り捨ててもいいと思ってしまうかもしれない。

彼と一緒にいればいるだけ、想いは膨らむばかりだ。

「オルヴィスへの出立は五日後だ」

ゲイルはノーアの滑らかな頬を撫で、囁くようにそう言った。

五日。

「もしもオルヴィスへ共に来るのなら、出立の朝城まで来い」

答えは聞かない。

そう言い残してゲイルは部屋から出て行った。

再び突きつけられた決断。

でももう選択の余地はなかった。

アジムも、ゲイルも、大切なのだ。

太陽の消えた国、君の額の赤い花

どちらがより大事なのかなんて判断できない。それぞれの大切な意味があまりにも違いすぎる。  
同じ天秤にはかけられない。  
恋と家族は別物だ。

どちらも守れるようにしか、ノアは動けない。

## 22：別離の朝

「あなたも行っていいのよ、セリ。故郷に帰りたいでしょ？」  
穏やかに微笑む主人を真っ直ぐに見つめて、セリは首を横に振った。

白状な他の女官は、ノアがオルヴィスへ行く意思がないということ告げるとそそくさと自分達だけ身支度を始めた。もとより王の帰還と共にオルヴィスへ帰る予定だった彼女達は仮初の主などどうでもいいらしい。

「私はノア様に仕えているんです。ノア様がここに残るとおっしゃるなら、私もオルヴィスへは帰りません」

セリはオルヴィスの中流階級の娘だ。今までも何度か貴族の姫に仕えたことがあった。

そしてノアに出会って、ようやく自分が全身全霊をかけて仕える人を見つけたのだと嬉しくなったのだ。

貴族以外は人間じゃないというように蔑む過去の主人とは違い、ノアは控えめで思慮深いとても魅力的な人だ。セリのことにも気遣ってくれる優しい人だ。

「ここに残るのがラトヴィア様だけでは大変でしょう？ 私なんかがいっても役に立つと思いますよ」

「……セリは充分に役に立ってくれてるわ。でも家族はオルヴィスにいるんでしょう？」

「平気ですよ、もともとあんまり会えませんし。オルヴィスなんてそう遠くないですし！」

明るく笑うセリにつられて、ノアも微笑んだ。  
別れの時は、もう明日に迫っていた。

あの日から、ゲイルは月の塔に来なかった。

『オルヴィスはそう遠くない』　　そうだろうか？

今までのように呼んでも、すぐに駆けつけてはくれないのだ。涙を拭ってくれるほどの距離にはいないのだ。叫び声も届かない、遠い異国。

永久の別れじゃない、それは分かっている。

側にいたい。いつでも会える距離にいたい。でもきつと、近くにいればアジムのことを零してしまうかもしれない。

だから、イシュヴィリアナに残る。

もう決めたのだ。

「　　いいんですか、ノーア様」

ラトヴィアが眠る前にやって来て、そう問いかけた。

「……いいの。どうせ后になんてなれるわけがないし。見知らぬ土地なんて怖いもの」

「私が迂闊に殿下のことを話したからですね」

ノーアはラトヴィアを見上げる。

彼女はアジムの生存を知らないはず。なのにどうしてそんな答えに行き着くのだろう。

「ラトヴィア、どうして……」

「申し訳ありません。聞いてしまったんですよ。お二人の会話を……」

淑女のすることじゃありませんね、と苦笑しながらラトヴィアが言う。

「アジム様は、生きていらっしやるんですね」

ほっと安堵したように、優しく微笑む。思えばラトヴィアはアジムに対しても容赦なかった。一国の王子に面と向かって説教できる女性はこの世に何人いるだろう。

「……最愛の人に会いに行ってるわ。イシュヴィリアナという名前は捨てて、ただのアジムとして」

そう言えばラトヴィアにも分かるはずだ。アジムの初恋話は結構有名だった。

「そうですね……まあ、それが良いんでしょうね。安全でしょうし、幸せでしょうから」

地名を口に出さなかったノアの配慮を理解してか、ラトヴィアもオアシスとは言わない。賢い女性だ。

「でもノア様、アジム様もきつと、ノア様の幸せを望んでいらつしゃいますよ」

「……分かつてる。でも、私今のままでも不幸じゃないわ」

「不幸ではないのと、幸せなのは同じじゃありませんよ」

「……分かつてる」

誰かに今幸せかと問われれば、ノアは少し迷いながらも首を横に振るに違いない。しかしノアは物足りなさの原因を理解していても、それを求めない。

昔、アジムから彼の淡い恋について聞かされた時に、悲しくなった。

とても可愛がられていた。彼の一番は自分だと、そう思っていたのかもしれない。それほどにアジムはノアを気遣ってくれていたのだ。

『……わたし、身代わりなの？』

遠いオアシスの姫の代わりに、こうも大事にしてくれているのかと、ノアがアジムに聞いた。

アジムとノアが出会ったのはちょうど、アジムがオアシスの訪問を終えた直後だった。

ノアが六歳くらいの頃だ。

『どうしてそう思う？ ノアはノアで、彼女は彼女だよ。誰も誰かの代わりになんてなれない』

『じゃあ、わたしが聖女だから？ だから優しくしてくれるの？』  
そう問いかけるとアジムは困ったように微笑んだ。

『ノーアだから、大事なんだよ。聖女だとか関係なく。妹みたいなものかな。家族は大事だろう？ 友達とか』

『……分からない』

ノーアには家族なんていなかったから、分からなかった。唯一母のように感じた先代の聖女はもう亡くなっていたし、家族という概念がノーアの中には存在していなかった。大人ばかりの月の塔には友達と呼べる存在もいなかった。

それに気づいたのだろう、アジムはノーアの髪を優しく撫でながら提案したのだ。

『じゃあ、家族になろう。ノーアが妹で、俺がお兄ちゃんかな。それで、友達でいよう。家族でもあって友達でもある。すごいだろ？』

よく分からなかったけれど、子供の頃のノーアにはそれが確かに凄く考えのように感じて、素直に頷いた。

『そうして分かればいいよ。家族とか、友達とか。そしたらきっといつか俺の気持ちも分かるから。ノーアは友達で、家族だから……だから大切なんだ』

オルヴィスへ行かないと決めたことに後悔はしない。

アジムの為、それは自分の為でもある。

けれど このままゲイルと別れば、きっとそのことを後悔する。

ノーアが目を覚ますと、まだ少し暗かった。

朝日が昇る前なのだろう。窓の向こう 太陽の昇る東の空を見

れば徐々に明るく、闇を取り払うかのように空が赤く染まっていく。  
息を呑むような朝焼け。  
彼の鮮やかな髪の色。  
まだ、間に合うはず。

見間違いかと、ゲイルは目をこすった。  
空が赤く染まる。その中で一人の少女が馬に乗ってこちらに向か  
ってくるのだ。

「ノアア」  
息を切らしながら、ノアアは馬から下りる。

幻じゃないだろうか。朝焼けが屋気楼を見せるなんて聞いたこと  
がないけれど、彼女がここにいるはずがないのだ。

「……ゲイル」  
名前を呼ばれて、やっと目の前の少女が自分が作り出した幻でな  
いと分かる。

「どうして」  
ノアアはオルヴィスへ行かないと、そう決断したのは数日前に分  
かっていた。月の塔にいた女官は皆引き上げて口々にそう言ってい  
たのだ。仕方なくイシュヴィリアナの城に残る女官を数人、月の塔  
に行くように手配したのは他ならぬゲイルなのだから。

「……ごめんなさい、オルヴィスへは行けない」  
それは予想していたはずの言葉だ。それなのに、思った以上に鋭  
く胸に突き刺さった。

「……そうか」

荷物も持ってきていないノアが、まさかこのまま共にオルヴィスへ行くなんて言い出すわけがない。それでも少し期待していた自分を笑った。

「でも、あのままさよならは嫌だったの。だって色々、確認したいこともあったし」

「確認？」

「次はいつ、会える？」

それはもう二、三日後のことではないと分かっているはずだ。ノアの瞳はわずかに揺らぎながらゲイルを見つめていた。

「……確約はできないが、数カ月後だな」

数ヶ月　ノアは俯いてそう呟いた。

その姿に、ゲイルは少し自惚れてしまいそうになる。

「……手紙を出しても、迷惑にならない？　というか、ちゃんと届くかしら」

国王への手紙はたくさんの人間の手に渡り安全を確認されてから、本人に届く。元敵国の人間からの手紙と、握りつぶされたりはしないだろうかとノアは不安だった。

「どうして迷惑になるんだ　無理にでも、届けさせる。必ず」  
「良かった」

ほっと安堵したように微笑むノアを思わず抱きしめたくなくて、ゲイルは必死で堪えた。

「いい雰囲気のところ申し訳ないんですけどね、陛下。もうそろそろ出発ですよ」

ロハムが頭を掻きながらおずおずと声をかける。

オルヴィスへ早く着くために、わざわざこんな朝早くから出発するのだ。

「　ああ」

せめてあと五分と言いたくなかったが、国王が時間を遅らせると他に示しが見つからない。

「……気をつけて。必ず手紙を書くから」

ノアが少し悲しげにゲイルに微笑む。そつとその白い手を握り、ゲイルも微笑み返した。

「オルヴィスに着いたら、知らせる。……元気で」  
握られていた手が離れる。触れていたところはやけに風が冷たく感じた。

「ゲイル。少し屈んでくれない？」

離れていこうとするゲイルの上着を掴み、ノアは引つ張った。意味が分からず、首を傾げながらゲイルが屈む。いつもより近い距離にある顔にノアは少し照れながら、背伸びをしてゲイルの額にそつと口付けた。

「おまじないよ」

掴んでいた上着をぱつと離すと、赤く染まった顔を隠すようにノアは俯いた。

不意をつかれたゲイルはしばらく固まって、少し時間を使ってようやく事態を飲み込む。ゲイルは可笑しくなって、笑い出した。まさかこんな不意打ちがあるとは思わなかった。

俯いたままのノアの前髪をかき上げ、同じように額に口付けた。聖女の印であるという、額の赤い花に。

「なっ……」

ノアが顔をさらに赤く染め上げて、顔をあげた。

「またな」

ゲイルはノアに背中を向けたまま手を振る。にやけた顔を見られたら格好がつかない。

王を先頭に、オルヴィスへ帰る一団。

その姿が見えなくなるまで、ノアは立ち尽くした。

見事なまでの朝焼けはいつしか青く変わり、爽やかな風がノアの髪を攫う。心地よいまでの一日の始まりだ。

「また、いつか」

太陽の消えた国、君の額の赤い花

ぼつりとノーマは眩く。

さよならはどちらも言わなかった。

また会えると信じているから。

## 22：別離の朝（後書き）

ご愛読ありがとうございます！

一応ここで一区切り、になります。だいたい半分くらいまできた感じ  
です。

次回から後半となるのですが、諸事情により執筆のペースが格段に  
落ちると思います。

連載は続けますし、必ず物語は完結まで進むのでご安心ください。

## 幕間：手紙

胸に残るあの鮮やかな朝焼けを、私は決して忘れないだろう。

太陽が顔を出すたびに、太陽が地平線の向こうへ沈むたびに思い出す。

あの穏やかな赤を。

太陽のようにあたたかなあの人を。

ゲイルがオルヴィスへと帰還して、数週間後にはノーアのもとに一通の手紙が届いた。

内容はごくわずかで、オルヴィスに無事ついたこととノーアの身を案ずるようなことばかりだった。それでも多く言葉を送ろうと四苦八苦している様が文字から感じ取れ、ノーアは思わず手紙を見て笑う。

オルヴィスへの道のりを考えれば、この手紙が本当に到着してすぐにかかれたものだと分かる。忙しい公務の合間を縫って書いてくれたのだろう。

「返事を書かなくちゃね」

ノーアは手紙を丁寧に畳み、宝物でも扱つかのように優しく引き出しの中にしまった。

『手紙をありがとう、無事にオルヴィスへ着いたようでほっとしています。』

こちらは特に不自由もなく、静かな時間が過ぎていきます。あなたが来ないと、月の塔には誰もやってこないものね。

新しい女官は皆イシュヴィリアナの人らしく（あなたの采配なかもしれないけれど）丁寧に接してはくれますが、セリのように親しく話しかけてきてくれる人はそう多くありません。国がなくなつたというのに、聖女はまだ敬われるなんて不思議なものね。

時々ですが、一人でも馬に乗り遠出するようになりました。こうして外に出られるのもゲイルのおかげね。今更だけど、ありがとう。これから寒くなる一方なので、今のうちにできるだけ外出しておきたいと思います。雪が積もってしまったら寒くて塔の中に籠もってしまいそうで。雪に埋もれるイシュヴィリアナも綺麗でしょうけど。

オルヴィスはイシュヴィリアナよりも暖かいと聞きますが、どうなのでしょう？

私の風邪の心配よりも、自分の体調に気を遣ってください。自慢ではないけど、私風邪なんて滅多にひかないのよ。ラトヴィアが証人になるわ。

手紙を届けてくれた方にそのままこの手紙を託しますので、早めに手元に届くのではないでしょう？

到着なさったのが夕方だったので、塔に泊まるように勧めたの。眠る前にこれを書いていきます。

夜の月の塔はとても静かです。セリなんかは幽霊が出そうだって夜の塔の中を歩くのにそれは怯えるの。十年以上ここに住んで

いる私が見たことがないんだから、怯える必要はないと思うのだけ  
ど。ここが「神の末娘」と初代国王の墓地なのだと言えたら卒倒す  
るでしょうね。

身体だけは壊さないように、自分を大事にしてください。

それと手紙にはできるだけ近況も書いてくれると嬉しいのだけど。  
私のことを聞いてくるばかりじゃ、公平じゃないでしょう？

この手紙が無事あなたのもとに届くことを祈りつつ

」

最後に自分の名前を書いて、ことん、とペンを置き、手紙の封を  
閉じる。

もう中身を確認できない状態になった途端、無性に不安になった。  
変なことを書いていないだろうか？ 文字をもっと綺麗に書けば  
良かっただろうか？

机の上に置かれた手紙を凝視して、ノアはしばしの間悩んだが、  
大丈夫だと自分に言い聞かせてランプの火を吹き消した。

「やだ、もうこんな時間」

手紙を書くのに集中しすぎていたのか、もうとうにいつもは夢の  
中にいる時間になっていた。

太陽の消えた国、君の額の赤い花

窓の向こうには獣の爪あとのようにか細い月。

今にも吹き折れそうなその弱々しい月は、確かに光を放ち地上を照らし出していた。

## 23・遠き君

「……顔がだらしくなってるぞ、国王陛下」  
つい先ほど届けられた手紙を読む国王の姿を見て、ため息を吐き出しながらロハムが忠告する。こんな顔を彼を崇拜する部下が見たら一気にその理想像も崩れ去るだろう。

「……言うほどにやけてない」  
「いつもそんな顔してないから、言うほどじゃなくても充分なんだよ、おまえの場合。何回読み返せば気が済むんだ、仕事しろよ」  
どうせ大したことは書かれていないのだ、愛しているとか会いたいとか、そういう甘い言葉なんて微塵もない。読んでいないが断言できる。

「それで、王子の追跡は本当にしなくていいのか」  
ロハムは抱えていた書類を机の上にとざりと置いた。少し声を潜めてゲイルに問いかけると、彼はすぐににやけた顔を元に戻した。  
「イシュヴィリアナに近づくどころか、遠ざかっている。今のところは放つていても問題ないだろう」

「あんなに敵視してたくせに、どういう風の吹き回しだ？」  
別に敵視していたわけじゃない。そう言い訳しそうになったが、ゲイルは黙った。あの銀髪の少女が一身に愛を注ぎ込んでいると思っていたときは殺してやりたいくらいだったが。

『大事な、あなたもアジムも』

少なくとも、あの言葉を聞いた瞬間にその思いは消え去った。

彼女の　ノアの中でゲイルとアジムは同等なのだ。それだけ、自分は彼女の中で重要な存在にまで成長した。

王子の生存を確認してから、しばらく見張りをつけた。彼らはま

るで関連のない国を転々とし、イシュヴィリアナに向かう気配は全くない。それどころか他の仲間がいる様子もなく、王子と、もう一人従者が二人でいるだけだった。

ノアから彼らの目的を聞き出せなかったので、どういってもりなのかは分からないが、イシュヴィリアナの復興を望んでいるわけではなさそうだ。

「……無意味な殺しはしたくない」

王子が死ねば、きっとノアはゲイルから離れて行く。そうして唯一残された家族を取り上げられ、一生彼の死を悲しんで生きていくのだろう。

「おまえが意外に戦争嫌いなのは知ってるけど……王子が動かないとも言えないぞ」

「その時は」

それは訪れて欲しくない最悪の時だろう。

ノアはゲイルとアジムの間で苦しみながら悲鳴を上げ続けるに違いない。

「その時は、全力で潰す。それだけだ」

たとえもう一度イシュヴィリアナが結束し、オルヴィスに歯向かったとしても、イシュヴィリアナに勝ち目はない。

オルヴィスの国土は決して豊かではないが、軍事力だけはもとよりイシュヴィリアナを大きく上回っていたのだから。

「それを聞いて安心しましたよ、国王陛下」

そう言っつて別の仕事をしに部屋から出て行こうとする幼馴染をゲイルは呼び止めた。

「イシュヴィリアナ領についてなんだが」

ロハムは振り返りながら物凄く嫌そうな顔をした。

旧イシュヴィリアナ王国はいくつかの領地に分けられ、功績のある者に与えることになっていた。そのすべてを分け与え終わってはいない。

そしてゲイルの言うイシュヴィリアナ領がさすのはイシュヴィリ

アナの王都を含んだ地域　つまりノーアの住む月の塔なども含まれている。今までは国王であるゲイルがそこを仮住まいとしていたので領主は決まっていなかった。

「……国王陛下、ものすつごく嫌な予感がするので帰っていいですかね」

「今から話すことが嫌なこととは限らないだろう」

「いやあ、俺勘は良い方なんで」

「まったく、本当に勘の良い」

ゲイルはにっこりと微笑む。

「あそこははずれ聖女様にあげるつもりだったんじゃないんですか」

ロハムが必死に逃げようとしている様子が少し面白いので、ゲイルは微笑んだまま何も言わない。

「大体、副都にしようかって考えてたんじゃあ……」

もとは一国の王都だった場所だ。しかもイシュヴィリアナの文化はオルヴィスよりも華々しい。その文化の中心とも言える王都をただの領地にするのは　少しもつたいないとも言える。

本音を言えば遷都してしまえばいいかもしれないと思うほどにその美しさは見事だ。だが遷都は面倒だというわけで副都としてのあの美しさを保とうと考えていた。

「ノーアがとつと王妃になってくれれば解決したんだが、あの通り逃げられてるんでね。副都とするにも復興の時間が必要だ　つまり」

「聞きたくないけど、つまり？」

「あああ、とため息を吐き出しながらロハムが聞き返す。

「つまり、おまえにその復興の責任者になってもらいたい」

「それってつまりイシュヴィリアナに行く人間が欲しいだけだろ！

？　聖女様との文通をより効率よくするために！！」

ノーアとの手紙のやり取りはやはり時間がかかる。王が目を通すものには厳しい監視がついていたりするし、何よりノーアとの文通

を快く思っていない人間も少なくない。

だから信頼できる人間に直接届けてもらう。もちろんイシュヴィリアナにオルヴィス側の人間の監視が必要なのも理由の一つであるが。

「……賢い部下も考えものだな」

「己の欲望に忠実な主を持って苦労しますよ本当に！」

そう言いながらもロハムは引き受けてくれるのだ。

「期待を裏切らない、信頼できる部下がいて助かるよ。返事を書くからそれまで出発しないように」

「早速かよ、まったく。書類の整理も何もかも、見張りがいないからって怠けるなよ」

準備をしてくるからそれまでに用意しておけ、と言い捨てて幼馴染は部屋から去る。

褒美が待っていると思えば机の上の書類の山も苦にならない。

用意した便箋とにらみ合いながら、ゲイルはノーアから出された宿題に頭を抱えていた。

自分のことを書くのは思いのほか難しい。

月の塔にやって来た青年を見て、ノーアは目を丸くした。

以前ゲイルとよく一緒にいた青年だったのだ。直接話したことはさほどないが、顔は覚えていた。

「……ロハム、さんですよ。どうしてイシュヴィリアナに？」

彼から渡された手紙はやはりゲイルからだった。

「いやあ、我儘な国王陛下のせいっていうかなんていうか……とり

あえず手紙は俺に直接渡してください。必ず届けますから。イシユ  
ヴィリアナの復興責任を命じられたんでちよくちよく来ることにな  
ったので」

つまりはゲイルに命じられてそんな面倒なことになってしまった  
のだろう。

「すみません、ご迷惑をおかけしてしまつて……」

「そう思つてくださるならとつと陛下の求婚を受け入れてくれる  
とありがたいんですけどね。少しは落ち着くでしょうから」

言われてノーアは真つ赤になる。

「ご、ごめんなさい。それはちよつと、その……」

「陛下は現時点では王子を見過ごすつもりみたいです」

顔を赤く染めあげていたノーアが、ロハムを見上げる。

彼らが言う王子は、ただ一人しか示さない。

「……あなたのためですよ」

苦笑するロハムをノーアは直視できなかった。

今度は羞恥で顔が赤く染まつた。自分一人の我儘で、こんな

「ああ、気にしないで下さい。あなたを責めてるんじゃないんです。  
王子がオルヴィスに敵対するような行動もとつていないので、こう  
いう決断をしただけです。もともと陛下は戦うことが嫌いなんで」

ノーアはどんな顔をしていたのだろう、ロハムは苦笑いをしたま  
ま、意外ですか？ 聞いてきた。

「戦争はたくさんのお血を流させ、たくさんのおものを傷つける。挙句  
残るのは大したものじゃない。陛下は　ゲイルは、王として人を  
殺してきた。多くのものを守るために。今、王子を殺しておけば後  
々の不安はなくなるでしょうけど……手を下さずに済むものにまで、  
非情になることもないですから」

そう言つと、ロハムは数時間後にまた来ると残して月の塔から去  
った。

会いたい。

今、ものすごく　ゲイルに会いたい。  
会って優しく抱きしめてあげたい。慰めてあげたい。あの人を支  
えてあげたい。

あの人を自分を隔てるこの距離がこんなにも憎い。  
今すぐに駆けつけたいのに。

遠くにいるあの優しいひと。

どうしてだろう。近くにいたよりも、あの人を思うことが多いな  
んて。

## 24：嫉妬

月日が流れれば流れるだけ、手紙は増えていく。

それはそれだけの量を自分も書いていくということ、束となった手紙を見てノアは少し驚いた。

ゲイルからの手紙は相変わらずノアの様子を気にしてばかりだが、始めた頃よりは自分のことをわずかに書いてあって、少しずつ改善されている。

「……忙しそうですね。ロハムさん」

少しやつれたようにも見えるロハムを見てノアは気遣わしげに声をかける。

オルヴィスとイシュヴィリアナを行ったり来たりを繰り返して、ろくに休む暇もなく仕事をしているのだ。このままでは身体を壊してしまう。

「まあ、それだけ陛下から必要とされてるってことですかね。今はオルヴィス側にも信用できない奴がちらほらいるんで、仕方ないんですよ」

「……私を生かしておくことを良しとしない人達でしょう?」

ノアは王妃として迎え入れることは危険だと思われるが、ただの虜囚にしては自由過ぎた。ノアも王子と同様に処刑してしまえばいいと思っている連中は少なくない。

「賢い人は誤魔化せないから厄介ですね」

と、ロハムが苦笑する。

「聖月祭での一件も、少し問題視されているんですよ。もしも万が一にあなたに天候を操ったり奇跡を起こさせたりする力があるなら、

野放しにはできないとね」

「あれは……偶然です」

「偶然にしては出来すぎていた。現にイシュヴィリアナの民は聖女が起こした奇跡だと信じきっているわけですし」

そう　あの一件の後には、イシュヴィリアナを去ろうと考えた。

民の期待はこの身に背負うにはあまりにも大きすぎたから。もう聖女として生きていくのは辛かったから。

「……本当は、あなたの耳には入れるつもりがなかったんですけど、あなたの気持ちを知るにはちょうどいいですかね

そう言いながらロハムがゲイルすら書かなかった真新しい情報を口にする。

驚くようなことではなかった。それなのに、ノーアはひどく動揺した。

「オルヴィスは本当に素晴らしいところですね。陛下も強くて、心強いですわ。あのイシュヴィリアナを短期間で制圧なされたとか」

ゲイルは曖昧に微笑むだけで、特に返事はしない。

目の前の女性は自分よりも三歳年下で、海路での交流が盛んなエル・フィリオスという国の王女だ。蜜色の髪を繊細に結い上げて、豪華なドレスを着こなしている様はまさにお姫様そのものだ。

「この国を知るたびに、ますます好きになっていきます」

につこりと微笑む姿は妖艶で　普通の男ならば見惚れるところなのだろう。

「それは良かった。留学の間、この国の多くを知っていただきたい。ゲイルの返答に、王女は不満げだった。

好きだけ滞在して良いですよ　王女が求めていた言葉はそんなところだろう。それはつまり王妃として迎え入れましょう、と同意になる。

王女の訪問は遠まわしな見合いだ。ゲイルに一刻も早く妻を娶らせようとする重鎮達と、嫁ぎ遅れそうな姫を早く結婚させたいエル・フィリオス王国の国王による陰謀だった。

残念なことに王女も乗り気になってしまったらしく　こうして仕事の合間に彼女の相手をしなければいけない。

いつかノーアに言った言葉に嘘はない。

オルヴィスには形だけではあるが後宮が残っている。しかしゲイルは何人も妻を持つつもりはない。生涯ただ一人でいい。

そしてそのただ一人はもう心に決めている。

月光を集めたように淡く輝く銀髪の、儂げでありながらも芯はしっかりとした美しい少女。

当面の問題はこの王女をどう扱うかにあった。

『陛下に、他国の王女との縁談がいくつか持ち上がってるんですよ』

そうそれは　可笑しなことではないはずだ。

彼は一国の国王なのだから。子孫を残すこともまた王としての重要な使命のはずなのだから。

彼は自分に求婚を　あれが求婚というのなら　したはずだが、それは彼個人の意思に過ぎない。王族の婚姻は決して一個人の感情だけで動かせるものではない。オルヴィスの中でノーアを王妃にしようと思うものはどれだけいるだろうか？

分かっていたことのはずだ。

彼と結婚するなんて無理だ。アジムのことを入れても、入れなくても。

なのにどうしてこんなに心が揺れているんだろう？  
どうして裏切られたような気分になるんだろう？

こうしている今も、あの穏やかで優しい、榛色の瞳に、自分ではない他の誰かが映っているのだろうか。  
ずしん、と胸に錘が下がったようだ。

嫌だ。苦しい。

自分が自分でなくなっていく気がする。  
醜く汚れていく気がする。

ノアは胸にそつと手を当てる。心臓が壊れそうなほどに激しく、不規則に動いていた。

手が震えている。上手く息が出来ない。

悲しいわけじゃないのに涙が浮かんできて、どうしてだろうなんて、頭の中の冷静な部分が考えている。

「嫌ですか？」

ロハムが問いかけてくる。

何故かその声は優しい響きを持っていた。ノアの記憶の中で、ロハムがこんなに優しく話しかけてきたことはない。

「わからない……けど」

あの人が見つめる先にいるのは自分であって欲しいなんて。  
なんて醜い独占欲。

こんな感情は知らない。

「経験不足な聖女様に、今のその気持ちは何なのか教えてあげましよう」

ロハムはまるで御伽噺の魔女のようにそう囁く。

継るように見上げたノアを見て微笑み、そしてその微笑みを残したままの唇が、醜いと感じるノアの気持ちを言い当てた。

「嫉妬、ですよ」

太陽の消えた国、君の額の赤い花

24：嫉妬（後書き）

ご愛読ありがとうございます。

おそらく次回は来年になってしまいそうです…いつもお待たせして  
申し訳ありません。

皆様よいお年を！

## 25：想い、芽吹く

きつくきつく蓋を閉じる。

決して中身が見えないように。

ゲイルはノーアからの返事を丁寧に畳みながら、黙々と仕事をこなしている幼馴染を睨みつけた。

「おまえ、何した」

誰に、と聞かないあたりが二人の関係を上手く表している。余計な言葉などなくとも分かるはずだという信頼が築かれているのだ。

「人聞きの悪い。何もしてませんよ、国王陛下」

「嘘付け。誤魔化せると思うな」

ノーアの手紙は、いつもよりも格段に内容が少なかった。筆不精なゲイルとは違ってノーアはかなりの量を書いて返してきてくれる。それこそ日常のとりとめもないことすら書かれているから、ゲイルとしてはノーアの様子が分かりやすく、何よりも多く綴られたその文字そのものが、心弾むものだ。

「気になるなら聞けばいいじゃないですか。明日にはまたイシユヴイリアナに行きますから、それまでに返事くださいね」

「聞けないからおまえを問い詰めてるんだろうが！ 分かってるだろそれくらい！」

怒鳴り始めたゲイルの目の前で顔色一つ変えずに口ハムは「別に教えてもいいんですけどね」ともったいぶる。

「どこぞの王様が舞い上がりそうなんでつまらないなあ、と。人の不幸は蜜の味ですけど人の幸せはうざいだけだし」

「どこがどう舞い上がるのかも分からない状況で放置するな。そし

て人の不幸を遠まわしに望んでいるようなセリフは慎め」

どうせゲイルの前でしかそんなことは言わないことは知っているが、一応は注意しなければならぬ立場だ。

「口止めはされなかつたので、エル・フィリオスの姫君のことを話しました」

ゲイルは絶句して　そして頭を抱えて「……しとけばよかった」と呟く。

それはつまり、ノアに見合いをしたのだと伝わったようなもので　しかもその見合い相手はしばらくゲイルの側にいるということ。

浮気がばれた夫というのはこんな心境なのだろうかと少し的外れなことを考えつつ、そのどこが自分を舞い上がらせるのかと口ハムを睨む。

「……………それで」

ノアはどう返したのだろうか。

どうでもいいだろうか、それとも少しは気にしてくれただろうか

自分は乗り気じゃないということを手紙にしたためて弁解したい気分だ。

「随分気になっていたみたいですよ。良かったですね。少しは脈ありで」

本当は嫉妬さえしていたのだが　それは言わないでおこうとすこし意地悪な心が口ハムを支配する。

嫉妬ですよ、と口ハムが指摘すると、ノアは一瞬その言葉自体を知らないかのように首を傾げた。それから何度か反復すると

火がついたように真っ赤になって違つと言いつ張っていた。あれではそうだとおっしゃっているようなものだ。

嫉妬という感情を、今まで知らなかつたのだろうか。

『嫉妬、ですよ』

そんなんじゃないと自分に言い聞かせながらも、ゲイルに送った今回の手紙はいつもの半分くらいしか書けなかった。

縁談があるそうね、おめでとう。どんな方なの？

どうして縁談なんて話があるの？ 私に求婚したくせに。私が頷けばすぐにでも后にすると言ったくせに。

大層綺麗な方だそうね。そんな人を后にできるなんて幸せでしょう？

ねえ、本当なの？

ねえ、どうするの？

ねえ、私はどうすればいいの？

気がつけばそんなことを書き出してしまいそうで、便箋と向き合うことが怖くなった。出来上がった手紙は何度も読み返して、可笑しなところがないか確認した。おかげでどこかよそよそしい手紙になってしまったけど。

相手の姫君はゲイルよりも三歳年下で 自分なんかよりもよっぽど釣り合える。どうせ私は子供だもの。

エル・フィリオスは南の方のそれなりに豊かで平和な国だ。オルヴィスと結びついておきたいところだったのだろう。最早なくなつた国の、王族でもないただの少女のノーアとはまるで違う。

ねえ、約束はどうなるの？

砂の海を見に行こうって、約束したでしょう？

それともそんな約束は、忘れてしまったの？  
私、乗馬も上手くなったのに。

一人でいればそんなことばかり考える。  
嫌だ、こんな自分。

側にいて。否定して。その瞳に私だけを映して。他の女なんて見  
ないで。

会いたい会いたい会いたい。

きつくきつく蓋を閉じる。

思いというなの箱の蓋を。

決して中身が見えないように。

私は何も知らない。何も思わない。何も考えない。

この思いの先にあるものがなんなのかなんて、知らなくていい。

「嫌ですか？」

頭の奥からロハムが何度も問いかけてくる。  
嫌かと、ゲイルの側に他の女ひとがいることが。縁談ひとが上がってきて  
いるということが。

「……そんなの……」

ああ、もう隠せない。  
蓋は消えてしまった。私が吹き飛ばしてしまった。嫉妬という名前の突風で。

「……………やだ……………」

ぼつりとそう零すと、涙が溢れた。  
鏡に映る自分は何だかとても惨めで情けなくて、それでもどこかとおしい。

流れる涙すらきらきらと輝く。醜い嫉妬すらノーアは憎めない。

誤魔化そうと思っていた想いは溢れてしまった。  
もう認めるしかない。

これが恋なのだ。  
ずっとずっと、そうだろうと思って、誤魔化してきた。  
どうせ実らない。釣り合いのとれていない自分と彼は、傍目からはとても恋人同士には映らない。

どれだけ想おうと、周囲に認められるものじゃない。  
だから、気がつかないまま闇に紛らせて忘れてしまおうと思ったのに。

私はゲイルが好きなんだ。  
たぶんもう随分と前からそうだった。

太陽の消えた国、君の額の赤い花

初めてあの鮮やかな赤に目を奪われた時に、既に逃げられなくなっていた。

彼が好きなのだ、と、気づかないように自分を誤魔化してきただけ。

25：想い、芽吹く（後書き）

どうせなら元日のうちに更新したかったのに……。間に合わなかった……。くそつ。

皆様あけましておめでとございます。

今年もどうぞよろしくお願いします。

新年早々二回もこけました。顔をぶつけて今顔に冷えピタ張ってます（笑）アホだ！。

## 26：姫君の眩き

「イシュヴィリアナの魔女をいつまで生かしておくつもりですか」「いいかげんにしろと怒鳴りたくなる衝動を抑えながら、ゲイルは一度深くため息を吐き出した。

「イシュヴィリアナの聖女を処刑するつもりも、幽閉するつもりもない。何度も言わせるな」

「しかしあの力はいずれ脅威になります」

「脅威になどならない。あれはただの少女だ」

上手くいけばこの国の力になる　そう断言するのは躊躇われた。聖月祭のあの突然の雨も、もしかしたらとゲイルは思っていた。

あんなに都合よく天候が変わるはずがない、それはおそらく自然の力ではない何かが影響したのだと。　影響を及ぼすとしたら、それはあの少女なのだ。

「もとは敵だった人間です。……陛下。まだあの小娘を后になど」

「同じ事を何度も言うつもりはない。わかったら早急にあの姫君を故郷に帰せ」

鬱陶しいだけだ、と冷たく言い放つゲイルは、ノアがまるで知らない一面だったろう。

「かの姫君のどこか不満だと言うのです」

あんなにも美しく、聡明な姫を　と言う重鎮達をゲイルは睨みつけた。

「ならば俺も聞こうか。イシュヴィリアナの聖女のどこに不満がある？」

歴史あるイシュヴィリアナにおいて、王家の次に　否、王家に等しい地位を手に入れていた少女だ。もはや無くなった国とはいえ、イシュヴィリアナは素晴らしい国だった。おそらくこの大陸の中でも一、二を争うほどに。

この頭の固い重鎮達はノーアを見たこともないから、あの繊細な美しさも、聡明さも分からないだろうが、十六歳であれなのだから、将来はかなり有望だ。

「……聖女を殺せばイシュヴィリアナの民は黙っていない。殺すわけにはいかないのなら、利用するほうがいいだろう」

声を低くしてゲイルは静まり返ったその場に、確かに聞こえるように呟く。

最近の朝議はいつもこんな調子で話にならない。誰も反駁してこないのを確認し、ゲイルは何も言わずに部屋を去った。

利用しようなんて、今はもう思わない。思えない。

彼女から奪い去ったものを、彼女に同じだけ与えたいだけだ。

家族と呼べる唯一の人達を、ゲイルはノーアから奪った。だから本当の家族を与えようと、その家族に自分がなれたらと、そう思う。

「お疲れですねえ、国王陛下」

ロハムが苦笑いを浮かべてゲイルを見つめる。いつも思うがこの男に国王陛下、と丁寧に呼ばれると厭味に聞こえてならない。

「疲れもするさ、面倒な人間ばかりで」

「爺どもが？ それともトリシャ姫が？」

「爺どもだ、と答えようとしてゲイルは動きを止める。」

「トリシャ？」

聞いたことのあるようなないような名前に、首を傾げる。ロハムは信じらんねえ、と呟いてため息を吐き出した。

「エル・フィリオスのお姫様の名前だろーが。覚えてないのか」

「ああ、確かそんな名前だったな」

今や面倒な存在第二位にまで上り詰めている姫君の名前は本当なら覚えておくべきなのだろうが、最近ではそんな余裕すらなかつ

た。

「姫君が知ったら嘆き悲しむだろうなあ」

「おまえが口を滑らさなきゃ知られることもない」

「頭の中は聖女様のことでいっぱいですか。しっかりしてくださいよ、国王陛下」

「……うるさい」

こんな反論しかできないのが悔しい。

今回の見合いの件がノーアの耳に入ってしまった、少しは気にしているようだという以上の情報を話さない幼馴染を睨みつけながらゲイルは手紙にしたためる文を考えていた。

こちらから見合いなんてどうでもいいんだと書いていいものだろうか。書いたところでノーアの場合真摯に向き合わなければ相手に失礼だとも怒ってきそうな気もする。そもそもあちらは特に何も聞いてきていないのに。

「昼頃にはイシュヴィリアナに向かいたいんですけどね。手紙はまですか？ それとも俺を手ぶらで行かせるつもりですか？」

「すぐに書く！」

と言いつつ、徹夜しても思い浮かばなかった言葉がほんの数時間で便箋を埋めるほど増えるかどうかは甚だ疑問だった。

自分は格別に美しいわけじゃない。

けれど王女という立場上、誰もが一度は目を奪われるはずだった。豪華に着飾り、美しく装えば十人並みのこの容姿もそれなりにはなるといふことだ。

それなのに。

どうしてあの国王はあの瞳に自分を映さないのだろう。

「私、そんなに魅力がないのかしら」

ぼつりと自信なさげに呟くと、国から共にやって来た女官はいいえ、と即答してくれた。

「トリシヤ様は素晴らしい方です。オルヴィス王もいずれ気づいてくださいますわ」

「無理よ。あの方の心にはもう他の人がいるんだわ。分かるもの。いつも誰かを想っている……誰かしら」

あの人をあんなにも夢中にさせられる人はどれほど美しいのだろう。星の瞬きを集めたように輝くのだろうか。太陽の光のように優しく微笑むのだろうか。

「……そういえば、イシュヴィリアナの聖女に随分目をかけていらつしやると聞きましたけれど」

イシュヴィリアナ。

それはもうない国の名前だ。

「聖女？ それは何？ 巫女みたいなものかしら？」

エル・フィリオスでは神に仕える女性を巫女と呼ぶ。なんとなく響きが似ている気がした。

「いいえ。イシュヴィリアナにおいて聖女はただ一人、王家にも等しい地位を得た神の愛娘です。イシュヴィリアナに滞在していた時は三日と空けずにお会いになっていたとか……」

三日。

それは多忙な王としてはかなり時間を割いていることになる。ただ一人の少女のために。

オルヴィスにやって来てから、オルヴィス王自ら訪ねて来てくれたことは一度もない。形式的な場か、こちらから誘わない限りは会えない。

「その方が、オルヴィス王の大切な人なのね」

「トリシヤ様……」

切なげな眩きは、女官の胸を打つ。

あの赤毛の美しい国王に出会ったときに、恋だと思った。

あんなに素晴らしい男性に出会ったことはなかった。

気高く、そして自信に満ちていて、それでいて驕れることはない。

この胸の高鳴りが恋なのだ。

どうすればあの素晴らしい王の心が手に入るだろう。

どうすればその聖女のように愛されるだろう。

どうして私を見てくれないのだろう。

もう消えた国の女など、政治的には何の価値もないというのに、

この自分が負けるのだろうか。

どうすれば私を見てくれるのだろうか？

「消えてくれればいいのに……」

邪魔な人間なんて消えてくれればいい。

そうすれば、あの方の心は私のもの。

太陽の消えた国、君の額の赤い花

それは何不自由なく、豊かな暮らしをしてきた姫の無邪気で残酷な眩きだった。

太陽の消えた国、君の額の赤い花

26：姫君の眩き（後書き）

随分と更新が遅れて、読者様をお待たせして申し訳ありません！！  
これから徐々にペースを戻していこうと思います。  
ご感想、ご指摘など一言からでもお願いします。

## 27：王妃の器

「……まいどうも。いつもの定期便です」

どこぞの商人かと勘違いしてしまいそうなセリフとともに、ロハムはゲイルからの手紙をノーアに手渡した。

「いつも、ありがとうございます……」

浮かない表情のノーアに気づいたロハムは、面倒な二人だと内心で呆れ果て、どうフォローを入れるべきかと考えている自分にため息を吐きたくなった。

どうせあの国王だ、結局弁解の言葉も何も入れずに当たり障りのない内容を書くだけなのだろう。

「帰るときになったら返事を取りに窺いますね、いつものとおり」「お願いします……でも少し、休んだほうがいいんじゃないですか？　ロハムさん、ずっと働いてばかりでしょう？」

こういう純粋な言葉は思いのほか嬉しく感じるものだど、ノーアと会話を交わすようになってから思うようになった。

「平気ですよ、国王陛下も似たようなものですから……俺の負担を減らしたほうがいいと思うんですけど」とオルヴィスに移住してください

「そ、それは……」

頬を赤く染めながらノーアが俯く。

その後で暗い表情になるのはやはり今オルヴィスに恋敵とも言うべき女がいるからだろうか。

「冗談ですよ、どのみち今の状況じゃあここにいるほうが安全です。オルヴィスではあなたを始末しろとうるさい人間が多いのでね。命がいくつあっても足りないような生活は嫌でしょう？」

「……私のことを、切り捨ててしまえばいいでしょう」

時折、この少女は自暴自棄になる。

ロハムはため息を吐き出して、ノアの顔を覗きこむ。

「それは国王陛下に面と向かって言ってください。俺に言っても無駄ですよ。まあ、あの人も聞く耳持たないと思いますけどね。毎日いいかげんにしろと怒ってますから」

「目に浮かぶようね。本当に、馬鹿な人」

大人びたノアの表情には、時々ハツとさせられる。

まだ十六歳の少女なのにと思うと同時に、彼女はこの一年足らずで大きな人生の転換期を迎えているのだ。もとより、大人よりも大きな責務を負わされていたわけだけだ。

「大馬鹿なんです。それほど、あなたが大事なんでしょう。あなたが自分の身も顧みずにイシュヴィリアナの王子を守るように。家族愛と恋愛という違いはあるにせよ。」

「ロハムさんは……どう考えますか？」

「何をです？」

少し冷めてしまった紅茶を一口飲み、喉を潤した。どうせ月の塔から出てしまえばこうしてゆっくり過ごすこともできない。

「あの人と、エル・フィリオスの姫が結ばれるのと、私とではどちらが良いのかと」

「ことり、とティーカップを置く。」

やけにその音が響いて、この部屋はそれほど静寂に包まれていたのだと気づかされた。

「……政治に携わる人間としては、エル・フィリオスを選ぶでしょうね。イシュヴィリアナがどれだけの国だったとしても、所詮はもうオルヴィスの一部ですから。王妃となる教育を受けた女性ですし、余計な口出しなんかもしないでしよう。少し面倒なのはエル・フィリオスに干渉される機会が増えることくらいですか」

「みるみるうちに顔を曇らせていくノアを一瞥し、ロハムはため息を吐き出す。」

「しかしまあ、俺という人間は誰よりも国王と接してますし、幼馴染ですから。愛のない結婚なんかはさせたくないなあ、と思っち

やうんですよ。あれの性格も知ってますし。あなたと結婚しても不利益になることはないし、イシュヴィリアナの統合も上手く進むでしょう。それにあなたはきちんと中身のある人間ですし」

「……………」

ノーアが首を傾げる。

分からないか、とロハムは苦笑して説明した。

「王家や貴族の女性は大抵、良き妻良き母になるための教育がみっちりされてますから。あれは教育というより洗脳に近いですけどね。そういう女性は皆型どおりにしか動けないんですよ。あれはこういうもの、これはこうするものって決まってるんで。あなたも王妃となる教育を受けた、立派な淑女ですけど。きちんと自分の意見があるでしょう？ それに賢い。オルヴィスは発展途上の国です。まだ成長していくんです。そういう国に必要なのは、王に助言できる王妃だと思いますよ」

「助言なんて」

出来ないとかくノーアは、そのままロハムの顔を見ることが出来ずに俯いた。この時は何故かロハムの顔を見てはいけなかった。

「……………あなたはきつと、そういう王妃になりますよ」

傍らでそつと支え続けながら、そつと道を示してくれるような。間違った時には正してくれるような。

そうして、そうした人が、彼の側にあると良いと、そう願っているのだ。

ことり、とペンを置きノーアはため息を吐き出した。

恋なんて したこともないから、どう行動していいのかわからない。一番簡単なのはオルヴィスへと行き、ゲイルの求婚を受け入

ればいい。その旨を手紙に書いて、返事をただ待てばいい。そうすればきつと、彼は反対する人間をすべて説き伏せてノーアを迎え入れるだろう。

でも、それで正しいのか分からない。

王族の婚姻が個人の問題ではないということは嫌というほど知っている。オルヴィスにおいて益があるのはあきらかにエル・フィリオスの姫だ。ノーアではない。

なにより　ゲイルはノーアのことをどう考えているのか分からない。

出会った次の瞬間に、后になれと、そう言われた。

対等でありたいと、そう言われた。

でも、愛しているとも好きだとも言われたことはない。物語の中にあるような甘い囁きなんてない。

ただ憐れんでいるだけなのだろうかと思ってしまうのだ。

国を失い、家族のように思っていた人々を失い、聖女という特異な立場に縛られている自分に、ゲイルは同情しただけなのではないかと。

「……………だって、私には何もない」

何もないから、王妃に相応しくないとと思う人がいる。

結局手紙にはいつもと変わらないことしか書けない。

前の手紙が短かった分、少しだけ分厚くなったそれを優しく抱きしめて、ノーアは柔らかに微笑んだ。

溜まっていく手紙。

それはまるでノーアの思いを形に表したかのようで。

こつした繋がりがあただけ、幸せだと思えるのだ。

「では、今回もお願いしますね、ロハムさん」

受け取った時とは打って変わって、ノアは春の日だまりのような微笑みを浮かべている。

「確かに、お預かりしました」

ノアから渡された手紙を無くさないように上着の内ポケットに入れ、ロハムは生真面目に答える。

「……………心配いりませんよ」

ロハムは余計なお世話だろうかと思いつつ、口が勝手に話し始めてしまったことに少し驚いた。

何のことだろうとノアはロハムを見上げて首を傾げる。

「陛下は姫を帰したがっていますから。そもそもお見合いというのはどちらも好印象を得て、結婚に進むものですしね。体面上の問題があるから、少しの間滞在しているだけです」

「気にしていないとは言いませんけど……………大丈夫です。仕方のないことだとは思いますが」

そう答えるノアの顔に翳りはなく、ロハムは少し安堵する。

「それと 周辺にはくれぐれも気をつけてください。周囲はラトヴィアさんなど信頼のおけるもので固めるように。最近反イシュヴイリアナ派の動きが活発になってきているようなので」

一変して真剣な面持ちのロハムに息を呑みながら、ノアは頷く。自害しようとしたこともあったし、ニルに刺された時は死んでもいいと思った けれど、今は死にたくない。勝手な思いではあるが。

一分、一秒でも長く呼吸していたい。出来るのならこの美しい世界を脳裏に焼き付けたい。死んでいったイシュヴイリアナの人のためにも。

「……………分かりました、気をつけます」

自分の置かれた状況を思い知らされる。

太陽の消えた国、君の額の赤い花

ただ穏やかに時間が過ぎていた、イシュヴィリアナが存在していた頃ではない。

小さな箱庭の中で静かに過ごしていられたのは、もうはるか遠い昔のことのようだった。

柔らかな陽光が窓から部屋を温め、穏やかな時間の流れる昼下が  
り。

この穏やかな時間も偽りのように感じるほど、ノアの身の回りは慌しい。月の塔を囲むように幾人かの衛兵が立っていることも、かつてイシュヴィリアナが繁栄していた頃には考えられなかった。

「……ねえ、ラトヴィア」

落ち着かなさげに本を閉じたり開いたりしているノアの傍らで戸棚を整理しているラトヴィアは、ようやく切り出したと振り返る。「なんですか、ノア様」

小さな頃から見てきただけあって、こういうタイミングはきつちり掴んでいる。話し出すのに時間がかかるのはノアの悪い癖だ。

「ラトヴィアは結婚は　してないわよね、ええっと、その」

「恋の一つや二つはしましたよ、これでも昔はそれなりの美人だったんですから。何十年も昔からここにいたわけじゃありませんし」

「そ、そうよね。それで？　どんな恋だったの？」

話のそれたことに気がついてラトヴィアはため息を吐き出す。肝心なことを聞くにはまだ時間を与えなければいけないらしい。

「ごく普通の恋ですよ。結婚の約束をした人もいました」

「……え、でも」

「結婚は、してませんよ。婚約中にその人が亡くなってしまったので。だから修道女になったんです」

「　それほど、その人のことを愛してたの？」

他の誰とも結ばれようと思えないほどに。

ラトヴィアは優しく微笑んでいいえ、と答えた。

「本当に心の底から愛していたのかと言われれば、たぶん違います。」

でも、結婚するのはその人だと思っていましたから　それ以外は考えられなかったんです」

「……愛していなかったの？」

予想とは違ったラトヴィアの返事に、ノーアは首を傾げた。

ラトヴィアの答えはまた一緒だった。

「長い人生を共に生きていこうと思えるくらいには愛していましたよ。この人となら穏やかに、幸せに暮らせるだろうと。そうして時間を重ねていけば、誰よりも愛していたと言えたでしょうね」

懐かしむように微笑むラトヴィアに少女の頃の面影が見えたような気がした。

消えてしまった未来を、ラトヴィアは今どう思うのだろう。

「……私は、ずっとアジムと結婚するんだと思ってた」

幼い頃に周囲の大人達に決められた婚約。それはもう刷り込みのようなもので、その未来を疑うことはなかった。

「それでも幸せになれたと思う。たとえアジムが他の誰かを愛している、私を蔑ろにはしなかっただろうから。ラトヴィアの言っているのと似てるかもしれない」

年を重ね、共に生きていけばそれは愛に変わったかもしれない。

「決められた道しか知らないから、こうして目の前の道がかき消されて……どうすれば良いのか分からないの。自分の思うように動くのって、意外と難しいのね」

苦笑するノーアを、ラトヴィアは優しく抱きしめた。

ノーアは、知ることのない母親のぬくもりのようなその温かさに、まどろむように目を閉じる。

「ノーア様には数え切れないほどの選択があるんです。ここから逃げて、聖女でもなんでもないただの少女として生きていくことだって出来ます。オルヴィス王の求婚を受けることだって、断ることだって自由です。けれどノーア様　あなたが幸せになれる道を、選んでください」

「……難しい宿題ね」

正しい選択をしる、と言われるほうがまだ簡単な気がする。幸せになれるかどうかなんて、未来の自分しか知りえないのだから。

「難しくなんてありませんよ。ノーア様　もう答えはあなたの中にあるのでしょうか？」

ああ、この人に隠し事なんて出来ないな、とノーアは苦笑した。

あの夕焼け色の髪が懐かしい。

金色にも見えるあの瞳を見つめたい。

あの人が私を求めるのは、国王としてなのだろうか？

対等でありたいと、そう言ったのもオルヴィス王としてなのだろうか？

分からないから　まだ、この地から旅立てない。

夜の帳が落ち、部屋には明かりが灯された。

窓の向こうで淡い輝きを放つ月を見上げてノーアは一つ決意する。

聖女は月の象徴。

太陽たる王を支え、暗闇をそつと照らし続ける存在。

王が消えた今、月が輝く術はない　ないはずなのに、その輝きはかつてよりも増しているように感じるのだ。

イシュヴィリアナは滅び、ノーアはゲイルと出会った。

それが運命というのなら。

彼と共に生きたいと願うこの心も、何かの導きだとも言うのだろうか。

今はまだ、決断できない。

彼の思いが分からないから。

もしも次に、オルヴィス王としてではない、ただのゲイルの口から、ノーアを求める言葉が聞けたなら、そのときは。

「ノーア様」

ノックと共に、聞き慣れない声がしてノーアは振り返る。

いつもならこの時間、セリが紅茶を運んでくれるはずだ。

「どうぞ」

ノーアがそう応えた後に入ってきたのは、月の塔の中で働く女官に違いはなかった。塔の中で何度か目にしたことがある。

もとよりセリとラトヴィア以外は必要以上にノーアに近づかなかつたし、またロハムの忠告以来、ラトヴィアが監視の目を光らせて近づけさせなかった。

「失礼します。セリに代わり、お茶をお持ちしました」

「……セリは？ 何かあったの？」

いつもこのお茶の時間に、一人では退屈だからとセリも同席させていた。その時間をセリも楽しみにしていたはずなのだが。

「風邪をひいてしまったみたいで。幸い微熱程度だったので早くに休ませました。すぐに回復すると思います」

そういえば、少し具合が悪そうだったなとノーアは思い、納得する。

「……そう。お大事に、と伝えておいてくれる？ お茶どうもありがとう」

「はい、確かにお伝えします」

あまり話したことの無い女官だが、笑顔がとても魅力的だった。時期が時期でなければ、セリのように親しくしたいところだ。

結局今日は一人で本でも読んでいるしかなさそうだ。  
紅茶を飲みながら本を読むなどラトヴィアが見ていれば叱り付けてくるところだが、今彼女は別の仕事で忙しくノーアを監視することはできない。

読みかけだった本を開き、まだ熱い紅茶を口に含む。

ほんの一瞬の違和感。

ちり、と喉が焼けるような痛み。

「  
っ！！」

言葉にならない悲鳴と共に、ノーアは椅子から倒れる。熱い紅茶は零れ、ティーカップは粉々に砕け散った。

身体が全力で飲もうとした紅茶を拒絶している。

喉が、胃が、焼けるように熱い。

胃の中にあるものすら喉から這い上がって、ノーアは我慢しきれずに吐き出した。

「ノーア様！！」

風邪で眠っているはずのセリが物音を聞いて駆けつけてくる。

意識が朦朧とするなかでどこか冷静な自分が毒だと訴えてくる。

「ノーア様！ しっかりなさってください！ ラトヴィア様！！

お医者様を呼んでください！！」

闇に埋もれていく意識の中で、あの女官の笑顔だけが張り付いて消えない。

誰も信じるなど言われているような気がした。

「……………イ……………ル」

掠れた声で助けを呼ぶ。

駆けつけて来れるはずのないあの人の名前を。

## 29：独り

ゲイル。

懐かしく、いとおいしい声に呼ばれた気がして、ゲイルは立ち止まり振り返った。

しかしそこに彼女の姿があるはずはない。

振り返った先の美しい月を見上げて、ゲイルは首を傾げる。

「ノーア？」

呼んでみたところで返事はない。

幻聴がするなんて 禁断症状もくるところまで来たかとロハムに笑われるんだらうなと頭を掻く。

妙な、胸騒ぎがした。

何もない、真っ白な場所でノーアは目覚めた。

生死の境を彷徨い、かつて辿り着いた場所とは違う。

どこまでも限りなく白く、どこが終点なのかも分からない世界。ただの一色で塗り固められたその場所は、あらゆるものを拒絶しているように思えた。

「……私、死んだのかしら。でもここは楽園じゃないわよね」

かつてニルに刺された時に再会した、ジルダスの姿もイシュヴィリアナ王の姿もない。

ただ独り。

「……ここは、どこの」

眩きは空間に跳ね返されて、響き渡る。

自分の発した声だけがこの世界の音のすべてだった。

何もない　ただそれだけなのに、無性に恐ろしかった。

白はすべてを拒絶する。

闇はすべてを包み込むことで時には安らぎすら与えてくれるというのに　真つ暗な闇なら、これほど恐ろしいとは感じなかっただろう。

ゆっくりと立ち上がり、行くあてもなく歩き始める。

足元には影も出来ない。

どれほど歩いたのか、距離も時間も分からないまま、ただ歩き続けた。そうすることでしか自分の存在を確認できない気がした。

この恐ろしい白き世界から逃げ切れば、死から逃れられる気がしたのだ。

「死にたくない」

伝えるべきことも伝えていない。自分に託された生をまっとう出かけていない。まだ、幸せになんてなっていない。

「死ねない。今はまだ死ねない！」

もしこれが定められた運命なら。

こうして命を終わらせるのが自分の最期なら。

せめてもう一度だけでいいからあの人に会いたい。

「ゲイル」

会いたい。

だからまだ死ねない。

ノーアを突き動かすのはただそれだけだった。

「ゲイル!!!」

私室を蹴破る勢いで駆けつけて来たのは案の定、幼馴染のロハムだった。

「どうした、珍しいな名前ですって」

昔からロハムには名前で呼ぶことを許している。公式な場では礼節を弁えなければいけないが、二人きりや気の置ける者同士の際は気安く呼んでいいと。それでもロハムは厭味なのか皮肉なのか、いつも国王陛下と呼んでいた。

「んなことはどうでもいい!! 聖女に毒が盛られた!!」

普段ノーアを聖女様、と呼んでいるのに敬称が消え去っているとすることは、それだけロハムに余裕がないということだろう。

端的に述べられたはずなのに、飲み込むまでにかなりの時間がかった。

聖女 イシュヴィリアナの聖女 あの、銀の髪の毛……。

血が凍るような思いというのは、これで二度目だ。一度目もノーアの命の危機だった。

呼吸が思うように出来ない。情けない事に指先が震えていた。

「反、イシュヴィリアナ派か」

「実行犯は既にラトヴィア様が捕らえたと 裏で動かしていた人間が誰かは分からない」

犯人が誰かなんて今はそんなことどうでもいいだろうともう一人の自分が頭の中で訴えてくる。

早く、早く、彼女のもとへ。

駆けつきたいのに、国王としての立場がそれを許さない。

苛立ちを押さえようと唇を噛み締める。かすかに血の味がしたので傷ができたかもしれない。

「……運べるだけの書類は追って届けます。とりあえず俺は残って仕事を片付けます」

ロハムがため息まじりにそう言う。

幻聴ではないかとゲイルがロハムをまじまじと見返すと、ゲイルの上着を押し付けながらロハムが笑う。

「どうせ、ここにいっても仕事なんて手につかないんでしょ？」

「……………悪い」

上着を受け取り、ゲイルは呟く。

「いつも、おまえに甘えてばかりだな」

残されたロハムはあの偏屈爺どもから厭味を言われ、たくさんの仕事に忙殺されるに違いない。

「慣れてますよ」

だろうな、と笑い、ゲイルは愛馬のもとへ急いだ。

早馬からの知らせとはいえ、ノアが倒れてからすでに半日が経過している。このまま誰にも止められることなく彼女のもとへ駆けつけられても、月の塔に着くのは日が暮れてからだろう。

「……………ノア」

どっか、無事で。

白く染まる世界。

光という光を反射し、闇という闇を寄せ付けない。

世界に昼と夜がある理由が痛いほど分かった。

いつも明るい世界のままでは人は生きていけないに違いない。人

を包み込む、安らぎの闇があるからこそ人は眠りにつけるのだ。  
闇が恐怖の対象なのではない。

光という存在が闇によって神聖化されただけなのだ。

光のみの世界は　これほどまでに恐ろしい。

ノアが出す音だけが、その世界に響き渡る。足音、呼吸、服がこすれ合う音。ただそれだけがすべてで、嫌でも意識は自分の中に集中した。

「ラトヴィア、セリ……ロハムさんに、アジム」

向こうで自分を待っていてくれるだろう人の名前を呟いた。

いつも月の塔を守ってくれている衛兵。名前は知らないが、よく話した。それに、ゲイルから贈られた愛馬も　そういえば、最近はずっと遠出していない。

「ゲイル」

以前に自分が生死の境を彷徨っていたとき、救い上げてくれた光。温かい、夕焼けのような朝焼けのような　光から闇に、闇から光に世界が変わる時の色。

そうだ。道しるべなんて必要ない。道案内なんて意味はない。

ノアは帰るべき場所を知っている。以前のように、楽園に捕らわれたりしない。楽園へ行くことを望んでいないのだから、楽園へ導かれなかったのも頷ける。

ただ歩けばいい。

光はいずれ見えてくるはず。

きつと　彼がこの白き地獄から救い出してくれるだろうから。

太陽の消えた国、君の額の赤い花

### 30・目覚め

ぴったりと深く眠るノーマに寄り添うゲイルに、ラトヴィアは毛布を差し出した。

温かい部屋の中とはいえ、夜ともなれば冷える。頑としてノーマの枕元から動かないこの国王の方が身体を壊してしまいそうだ。

ノーマは毒を口に含んだ直後は熱にうなされ、苦しそうにしていたが、今では呼吸も穏やかでただ眠っているだけのように見える。

「……ご報告します」

静かなラトヴィアの声がより静かな室内にやけに響く。

ゲイルは何も言わず、ただ眠るノーマの顔を見つめている。

「ノーマ様の飲まれた毒は、無味無臭で、遅効性のものでした」

「……遅効性？」

ゲイルが訝しげに問う。聞いた話によるとノーマは毒を口に入れた直後に倒れたはずだ。

「はい。奇妙な話ですけど……そもそも即効性のものでは自分が犯人だと名乗り出ているようなものですし……これは、あくまで憶測ですけど」

ラトヴィアは一瞬口を閉ざして、ちらりとノーマを見る。

「ノーマ様の、特異な体質のせいかもしれません。ノーマ様は昔から傷の治りの早くて、病もすぐに治りましたから……身体が、毒を拒否した可能性も」

そんなこと

「あり得るのか？」

「ノーマ様ならば、としか言えません。ノーマ様はここ近代には見られないほどの力の強い方ですから……正直なところ、聖月祭のあの雨もノーマ様によるものだと思います」

「……神の愛娘、か」

それは無意識に呟かれた言葉だった。

夜は静かにふけていく。

ノアの目は閉じられたまま、あの空の色をした瞳は見えない。ほとんど願掛けのように、以前彼女が倒れた時と同じように、額に咲く赤い花の痕に優しく口付けた。

『お姫様は王子様の口づけで目覚める。物語の黄金のルールだ』

ノアが腹部を刺されて意識を失った時　　ロハムにそう言われて、王子様は自分じゃないと、そう捻くれていたが　　今ならばどうなのだろう？

ノアのアジムに対する思いが恋ではないと、そう気づいてからは随分と楽になった。彼女に目覚めのキスを贈れるのはアジムではない。

けれどそれが自分だなんて思うほど凶々しくもなれなかった。

「　　ノア」

ノアの銀糸のような髪を優しく撫で、小さく囁く。

多くのものを彼女から奪った自分が、どんな顔をして彼女に請えばいいのだろうか？

側にいてもいいかと、側にいて守ってもいいかと。彼女の失ったものが取り戻せないのは分かりきっているけれど　　それに代わるものを与えてはいけないかと。

幸せを、願うことは罪だろうか。

この儚く美しい少女が、いつまでも曇りのない微笑みを絶やさず

にいられるのなら　それだけでいい。  
彼女の笑顔を守ることこそが自分に課すべき使命なのだろう。

『どこへ行くの?』

ただひたすら、何もない世界を歩み続けるノアの背後から声がした。

振り返ると、そこには自分とそう年の変わらない少女が立っていた。

「帰るの」

『どこに?』

「私が生きていた場所に」

『貴女の生きていた場所とは?』

「……………」

奇妙な問いばかりの少女を、ノアは訝しげに見つめる。俯き気味な上、長い銀の髪が目を覆っているせいで表情が窺えない。

「……………誰よりも大切な人達がいる場所よ。私は、まだ死ねないから少女が顔を上げた。

さら、と髪が流れ瞳が現れる。透き通るような青い瞳、そして

「……………聖痕?」

少女の額には赤い花のような痣があった。

そう、ノーアの額に咲く痣と瓜二つの。

『 どうしても、行くのね? 』

切ない色を秘めた少女の瞳は揺れながらノーアをじっと見つめた。  
『 これから、とても辛いことがあるとしても? 』

何を、言っているのだらう。

この少女は何者なんだらう。

どうして未来を知ってるかのようなことを言っているんだらう。  
どんなことが待ち受けているのだとしても。

「 帰らなくちゃ…… 」

そう答えた途端に、真っ白な世界が崩れた。

目の前の少女も共に崩れていく。

『 もはや私の国は消えてしまった。けれど私もあの人もあの地で眠り続ける。そして国が消えても私の力は継がれていく 』

足元が崩れ去り、暗闇の中に放り出されたノーアはそう響く声をただ聞くしかできなかった。

『 貴女はまだ死ねない。私の力を持つ者が貴女しかいないから。次の者が生まれるまでは、貴女の命は守られる 』

ノーアは一つの名前が浮かんだ。

私の国。

私の力。

イシュ・ヴィ・リアナ。

受け継がれていく聖女の力 。

「……………リアナ……………？」

それは神の末娘にして、イシユヴィリアナの母。

『貴女の未来に、光が満ちますように』

優しい優しいその囁きは、母親のぬくもりのように温かい。  
その響きが余韻を残して消え去ると、暗闇を突き破るように光が  
差し込む。あの恐怖を覚えるような白ではない。穏やかな、赤い光  
。

ああ、やっぱり。

ゆっくりと瞼を持ち上げて、視界に飛び込んでくるのは想像して  
いた通りの人物だった。

目が合うと、傍目にも分かるほどにその人は安堵していた。いつ  
もよりも顔色が悪いので倒れたはずのノアが彼の体調の心配をし  
てしまった。

「ゲイル」

微笑みながらそう名前を呟くと、微笑み返しながら優しく髪を撫  
でてくれる。

何も言わないが、表情だけで随分と心配させたことは充分理解で

きた。

オルヴィスにいるはずの彼がこうしている時点で、数日間は無事なままだったのだろう。仕事を放棄させてきてしまっただろうことには少し罪悪感を覚えた。皺寄せはすべてロハムにいつてしまったに違いない。

「心配かけて、ごめんなさい」

それと

「……………ありがとう」

いつも、あなたは私を導いてくれる。

### 31:すれ違い

あの恐ろしい真つ白な世界の出口は、温かな赤い光だった。

それが私には彼だと、自然とそう思えた。

だって、こうして目覚めた私の目に一番最初に飛び込んでくるのは彼の姿なんだもの。

「　　ノーア」

青ざめた顔がほつと安堵したように名前を呟く。

ああ、また心配かけてしまったんだな、とその声を聞いてノーアは申し訳なく思った。もつと自分が警戒していればこんなことにはならなかっただろうに。

「もう、大丈夫。私よりもゲイルの方が病人みたいよ」

ゲイルの頬に触れようと伸ばされた手はいつもよりも頼りない。

人の心配よりもまず先に。

「自分の身を少しは気遣え。無茶ばかりする」

「……今回のことは不可抗力だと思うけど。注意力散漫だったのは認めるわ」

ふう、とノーアはため息を吐き出す。

枕から頭を上げずにいるものの、顔色は良く健康そうだった。起き上がらずにいるのはゲイルがうるさそうだからだ。たぶん彼はノーアが頭を上げようものなら無理やり寝かしつけようとするだろう。「いつものことだろう?」

「ひどい。私そんなに抜けてない」

む、と少し怒って抗議する姿に再び安堵する。

瞼が開かれ、あの青い瞳が覗いた時には幻でも見ているのかと疑いたくなったが、今日の前で表情をくるくると変えているのは紛れも無くノーアだ。

生きている。

間違いなく、自分の目の前で。  
彼女は呼吸し、動いている。

「ゲイルっ!？」

伸ばされた手を強引に引き、抱き寄せるとノーアは驚いたように  
声を上げた。

いつか抱きしめた時よりも華奢に感じるのは、数日間眠り続けて  
いたせいなのだろうか。

甘い香りに酔いそうになりながら、ノーアの髪に顔を埋める。

「……………ノーア」

決して微笑みを絶やさぬように。

あらゆる悪意が彼女を傷つけないように。

どんなものに変えてでも彼女を守ろうと

誓ったのだ。他でもない自分に。

もはや無くなった『イシュヴィリアナ』の聖女。

それだけでノーアがオルヴィスの庇護を受けるのは不自然だ。

彼女がこうして危険な目に遭うのも、立場が曖昧なままだから。

不安定な場所ではしっかり立つことなんて出来ない。

「この現状を変えることが出来るのは 国王である、自分しかないのだ。」

「……………頼む、婚約してくれないか」

ノアが息を呑むのが気配で分かった。  
顔を上げ、彼女の表情を窺うのは正直怖い。

自分は彼女からあらゆるものを奪った張本人で。  
彼女が彼女でなければ、恨まれて、殺されても可笑しくない立場  
で。

それでもノアはノアだったから、すべてを理解した上で、憎  
しみも恨みも忘れようとしてくれているのだ。  
本来なら、こんな勝手なことを言える人間じゃないのに。

「……………どう、して？」

戸惑いがそのまま言葉になったかのような響きがそこにあった。  
初めて出会った時、「后になれ」と言っても動揺していなかった  
のと思うのは可笑しいだろうか。

あの時と今では、お互いの距離が近くなりすぎた。  
政治や策略を抜きにした感情の方が、大きくなりすぎた。  
「もう、二度と、危険な目に遭わないために……………これが最善なん  
だ」

そんなものは建前だった。

愛している、だから、永遠に隣にいて欲しい。  
そう曝け出すことができたらどれだけ楽だろうか。  
「曖昧な立場のままだから、こういうことが起きるんだ。王の婚約者ともなれば迂闊に手出しは出来なくなるし、警護の人間だって堂々と増やせる……こんなことは、もう二度と起きない」

私のことを、愛しているからではないの？

口からそう飛び出しそうになるのを、ノアはわずかな理性で飲み込んだ。

……何を勘違いしていたんだろう。

彼は一度も私を好きだなんて言っていないのに、いつの間にか記憶が都合の良い方へと作り変えられていた。

ゲイルも、私と同じ気持ちかもしれないなんて。

……どうして、思ったりしたんだろう。

彼はあくまで私を庇護しているに過ぎないのに。

それだって私を殺せばイシユヴィリアナの民が蜂起するからと、ただそれだけの理由からなのに。

家族も国も地位も、何もかもを失った子供が哀れだったから、優しくしてくれただけなのに。

だってほら、どう考えても彼から見れば私は幼い子供にしか見えない。

「形だけでいいんだ、生活は特に変わらない………了承してくれないか？」

愛してくれているわけじゃないのなら。

ねえ、それなら。

お願いだから抱きしめたりしないで。

私が倒れたくらいで駆けつけてきたりしないで。

思わせぶりなことをして、私を惑わさないで。

私のことなんて忘れて放っておいて。

「……私はあなたの庇護下にあるんだもの、構わないわ。何度も何度も死にそうな目に遭って、そのたびにオルヴィスから駆けつけてきたら仕事にならないもの」

形だけ。

偽り。

それでもあなたが望むなら。

そんな悲しい嘘にも我慢するから。

### 32：偽りの関係

「ノーア！」  
月の塔にやって来たゲイルは慌てて中庭にいる少女のもとに駆けつけた。

「何してる！ まだ休んでないと……！」

ノーアが毒殺されかかって倒れたのはまだ数日前のことだ。

オルヴィスから駆けつけてきたゲイルはそのまま滞在を続け、小鳥を世話する親鳥よりも甲斐甲斐しくノーアの面倒を見ていた。それはもう過保護という言葉では足りないくらいに。ここ数日間、ゲイルとラトヴィアによって部屋から出ることを許されなかった。

目が覚めてからのノーアの回復はやはり驚異的で、尋常ではなかった。

わずかな量で致死量にいたる毒を口に含みながらも生還し、目覚めてすぐに立ち上がることであった。

「心配しすぎよ、もう大丈夫なんだから。ゲイルだって、そろそろオルヴィスに戻ってもいいのよ？ 仕事が溜まってるんでしょう？」

こちらで片付けられる仕事はゲイルがイシュヴィリアナに到着した後に届けられたようだったが、国王の仕事は一日一日で着実に蓄積されていくはず。

「ロハムが上手くやっているだろうから、もうしばらくいても平気だ」

「そうやって仕事をサボっているんでしょう。もう……」

そのたびにロハムに皺寄せがいくのだから、ゲイルの右腕である彼が哀れで仕方がない。

「早く部屋の中に入れ。冷えてきた」

仕方ないわね、とノーアは呟く。

ここで下手に抵抗すれば、また数日間部屋に閉じ込められかねない。

「せっかくだもの、お茶にしましょう」

二人の婚約は、まだ正式には発表されていない。

ゲイルがまだイシュヴィリアナに居座っているからだ。

彼の帰国とともに、おそらくそれはすぐ公表されるだろう。周りの反対を押し切っても。

「……裏で糸を引いていたのは、エル・フィリオスの人だったのね」  
紅茶を飲んでいたら突然ノーアが呟く。

ノーアに紅茶を運んでくれた女官は、昔からイシュヴィリアナに住んでいた者だった。しかし母親がエル・フィリオスの出身だったらしく、そこから繋がりが見えた。

「エル・フィリオスの姫の侍女が主犯らしい。もちろん、それに姫が加担していなかったかどうかは怪しいが。反イシュヴィリアン派の影だつてちらついている」

「そんなにいるの？ 豪勢ねえ」

まるで他人事のように暢気に呟くノーアの顔色はもう心配する必要もないほどに良くなった。

「……まあ、オルヴィスに嫁ごうと思っているのなら、当然の成り行きなのかもしれないけど。そういう人からすれば、私は目障りな存在だろうし」

オルヴィスによって消された国の権力者。それなのに、オルヴィス王の目にかかけられている。守る為に婚約なんていう形をとるく

らいに。

「勝手な話だ」

「勝手かもしれないけど、国と国とのやり取りなんてそんなものでしょう?」

相変わらず、ノアは年齢のわりには大人びたことを言う。

ゲイルはため息を吐き出しながらノアの髪を優しく撫でる。

「そうだが、おまえが心配することは何もない」

「どうして? 一番危険なのは私なんだけど」

だからだ、とゲイルは続ける。

「どんなものからも守ってやる。もう二度と危険な目に遭わないように」

それは、年頃の乙女なら誰もがときめくセリフだろう。

「嬉しいけど、矛盾してるわ」

ノアがごく普通の少女と同じようにときめくはずもなく、涼しい表情で言い返す。

「あなたは私と対等になりたいって言ったんじゃないの。守り守られるのって対等じゃないと思うわ。確かに今だって私は頼ってばかりだけど……だからこそこれ以上あなたに寄りかかるわけにはいかないでしょう」

ゲイルにしてみればもっと頼ってくれても一向に構わないのだが。それは、勝手な願い事だろう。

「……婚約を公表すれば、危険は減るんでしょう? それだけで充分だわ」

そうだな、とゲイルが小さく答える。

好きでないのなら、必要以上に優しくしないで欲しい。

かつてゲイルがくれた言葉だけが、支えなのに。

対等であることで、彼と並んでいられるならそれでいい。自分の存在を利用したいならしてくれていい。

友人として側にいられるのなら。

表面上の関係は以前となんら変わらない。

ゲイルがイシュヴィリアナにいる間は毎日会ったし、ノアの調子が良くなり、ゲイルのお許しが出来れば二人で出かけることもあった。

変わったのは、

二人の間に何の名称もなかった関係が、『婚約者』という名前で結ばれたことだけ。

恋人ではないが、恋人のようで、友人のようで家族でもあったノアとゲイルがたった一言の言葉で繋がった。

本当なら甘い甘い言葉のはずなのに、ノアにはそれがとても冷たく切ない響きを持つように感じられた。

「じゃあ、また手紙を書く。くれぐれも注意してくれよ」

「そんなに何度も言わなくて分かるわよ、もう……早く帰ってあげないと、ロハムさんが過労で倒れちゃうんじゃないの？」

簡単に冗談では片付けられないノアのセリフに、二人は顔を見合わせて笑う。

「急がないとな。オルヴィスでも看病させられるのはごめん」

「頼んでないのに。大体私はすぐに起きたのに、ゲイルが寝台に縛り付けていたんじゃないの！」

抗議を始めたノアの頭をぐしゃぐしゃと少し乱暴に撫でて、ゲイルは馬に跨った。

「じゃあ、またな」  
「気をつけて」

遠く遠ざかっていくゲイルの姿をただじっと見つめ続ける。

二人の婚約は、ゲイルがオルヴィスに戻った一週間後に発表された。

同時にエル・フィリオスの姫君、トリシヤは祖国に帰国。彼女の侍女でありノーア毒殺未遂に関わったとされる者はすべてオルヴィス側の手に渡った。彼女の帰国も、言葉を変えれば追い出されただけだ。

二人の関係が、明確に変わった瞬間だった。

### 33：甘い紅茶

誰の目に見ても分かるほどに浮き立つセリを眺めて、ノアは苦笑する。

部屋の掃除もいつも以上にはりきり、いつも以上に空回り気味だ。「……セリ、あんまり張り切らないでね」

張り切る分だけ、物が壊れそうな気がするのはおそらくノアだけではないだろう。

「だって！ とつても嬉しいんです！ ずっと陛下とノア様が上手くいけばと影ながらお祈りしていたんですもの！」

その喜びこそが一番の空回りだと本人はまるで気づいていない。

「ノア様が王妃様になられるなんて……！ 夢みたいです。本当に」

「そんな……」

本当に王妃になるなんて、今はまだ分からないわよ？

そう口に出しそうになるのを、ノアは理性で飲み込んだ。

ノアの部屋の本棚を嬉しそうに整理しているセリにその言葉をぶつければ大事故になりそうだ。

「セリ、いつまでもノア様の邪魔をしないの。他にも仕事を言いつけたはずでしょう」

呆れたようにラトヴィアが扉の向こうから顔を出し、セリは自分が抱えていた分の本を慌てて片付けた。

「す、すみませんっ！ 今行きます！」

真面目なのはいいが、少し抜けているところがセリの欠点とも言うべきか、ラトヴィアはため息を吐き出し、ノアに午後の紅茶を差し出す。

「騒がしいでしょう、ノア様」

嫌なら追い出していいんですよ、というラトヴィアの言葉は部屋

から駆け出していつてセリには聞こえていないだろう。

「賑やかでいいわ」

一人いるだけで十人以上の賑わいがあるのも問題だが。

読みかけの本を傍らのテーブルに置き、紅茶に手を伸ばす。

いつも砂糖も入れずに飲むノアの為の紅茶は、ストレートであることがほとんどだ。セリなどは間違つて砂糖を入れて出すことも多いが、そういう場合ノアは何も言わずに飲み干してくれる

時折、ラトヴィアは甘いミルクティーを淹れてくれる。

それは決まって、ノアが落ち込んでいる時だ。

「……………ラトヴィア、私は平気よ？」

甘いミルクティーがなくても。

「ノア様が言う平気は信用できませんから。いつもいつも溜め込みがちです」

長年の付き合いである彼女を誤魔化そうなんて気はもともとないのだが、そこまで信用のない自分に、ノアは苦笑する。

「本当に、よろしかったんですか？」

ラトヴィアの声は静かに、そして重く部屋に響く。

婚約のことだと、聞かなくても分かった。

高い高い月の塔の最上階にあるノアの部屋に足を運ぶのは

否、運ぶことができるのはラトヴィアとセリだけだ。それ以外の女官は立ち入りを禁じられた。ノアが暗殺されかけたあの時から

だからなのだろうか、以前よりも日々は余計に静寂に包まれ、それはまるでアジムがいて、イシュヴィリアナがあつたあの頃のように平穏だった。

「ラトヴィア、私、後悔はしてないわ」

例えばこのままの流れでゲイルと結婚することになっても、そうならなくてもだ。

「しかしノア様、婚約されれば次は結婚をと、結婚すれば次は世継ぎをと、ノア様への負担は増える一方です」

「それはアジムと結婚しても同じことだったでしょう。それなりの

覚悟は私にだってあったわ。　　ねえ、ラトヴィア」

凜としたノアの声は、それほど大きくなくても皆を黙らせるだけの威力があった。この場のたった一人のラトヴィアを黙らせるには充分過ぎる。

「……例えば明日には永遠の別れが待っているとして、後悔しない恋なんてあると思う?」

それは、一体。

「……どういう意味ですか」

永遠の別れなんて、そんな、縁起でもない。

「例え話よ」

そう言いながら微笑むノアの顔がいつも以上に儂く見えるのは、錯覚なのだろうか。

「私、後悔だけはしたくないわ。これから先、どんな道を進もうとも私の前にあるのは平穏な、静かな道ばかりじゃない。きっといろんなことに巻き込まれるし、誰かを巻き込むでしょう……イシユヴィリアナが滅んで、今まで示されていた未来も消えたわ。私の前にあるのはゲイルが好きっていう確かな思いだけなの」

ラトヴィアはすとん、と力が抜けたように椅子に座る。

ラトヴィアの前でゲイルへの思いを確かに口にしたのはこれが初めてだ。

「ゲイルが私のことをどう思っているか、私はゲイルが好きだから私は、こうして繋がりを持っていられるだけでも十分に幸せだから……辛い未来が待っているとしても、たぶん大丈夫」

ノアの脳裏に蘇るのは、真っ白な死の世界。

そこで出会った『リアナ』

彼女の言葉は、憶測ではないのだろう、おそらく必ず何かが起こ

る。

「私は遣されたイシュヴィリアナの者として、最期まで幸せでなければいけない。最期の瞬間には微笑んで死ねなければいけない。後悔なんてしてたら、それは望めないでしょう?」

微笑むノーアの顔に、曇りはなかった。

澄み切った秋の青空のように清純で、春の花のように美しい。

少し冷めたミルクティーを一口飲んで、美味しいとノーアは呟く。ラトヴィアはどういう表情をしたらいいのか分からずにただノーアを見つめていた。

いつの間に、こんなに成長したのだろう。

まだまだ子供だと思っていたのに。

「……恋がしてみたいと、ずっと思っていたわ。アジムのように、一途に、誰かを好きになりたかった。少し自惚れてみたり、落ち込んでみたり、浮かれたり、そういうことがいちいち楽しいものなのね」

彼が私を愛してくれているのだろうなんて、そう勝手に思って、違うと気づけば落ち込んで、彼からの手紙を喜んで。

「殿下は、最初から両思いでしたよ」

「そうね、ズルイけど、その分損してるわ」

「そうですね、恋の醍醐味は片思いしている間ですから、くすくすとノーアが笑う。

ああこの人も難儀な相手に恋をしてしまったんだな　ラトヴィアは困ったように微笑んでノーアを見つめる。

「今、アジムに会いたくなって思うの。私の片思いの相手を知ったらアジムはどうするかしら?」

ノーアを実の妹のように可愛がっていたアジムの姿を思い出し、ラトヴィアは笑う。

「思い切り反対するか、協力するかのどちらかでしょうね」

「やっぱりそう思う?　たぶん最初凄く反対して、それでも私が諦めなかったら味方になってくれるんだろうとか考えてたの」

おそらくノーアの見解で間違いないだろう。

高く聳え立つ月の塔の最上階からは遠くまで見通せる。

しかしその先にある砂の海までは見えない。

「……どこに、いらっしやるんでしょね」

ラトヴィアは遠く見えない砂漠を想像しながらぼつりと呟く。

イシュヴィリアナの王子であるアジムが逃亡し、砂漠の中にある不可侵の都　オアシスへ向かおうとしていることを知っているのはノーアとラトヴィアの二人だけだ。

本来イシュヴィリアナはオアシスへの最短のルートを持っていたので、天候さえ良ければ約二日で辿り着けるはずだ。しかしアジムはその最短の道をあえて避けてかなり遠回りしているはずだ。オルヴィスの目を避けて。

「さあ、どうかしら。でも目的地ははっきりしてるもの」

そう冷静に答えるノーアも、内心では心配しているに違いない。

この世に残されたたった一人の家族なのだ、ノーアにとっては。

「ラトヴィア、おかわりはあるかしら？」

空になったカップを持ち上げて、ノーアが問う。

「少々お待ちください、すぐに淹れてきます」

すつと立ち上がり、ラトヴィアは扉を開ける。すぐその廊下の先には長い長い階段が待っている。

「砂糖を多めにしてね」

「かしこまりました」

ほんの些細な不安でも、胸をかすめたときに、

甘い甘い紅茶は、心をほんの少しだけ和ませてくれる。

太陽の消えた国、君の額の赤い花

### 34：到着

懐かしい、砂の香り。

身体を覆うマントを剥いでしまえばその一粒一粒が痛いほどに身体を打ち、目や鼻に侵入してくるのだ。

見渡す限り、枯れた砂の大地。

風が砂を吹き上げ、動かし、大地はまるで波のように模様を作り出す。晴れた青い空が眩しいほどに明るく見えた。

もう少し歩けば水と緑のオアシス。

半年以上をかけて、ようやく辿り着いた。

「……あともう少しだ、行こうガジェス」

後ろからずっと着いてくる、王子であった頃からの部下は何も言わず歩を進めた。

彼の無口な性格が、今は少し嬉しい。

ようやく会える。

十年もこの時を待った。

いとおいしいオアシスの姫君。

大陸の六割は砂漠というこの世界で、水が何よりも価値のあるものなのは至極当然だった。

どの国も水不足に喘ぐ中、砂漠の中の最大のオアシスは地上の楽園とも、神に愛される土地とも呼ばれている。

そこは千年以上前から存在が確認されていた。

土地の性質上、各国が喉から手が出るほど欲しがるのは当たり前だったが、誰も手を出さなかった、否、出せなくなった。

かつて何度も砂漠を渡り、そのオアシスを侵略しようとした者達は皆、無事に帰っては来なかった。オアシスを目指す途中に砂嵐に

遭ったり、広大な砂漠で迷い帰り道すら分からなくなったりしたのがおおよその原因で　結果としてオアシスは常に平和だった。いつしかそこは手を出してはならぬ　手を出せば滅ぶ、禁断の土地になった。

今もそこは平和なまま、オアシスの民が不自由なく暮らしている。

アジムがかつて訪れたのは、もう十年も前のことだ。

イシュヴェリアナは古くからオアシスとの交流が盛んだった。

王家の人間が訪れることも珍しくなく、アジムもその中の一人に過ぎない。

そして、これから行く自分は、『イシュヴェリアナ』とは名乗れない。

その名はもう捨ててきたものだ。もう自分にその名前を名乗る資格はない。その資格を、泥に投げ捨てて自分は選んだのだから。

『……王族だって、人間なのよ。自分の生きたいように生きて、いいじゃない』

逃亡当夜のノーアの言葉を思い出す。

その言葉にどれだけ救われたか、言った本人は全く気づいていないだろう。

自分の安否を気遣ってくれているんだろうか。それならば　どうにかして、無事オアシスに辿り着いたと知らせたかった。

「ガジエス」

何ですか、と背後から声がした。

もう部下ではないのだから並んで歩けと言っても聞かないので、アジムも仕方なくそのまま続けた。

「オアシスに着いたらノーアに手紙を書いてくれ、おまえの名前で。」

無事に着いたと……直接はまずいかもしれないな……ラトヴィアはまだ月の塔にいるだろうか」

「ラトヴィア殿なら、おそろく」

ガジエスの端的な返事がかえって安心感を増させた。

「そうだな、ではラトヴィア宛てに。彼女なら分かってくれるだろう」

ゲイルとの手紙のやり取りも、その中で彼がノアを気遣うのも、ロハムが手紙を届けてくれるのも 何も、以前とは変わらない。

警備はノアが気にならない程度に増やされ、ノアの身の回りの世話はラトヴィアとセリにのみ任された。もともとノア自身が自分から動くことを苦に感じないので、それで支障はなかった。

そうして、ノアが暗殺されかかってから数ヶ月が経った。

穏やかで、平和で、静かで それはもう随分と昔に感じる、イシュヴィリアナがあつた頃のように。

それが嵐の前の静けさなのだとしても。

ノアには懐かしく、いとおいしい日々だった。

「ノア様!!」

慌ててラトヴィアが手紙を持ってきた時は、単純にゲイルからの手紙だろうと思った。

この塔に届けられる手紙なんてそれくらいしかなかったから。いつもロハムは直接ノアに手渡すのに、変だな、と思うくらいで。

「どつしたの、そんなに慌てて」

「これを、読んでください」

そう言っただけでラトヴィアが手渡してきたのはまだ封の切られていない、ラトヴィア宛ての手紙だった。

「何言ってるの、これラトヴィアへの手紙じゃない……」

「そう言いながら手紙を返し、差出人を確認してノーアは息を呑んだ。」

ガジェス・ルイザス

それは、アジムの側近で、彼と共に逃亡しているはずの人の名前だ。

「……………これ」

「殿下が手紙を出すわけにはいきませんから、ガジェス様の名前を使っただけでしょう。私宛なのと同じ理由ですよ」

ラトヴィアがすべて言い切る前に、ノーアは手紙の封を切った。

中からはごく普通の便箋が出てきた。封筒もそれほど質のいいものじゃない。

「……………なんて？」

書いてありますが、とラトヴィアが隣から問いかけてくる。手紙を覗き込まないあたりは彼女らしかったが、本心ではすぐにでも手紙の内容を知りたいのだろう。

「……………無事、主と共に目的地まで辿り着きました。ご安心ください……………ですって。やだ、もう、本当にガジェスらしいわ。もう少し何か書いてくれてもいいのに」

そう呟くノーアの瞳から涙が零れる。

「余計なことを書いたなら、不味いってことしか頭になかったんでしようね。本当に頑固なままで」

そういうラトヴィアの瞳も潤んでいた。

「良かった……………これでもうアジムは無事なのね、もう大丈夫よね」  
オアシスは不可侵の土地。それが各国での暗黙の了解だ。

たとえオルヴィスであろうともそう簡単にオアシスへは踏み込め

ない。

「ええ、大丈夫です。もう……本当に」

泣き続けるノアをラトヴィアは優しく抱きしめて、子供の頃のように慰めてくれた。

良かった、本当に良かった。

これでもうアジムに危険はない。

これでアジムは大切な人と幸せに暮らせる。

握り締めた便箋がくしゃくしゃになると、一枚だけだと思った後ろから二枚目が姿を現した。

それは一枚目よりも薄い紙に書かれていた。気づかれにくいようにだろう。

そこに書かれた文字は、ガジエスのものではない。

ノアには分かった。

「……アジム」

その端正な文字は彼のものに違いなかった。

飾る言葉はそれほどない。

書かれた文はガジエスのものよりも少ないかも知れない。

『君の幸せを月に祈り、太陽に願う』

ああ、こんな状況でも彼は。

私の幸せを願ってくれているのか。

「本当に……お人よしなんだから」

人のことは言えませんよ、というラトヴィアの声が、いつも以上に温かく聞こえた。

### 35：暗雲

それはいつもと違う朝だった。

聞き飽きてしまうほどに繰り返された重鎮達の後宮復活の声を聞き流し続けていたので、最初はそれすら聞き流してしまった。

「陛下、ゆゆしき事態ですぞ」

自分の耳を疑った。

ああ、これが夢であるならいいのに。

夜、ノアが眠る前のセリの仕事はノアの髪を梳くことだ。

長く真っ直ぐなノアの髪は絡まることなくさらさらと流れる。

櫛を通すこちらが気持ちよくなるほどに素晴らしい髪だ。

「ねえ、セリ」

「なんですか？」

櫛を通す手を止めずにセリが問う。

「オルヴィスはどんなところ？」

セリの手が止まる。

「オルヴィスですか？」

「ええ、そう。オルヴィスのことを教えて欲しくて」

座るノアの後ろに立つセリからノアの表情は見えない。今までオルヴィスのことを知りたがることなんてなかったのに、とセリは首を傾げる。セリに聞くより、手紙を届けにくる口ハムや、手紙

でゲイルに聞くことのほうが名案のようにセリは思った。上手く説明できる自信がない。

「……え、ええと。イシュヴィリアナに比べると田舎です。どこも山が多くて、海に行くのも一苦労なんですよ。おかげで他の国との交流もあまり盛んじゃなくて……」

「難しいことはないの。セリはどう思ってるか教えて」

頑張って説明しようとしたセリの様子を見なくても察したのか、ノアが微笑みながら言う。

「……好き、ですよ。土地はあんまり良くないし、豊かな国ではないと思うけど、良い国です」

「イシュヴィリアナには聖女を信仰するけど、オルヴィスには宗教はあるの？」

「あるといえばありますけど、基本的に山にも海にも空にも、足元の土にも神様が宿ると信じられてますから、特定の神様っていうのはあまり信仰されないんです。子供が生まれるとまずその子の守護神を決めます」

不思議な考えだな、とノアは思った。イシュヴィリアナにはそんな考えは無い。不思議だと思つと同時に新鮮だった。

「守護神って？」

「生まれた子供を守ってもらえるように、神様に祈るんです。水の神様とか、土の神様とか、そういうのに。よくあるのは山の神様です。オルヴィスは山が多いって言いましたよね？」

セリの問いにノアは頷く。

「セリの神様は？」

「私は、花の神様です。女の子にはよくあるんです。花のように綺麗になるように、って」

あんまり効果はなかったみたいですけどね、とセリが苦笑する。

大輪の美しさはないかもしれないが、野に咲く小さな花のような可憐ならセリにあると思う。セリの両親はそのような意味で花に加護を望んだのではないだろうか。

「……………ゲイルは、何なのかしら」

次の手紙に書いてみようかとノーアが考えていると、セリがさらにと答えた。

「光の神様です。王家の方の守護神は発表されるので」

「ひかり……………」

ぴったりだな、とノーアは微笑む。

「でも、どうしたんです？ 急にオルヴィスのことが知りたいなんて」

セリが櫛を箱にしまい、ノーアに問いかける。

ノーアは答えようがどうか一瞬迷い、苦笑して答える。

「いつか、住むことになるかもしれないところだから、知っておこうと思って」

偽りとはいえ婚約した以上、いつまでもこうして月の塔で暮らし続けることは無理だろう。

セリにはノーアの表情が照れ隠しかなにかに感じたのだろう、嬉しそうに笑っていつでも聞いてください、と付け加える。

ぱたん、と扉が静かに閉められ、広い部屋にノーアは一人きりになる。

明かりを消し、窓際まで歩み寄る。

窓の向こうには冴え冴えと輝く満月。

その光はいつもより強く、ノーアの足元に影さえ作り出す。

時々、こうして月光浴をする。

太陽の光とは違い冷たいとさえ感じそうなその光がノーアには心地よかった。光る満月から目が離せない。

満月は雲に飲み込まれ、影は暗闇に吸い込まれる。

ノーアはしばらくそのまま月が出るのを待っていたが、満月は雲に包み込まれたまま、姿を表すことはなかった。

「どうしたの、ラトヴィア。顔色が良くないけど」

朝目覚めたノーアがラトヴィアに問いかける。

昨日ラトヴィアは一日休日で、城下町に住む姉の家に行っていたはずだ。月の塔に帰ってくるのは昼過ぎだと思っていた。

「もつとゆっくりしていて良かったのに……ラトヴィア？」

具合が悪いのだろうかとノーアがラトヴィアの顔を見つめる。

ラトヴィアは小さくノーア様、と呟いた。力の無い声だった。

「私が、心配しすぎなんでしょうか。これがただの杞憂なら良いのだけど……」

手のひらで顔を覆い、ラトヴィアは俯く。

「どうしたのラトヴィア。何があったの？」

「何も、ありません。今はまだ」

ただの噂なんです。

そうラトヴィアが呟く。

「商人から、広まったそうなんです。殿下がオアシスにいます」

それは、ただの噂にすぎない。

それが真実かどうかを知るのは、ノーアとラトヴィアだけなのだから。

「イシュヴィリアナの王子がオアシスにいます！！ 本物であればそれは見逃すわけにはいきません！」  
「しかし王子は確かに処刑された いや、イシュヴィリアナほどの国ならば影武者がいてもおかしくは」  
「どちらでもいい！！ 不穏なものは殺してしまえば ……！！」

ああ、影武者は確かに存在した。  
俺たちが王子だと処刑したのはその影武者だ。

ゲイルは騒ぐ重鎮達を眺めながらどこか冷静にそんなことを思っていた。

一同の視線が、自分集まる。

「陛下、ご決断を ……」

### 36：過去の残影

まだ朝日も昇らない、夜と朝の狭間にノアは目を覚ました。  
塔の外がなにやら騒がしかった。

「……………？ こんな時間に何かあったのかしら」

外はまだ暗く、夜の闇が世界を染めている。

寝静まった塔の中に明かりは少なく、ノアはランプを片手に持って階下へと下りた。

塔の最上階にあるノアの部屋から一番下までは、かなりある。幼い頃から月の塔で育ったノアでなければ引き返したくなるほどに薄暗く、不気味な闇がランプの光によって切り裂かれた。

「……………ます、どうか……………ください」

塔の中で眠っているであろうノアや女官達が起きないようにと気遣ってだろう、小さな声が外から聞こえた。おそらく警護にあっている者だろう。

対応する口調がやけに丁寧な点からいっても悪人ではなさそうだ。このまま警護の人間に任せるか、自分が出て行くか考えた。なんと言っても寝巻きに上着を肩にかけてきただけの、気安く人前に出れる格好ではない。

「……………で待つから、気にしないでくれ」

部屋に戻ろうかと思ったノアの耳に、やって来た人物らしき声が聞こえる。

壁の向こう。扉の外。

それでも、ノアには分かった。

振り返り、扉を開ける。

驚いてこちらを見てくるのは警護の人間が二人と、

「ゲイル」

暗闇の中でも明るく赤い髪の青年がそこにいた。本来なら、いるはずのない人が。

「悪い、起こしたか」

ゲイルはノーアを見つめて苦笑する。

そんなこと　　どうでもいい。むしろ目が覚めた自分に感謝したいくらいだ。

「どうしてここに……いえ、そんなことより中に」

風邪を引くわ、とノーアがゲイルの袖を引く。警護にあたっている者よりも明らかに軽装だ。夜はまだかなり冷える。

悪い、ともう一度ゲイルは呟いて月の塔に入った。

女官を起こすわけにもいかず、ノーアは少し席をたって紅茶を淹れた。

寒い外にいたゲイルのために熱い紅茶を出すと、ノーアはゲイルの向かいに腰を下ろした。

「一体どうしたっていうの。急に何の前触れもなく……」

「迷惑だったか」

「迷惑とかいう問題じゃなくて……イシュヴィリアナに来ていることを他の人は知ってるの？　夜が明けたらオルヴィスでは大混乱なんて状態にはならないでしょうね？」

さあな、とゲイルは誤魔化した。

タイミング的に口ハムがオルヴィスにいるはずだから、最悪でも彼だけは知っているだろう。

ノーアはため息を零し、紅茶を飲む。

会えて嬉しい　そう思ってしまうのは恋心の愚かさ故だろうか。こうしてノーアがゲイルに会えたおかげで、困る人はたくさんいるのだから。ロハムを筆頭として。

しばらくどちらも何も言わない、不思議な沈黙が続いた。それは決して嫌なものではなく　ただ静かに夜明を待つ、穏やかなもので。

ことりと、紅茶を置く音がやけに響く。

「　　会いたかったんだ」

穏やかな沈黙を破ったのはゲイルだった。

誰に、とも言わないセリフに、ノーアは何も言えずにゲイルを見つめた。その視線に気づいたゲイルが苦笑する。

「ただ、なんとなく、ノーアに会いたくなっただ。無性に」

淡々と語られる言葉の奥底には静かな情熱があるようで　ノーアは自分の体温が急上昇していくのを実感した。間違いなく、今顔は赤い。

私だつて会いたかった。手紙なんかじゃ足りなかった。会って、声が聞きたかった。二人きりでどこかに行きたかった。約束の砂の海でも良い。

そんな言葉を吐露できたらどれだけ楽か　それでもノーアは緊張と高揚で声が出せなかった。

ゲイルはどこか悲しげな表情を浮かべたまま、ノーアを見つめる。いつもの彼とは違った様子に、ノーアは首を傾げた。

もしかしてこれは夢だろうか？　そんなことすら考えてしまっうほどに、今日のゲイルは彼らしくない。

その原因が、静かに、重く、ゲイルの口から呟かれた。

「王子の噂が、重臣にも知られた」

「  
息を飲む。」

端的な言葉でも、内容は充分過ぎるほどに伝わった。

「……ただの、噂でしょう？」

駄目だ、声が震えた。

こんな声で言っても、何の説得力もない。

「王子の行き先は、オアシスだったんだな。神に愛される土地  
あそこなら俺も容易に手出しできないからか」

イシュヴィリアナからの道はすべて警戒していたんだけどな、と  
ゲイルは苦笑する。アジムは最短の道であるその道を放棄して、あ  
えて遠回りした。

「……そんな理由じゃないわ。あそこには、アジムの初恋の人がい  
るのよ。今でも愛してる、オアシスの姫が」

もう隠しても意味は無い。ゲイルは既にアジムが生きていること  
は知っている。そこでオアシスにアジムに似た人がいるなんて噂が  
流れているのだ、それが他人の空似だなんて思えるはずが無い。

「……どうなるの。まさかオアシスを攻めたりしないでしょう？」

不安がそのまま形になったかのような、そんな声だった。

ゲイルはもはやノーアを見つめることができずに、俯いて頭を抱  
えた。

「他国がオアシスを攻めた最後の記録はもう三百年も前だ。暗黙の  
了解として攻めてはならずといっても、恐怖が人の記憶から消えて  
いる今ではそれほどの効力は無い。言っただろう、不安の芽を  
無視はできない。あの頭の固い爺達がまさにそれを素でいく」

「そ……」

そんな、と抗議しようとした声はノーア自身が飲み込んだ。

ゲイルの肩がかすかに震えているように見えるのは、錯覚だろう  
か。

「もともと陛下は戦うことが嫌いなんで」

ああ、どうしてこういうタイミングでこんな言葉を思い出し

てしまうんだろう。

この人は、また戦いを始めようとしているのに。それでこの人が傷ついているだなんて分かってしまうようなこと、思い出したくは無かった。

もう一度、憎めるなら憎みたいのだ。この人はアジムから幸せを奪おうとしているのだから。

無理だと、分かっているけど。

「国王の力なんて、高が知れてる。貴族が束になってしまえば、もう止めることなんて」

自嘲的に呟かれる言葉に、ノアの胸が痛くなる。

どうしてそんなに辛い思いをするの。

いいじゃない、あなたは王である前に人なんだから。

たぶん、ゲイルはここでノアに罵って欲しかったんだろう。また戦争をする愚か者だと、また人から大切なものを奪うのかと。そうして自分が傷つくことで救われたいんだろう。

だから、ノアに会いに来たのだ。

す、とノアは立ち上がり、ゲイルの側まで歩み寄る。床に膝をつき、ゲイルの顔を覗きこむが膝と頭を抱える彼の表情は見えない。

私にあなたを傷つけさせないでよ。

私にそんな救いを求めないで。

やり方を間違ってるわ。だって、そんな

そんな弱々しい姿を見せておいて、慰められずにいられないじゃない。

「……国の為に自分の感情を押し込んでまで非情にならなければならぬのなら、王というのは可哀想な生き物ね」

太陽の消えた国、君の額の赤い花

あなたの求める救いではないけれど。

私の言葉が少しでもあなたの心を軽くしますように。

### 37：非情な王

ああ、どうして本当に君は。

そうやって俺を許してしまっただ。

憎んで欲しかったのに。

最低な男だと罵って欲しかったのに。

ああ、どうして。

ゆっくりと顔を上げると同時に、抱きしめてくれていたノアは離れていく。

「ゲイル」

そう名前を呼ぶノアの表情は痛々しかった。たぶん、彼女が見ている自分の顔はもっとひどいことになっているんだろうな、とゲイルは苦笑する。

いとおしさにノアの細い腕を引き寄せ、華奢な身体をきつく抱きしめる。

彼女が抱きしめてくれた時とは比べ物にもならないくらいに、強く。

「……ノア」

最初は驚いて硬くなっていたノアの身体から、徐々に緊張がほぐれていくのが分かった。それだけの信頼があるということに嫌でも気づかされて、苦しくなる。

さらさらと流れる髪を手で梳く。肩に顔を預け、髪に顔を埋める。

体温も、心音も、香りも、感触もすべて忘れないように。  
しっかりと身体に覚えこませる。

「ゲイル……？」

ノーアの優しい声に泣きたくすらなかった。

「……………」

耳元で、そっと囁く。

「え？」

驚いたような、困惑したような、その奥底に喜びを隠したような、  
そんな一片のノーアの言葉。

柔らかい頬に手を伸ばし、青く澄んだ瞳をじっと見つめた。

「ゲイル？ 今」

なんて言ったの。

聞こえていたはずの言葉を聞き返そうとするノーアの唇を、ゲイルは塞いだ。

ノーアの瞳が驚きで見開かれる。

触れたのは、ほんの一瞬だった。触れ合うだけの優しい口づけ。

「ゲ、ゲイル」

顔を真っ赤にしてさらに質問を重ねようとするノーアの口を、手で制した。

瞳だけで疑問を投げかけてくるノーアの顔を見つめることが出来ず、俯いたままゲイルはぽつりと呟く。

「たぶん、出会わなければ良かった」

彼女が聖女なんて存在ではなくて、ただの庶民だったら 貴族の娘でも、なんでもいい。あの夜、出会わなければ。

「どこかで、お互いに道を間違えたのかもしれない。出会う運命じやなかった。ノーアは王子と共に逃げていたかもしれないし、俺は聖女なんてものに関心も持たずに放置していたかもしれない。あるいは、処刑していたかも」

ノアは何も言わずに、ただゲイルを見つめた。  
キスの余韻すらなくなってしまうような、悲しい言葉をただ全て受け止める。

「ノアの言うとおりだ、王とは可哀想な生き物だよ。何よりも国を優先しなければならぬ。このままではイシュヴィリアナの残党はオアシスに集まり、王子を旗印に再び戦争を起こすだろう。王子にその気が無くとも。俺は、オルヴィスを守らなければいけない。個人の優先順位は違っていたとしてもだ。」

ゲイルは辛そうに言葉を吐き出していた。

切なげに、悲しげに、苦しげに吐かれるその言葉に攻撃性はなかった。ただ、じわじわとノアの心に毒を染み込ませていく。

伸ばされたゲイルの手が、ノアの手を握り締める。

彼女を傷つけない、悲しませたくない。どんなこの世の不幸からも遠ざけて。誰よりも幸せになれるように……幸せにしたかった、この手で。

でもそれは無理だった。

毒はオルヴィス。ひいてはゲイル自身だった。

「俺達は、結局敵同士なんだな」

「そうね」

そこでやっとノアが声を出した。

悲しいほどに優しく、切ないほどに静かな声だった。

朝日が昇る。

世界が赤く染め上げられていく。

そんな様子を、ただ一人でノーアは呆然と見つめる。

『 ……愛してるよ、ノーア 』

耳元で囁かれた言葉は、あるいは幻聴だったのかもしれない。

いや、今までいた彼の存在そのものが、幻だったのかも 幻であつてほしかった。

涙は不思議と、流れなかった。

「お帰りなさいませ。国王陛下」

オルヴィスに戻つてすぐに不機嫌そうなロハムに睨まれる。

いつもの光景に、今までの短い旅が夢だったのかもしれないなんて思つてしまう。それを打ち消すのは机の上に溜まつた数日分の書

類だった。

「そう怒るな。もうこんなことはない」

「いえまあ仕事を残さないんだっいたらイシュヴィリアナに行くくらい許してもいいんですけどね。聖女様のところでしょう？」

ああ、と短く答える。

「だが、もう行かない」

その端的な言葉に、ロハムは一度口を開きかけ 結局何も言わなかった。

もう、会えない。

会わせる顔が無い。

彼女の唯一残された家族を今から殺そうとしているのだ。そうして彼女は今以上に危うい立場になるだろう。

彼女の幸せの為に 自分は邪魔な存在だ。

「……ご命令は？ 国王陛下」

タイミングを見計らったロハムの問い。この男のこういつ時間の読み方は嫌いじゃない。

「 兵を集める。オアシスへ進軍する」

38：心に火が灯る

はじめての口づけは甘さなんてものはほど遠く、苦しさも切なさだけが胸に残る。

そっと自分の指先で唇に触れる。

ぬくもりなんてものはもう残ってなかった。

「ノーア様？ 今日随分とお早いですね」

明るいセリの声もノーアの耳には届かない。

首を傾げて近づいてくるセリにも気づかず、ノーアはただ空を見つめていた。

「……………ノーア様……………？」

気遣わしげにセリが問いかける。

ようやくノーアはそれに気づいて、顔を上げる。

「あ、ああごめんなさい。セリ。おはよう」

「おはよう、ございます……………何か、あつたんですか？」

あつたわ。とっても。突然ゲイルが来たのよ。キスしたと思ったからお別れみたいなことを言うの。ひどいでしょ？

頭の中で浮かんだ言葉をすべて飲み込んだ。

「何もなかったわ。ちよつとぼんやりとしただけよ」

ほんのちよつと、夢を見ただけよ。

慌しく動き回る臣下達をぼんやりと眺めながらゲイルは椅子に深く座り込んだ。

「……良かったんですか、それで」

隣に立つロハムが小さく問いかける。

これがゲイルの本心ではないことくらい、長い付き合いのロハムには分かる。

「俺は、王だから。情に流されて国を危うくするわけにはいかない。ただ一人の言葉を根拠に決断するなんて許されない。不安の芽は摘み取る　たとえ、誰に恨まれても」

そのただ一人の言葉が、曖昧な噂より真実味があるとしても。

このあやふやな状況では天秤は不公平に傾く。

そんな辛そうな顔をするなら、違う選択もあっただろうに。

ロハムはその言葉を苦い表情で飲み込んで、そうか、と答える。

「あと数日で準備は整います。……陛下もお休みください」

部屋から出ようと扉まで行き、ドアノブに手をかけて振り返る。

「最後に、イシュヴィリアナへ行きます。何か渡すものは？」

誰に、とは言わない。

あるとは思っていないが、あつて欲しかった。

「……………何も」

そうですか、と答える声すら寂しく響いた。

「陛下がいらっしやっただけですけど、何かありませんでしたか？  
ノーア様」

部屋に籠もるノーアにラトヴィアは問いかける。ここ数日何度この質問を繰り返したのだろう。

「何も、ないわよ？ またなのラトヴィア」

苦笑して答えるノーマもここ数日変わりない。

部屋から極力出ずに、本ばかりを読んでいる。ゲイルが月の塔にやって来たということすら警護の兵に聞くまで知らなかった。

その日からノーマの様子がおかしいのは、ラトヴィアだけでなくセリでも分かる。

「ノーマ様」

今日こそは問い詰めようとラトヴィアが口を開いた途端に、控えめに叩かれるノックの音が聞こえる。

「失礼します。その、ロハム様がいらっしやいました」

ぴくりと、ノーマの肩が揺れる。

「まあ、ノーマ様、それでは」

「すぐ行きます、ラトヴィア紅茶を用意してくれる？」

す、とすぐに立ち上がり素早く部屋から出る。

「ロハムさん」

急いで階下から下りたノーマは少し息を切らしながらロハムに駆け寄る。

「お久しぶりです」

いつものような柔らかな微笑みを浮かべてロハムは言う。

そしていつもならそう言いながら差し出される手紙は、なかった。

明らかな落胆の表情を浮かべたノーマに、ロハムは苦笑する。

「……いつもの定期便は、ありませんよ」

「そうですね」

あるわけない、そう思ったのにどうしてこんなに急いで

「陛下が、オアシスへの進軍を決定されました」

「え」

言葉を失う。

それで思い出されるのは、痛々しいゲイルの顔と、苦しい言葉。  
『俺たちは、結局敵同士なんだな』

そうね、と答えるしかなかった。

だってノーアはイシュヴィリアナの聖女で、ゲイルはオルヴィスの国王だから。それはたとえ片方が過去のもでも変えられることのないことだから。

「オアシスに仕掛けて、無事でいられると思う？」

オアシスは不可侵の神の土地。侵したものは決して無事に帰れないと、そう各国から恐れられてきた。

「ただ今までの奴らが運が悪かった、または迷信かもしれないから。それにすぐに攻めたりはしませんよ。オアシスの近くで様子を見ます」

「それでアジムだけを炙り出そうっていうの？」

ノーアの言葉が鋭くなる。

オアシスを、オアシスに住む人を愛するアジムなら 原因が自分だと分かっている黙って見過ごすなんて出来ないだろう。

「……そういう風にもとらえられますね」

本当にあなたは賢い、そう褒める言葉はノーアにとって意味がない。

険しい表情のノーアを見て、ロハムは苦笑する。

「こんな卑劣な手を使うから、陛下はあなたと決別したんです。あなたの存在は陛下の良心にひどく訴えてくるから。そして、そんなことをした後であなたとの関係を続けようなんて図々しいことが出来る男でもないんですよ」

愛してる、という言葉は同時にさようならでもあった。

甘い言葉なんかじゃなかった。

ねえ、ずるいんじゃないの。

伝えたいことを伝えて、私の気持ちは置いてけぼりなの？

「……それはつまり、私はゲイルと止めることが出来るということですよ？」

いや、今はもうその価値はないのかもしれない。彼の心の中でノアとの別れが過去として片付けられてしまっていたら。

でもそれなら、ロハムがわざわざこんなこと言う意味が無い。

「そうですね」

ロハムは満足げに微笑みながら肯定する。

「……ロハムさんは、私に止めて欲しいんですか？」

こうしてノアに会い、助言することはゲイルの決定に逆らうともいえる行動だ。

「王として、時にはこういう選択しかありません。でもまあ、後悔は少ない方がいいですからね」

沈み込んでいた心が海面へと浮かび上がる。

既に灰となった心に再び火が灯る。

だって何もかも自分勝手すぎる。

言いたいことをいって、一方的に別れを告げられて、嫌いになるように仕向けられて　そんなことでなくなるほどの想いじゃないのに。

たとえどんなに辛い未来があっても、共にいたいと思えるほどに好きなのに。

### 39：砂の海

「軍は、俺がオルヴィスへ戻るとほぼ同時にオアシスに向かうことになっていきます。俺がオルヴィスへ戻るのに早くて二日、オアシスへ出発して到着するまで最短で三日、しかしイシュヴィリアナからオアシスまでは早ければ一日で辿り着けます。あなたが旅に慣れていないことを考慮して準備に時間がかかったとしても充分に間に合いますよ」

本来ならばそうノアに助言してはいけなはずの立場なのにも関わらず、ロハムは去り際にそう話してくれた。

あなたに無茶させたのがばれると、俺の首が飛ぶかもしれませんけどね、と苦笑する様子は相変わらずだ。

その場合は必ず援護すると約束して　ノアはロハムに手紙を預ける。いつもの手紙よりずっと短い。伝えたいことだけを書いた手紙。

「ラトヴィア、動きやすい服を用意して。砂漠を渡るのに必要なもの」

ロハムが帰ってすぐにノアは動き出した。

手持ちのドレスなど役には立たない。まして月の塔から遠出したことのないノアは旅に必要なものが何なのかすら分からなかった。「ノ、ノア様!?　一体どうしたんです!？」

突然砂漠なんて言い出されたものだから驚きを隠せずにいるセリ

と、その隣でまるで全てお見通しかのように頷くラトヴィアがあまりにも対照的でノーアは思わず可笑しくなった。

主の笑顔に、セリはほっと安堵する。今まで元気のなかったノーアをラトヴィアと二人で心配していたのだから、当然だ。

「オルヴィスがオアシスへ進軍するわ。私はそれを止めに行く」

ほっとしたのも束の間、主の無謀とも言える発言にセリは真つ青になった。

「ノノノノ、ノーア様！？ そんなの無理です！！ 危ないです！！」

「無理かもしれないし、危ないかもしれない。でももう決めたの。オルヴィスでもイシュヴィリアナでもゲイルを止められるのはたぶん私しかないから」

凜としたノーアの言葉に、セリは黙る。

「服は全て揃えなければ駄目ですね。あとマントと、食料。馬でいけるのは砂漠の手前までですから、その後は駱駝かイグーです。ノーア様はどちらも乗ったことありませんよね？」

あまり動揺を見せずに準備のための会話を始めたラトヴィアはノーアに問う。

砂漠では馬は使えない。蹄に砂が詰まって走りにくいのだ。普通は駱駝を使うが、急ぐ者はイグーを使う。イグーは駱駝に似た生き物だが、動きは数段早く、小回りが利く。

「ないわ」

「でしたら、駱駝の方が安全ですね」

「でも、急ぐの」

ノーアが到着する前にオルヴィスがオアシスを攻め入れれば、すべてが水の泡になってしまう。

「急がば回れです。イグーは扱いが難しい動物だそうですから、ノーア様では危険です。駱駝も遅いわけではありませんよ」  
そう言いながら書いたメモをセリに渡す。

「これに書いてあるものを買ってきてちょうだい。急いでね」

「はい!!」

メモを大事そうに握り締めてセリは慌てて外へを走り出す。

その後ろ姿をラトヴィアは微笑みながら眺めて、ノーアと向き合う。

「誰か、護衛をつけましょうか」

「いらないわ」

オルヴィス軍のもとに行くなんて危険な目に遭わせるわけにはいかない。

「オアシスまでの道のりなら案内人がいるでしょうし、途中までならキャラバンに混じってもいいわ。早めに着いたならオアシスに入つてアジムに知らせることもできるし」

「なら、その手配まで済ませておきます。くれぐれも額の痣は見せてはいけませんよ」

ラトヴィアの怖い顔を見てノーアは分かったわ、と苦笑する。

ノーアの額に咲く赤い花のような痣　イシュヴィリアナの聖女だという証。他国の者なら知らない人もいるだろうが、念には念を入れたほうがいい。

「準備はどれくらいで出来る？」

「明日の昼までには」

その声は迷いが無い。どんな手を使ってでも明日の昼までには全て用意するのだろう。

窓の向こうの空は、もう赤く染まりつつあるというのに。

「……ありがとう、ラトヴィア」

少し俯きがちに呟く。

いつも母親のように、諭してくれた彼女に、今回は止められるかもしれないと少し危惧した。

「……ノーア様はあんまり我儘を言わない方ですからね。時々言う我儘くらいは叶えてあげたくなるんですよ」

ノーア様は夕食まで休んでいてください、と優しく部屋へと連れて行かれる。

その温かさが何よりも嬉しかった。

走る。

駆ける。

ゲイルから贈られた愛馬に跨り、今までにないほど着易い服を纏ったノーアは砂漠まで急ぐ。

マントを外しても額の痣は見えないように包帯を巻いた。こうしておけば普通に出来る。何か聞かれたら怪我をしたんだと言えばいい。それ以外のノーアの外見はイシュヴィリアナではよくあるものだ。

髪が風に舞う。

通り過ぎた土地は緑が茂り、花が咲き乱れていた。

しかし目の前に見え始めた土地はそれらの色を失っている。

### 砂の海。

褐色の大地。

緑が生えることの出来ない不毛の土地。

それなのに、ノーアは美しいと思った。

砂が模様を描き、いくつもの砂山を作る大地が。

キャラバンと合流するまでに時間があつたので、一人砂漠が見える丘まで上がった。

ここがイシュヴィリアナの端の町。オアシスとイシュヴィリアナを繋ぐ町だけあってそれなりに栄えているようだ。

馬は予定されていたように預けてきた。普通ならこの町で売って路銀に変えるらしいが、ゲイルからもらった大切な馬だ、そんなこと出来ない。あとでラトヴィアが使いを出して引き取りに来る。

いつか、二人で見に行こうと

そう約束した砂の海が目の前にある。  
約束通りなら、隣にいたはずのゲイルはもちろんいない。

「私は、あなたの味方になりに行く」

砂漠を見つめながらノーアは呟く。

ロハムに託した、ゲイルに宛てた手紙に書いたたった一言。

だってゲイルは望んでない。

国王としての彼がこんな決断を下さなければならぬのなら、私はただのゲイルのためにそれを止めに行く。

## 40：キャラバン

合流したキャラバンの人にはノアはそれなりに裕福な家のお嬢様ということにしてあるらしい。嫁ぐ前にお忍びでオアシスまで行くという理由まで作られていた。

名前も用心して本名ではなく、ラトヴィアの名前を借りている。ノアというのは珍しい名前ではないが、多くある名でもない。

「嫁入り前だつていうのに怪我をするなんてついてないねえ、痕にならなきゃいいけど」

ノアの頭に巻かれた包帯を撫でながら、キャラバンの女性アドナが心配そうにそう呟く。

「そんなに大したものじゃないんです。一応念を入れてるだけで」  
あんまり心配させるもの申し訳ないのでノアは笑顔でそう言った。もとは怪我などしていないので、心苦しい。

アドナは銀髪だが、肌はノアよりもずっと濃かった。砂漠で生活することが多いので焼けてしまったんだという。

「未来の旦那も心配してるんじゃないかい？　こんなときに遠出して」

アドナはひやかしのつもりだったんだろうが、ノアは曖昧に微笑むしか出来なかった。未来の旦那なんて　　そう言える存在かどうかノアでは判断出来ないのので何とも言えない。

その表情を見てアドナは誤解したのか、

「良い人じゃないのかい？」

と真剣な顔で聞いてきた。

慌ててノアは首を横に振る。

「そ、そんなことないです」

「でも良いところのお嬢さんなら、ほら　　商売の為とかで好きでもない奴のところにお嫁がされたり」

政略結婚といえはそうなるのだろうか　　。

「ちゃんと、優しい人です。私の考えを尊重してくれてるし……少し過保護なくらいで」

そう説明している人はもちろん形だけの婚約をしているが、結婚すると決まったわけではない。勝手にこんなところに使つてごめんなさいと心の中で謝りつつ、思い出す。

「良い人なら、いいけどね」

とアドナは安堵したようにノーアの頭を撫でる。

でも、とノーアは続けた。

どうせなら少し愚痴ってもいいだろうか。

「少し自分勝手なんです。私の為にやってくれてることも、全然見当違いで。あと全部自分一人で背負い込んで……だから今少し喧嘩中です」

あはは、と何故かアドナは笑い出した。

どうして笑うのか、と首を傾げるノーアを見てなおさら笑う。

「痴話喧嘩は犬も食わないってね。まあ、そういう時は横っ面殴つてやりやいのさ。目え覚ますと思うよ」

ノーアはにっこりと笑い、そして

「だから、これから殴りに行くんです」

一国の国王を。

砂漠を渡るということを、少し甘く考えすぎていたのかもしれない。

マント越しにも照りつける太陽の光が肌を焼くような気がする。

携帯する水は温くなってしまっているのに、天の雫と思えるほどにその一滴は喉を潤してくれた。

昼は地獄の業火のごとく熱く、夜は雪山にいるかのように寒い。落差が激しいぶん、余計にその差は強く感じた。

ノーアが少しキャラバンの進行を遅らせていることもひしひしと伝わってきた。

キャラバンの人は皆気にするな、と笑ってくれる。遅れても一日、二日のことだからそう笑えるのだろう。これがもっと長い行程ならば、笑ってなどいられない。

「大丈夫かい、ラトヴィア。もうすぐオアシスだからね」  
慣れない旅に疲れを溜める一方のノーアを気遣いながらアドナが言う。

「ごめんなさい、それは本当の名前じゃないんです。」

心配してくれるアドナに何度そう言いたくなっただろう。

「ああ、ほら、見えてきたよ」  
つられてマントを少しずらして、目線を上げる。  
その先に見えるのは。

「なんだいありゃあ！」

アドナが声を上げる。

赤い旗。

黒い群れ　人の、塊だ。

緑溢れるオアシスの手前、そんな物騒な集団が陣取っていた。

「オルヴィス兵だろ。最近物騒な噂があったじゃねえか。イシユヴイリアナの王子が生きててオアシスにいるとか」

「ああ、だからってオアシスを攻撃しようってか？ 無謀だろう、そりゃ」

キャラバンの男達の声が耳を掠める。

ああ、どうにか間に合った。

「これじゃあオアシスに入れるかどうか……まったく迷惑なもんだ」  
ノアの隣でアドナが不満を呟く。

マントのフードを取り、ノアは目の前に見える集団に目を凝らした。熱い太陽の日差しも気になんてならない。

「ラトヴィア？」

フードを被らないと駄目だよ、というアドナの言葉が届く。

「ごめんなさい」

呟きながらノアは頭に巻かれた包帯に手を伸ばす。

「それ、本当の名前じゃないんです」

切なげな、悲しげな、そんな表情でノアはアドナを見る。包帯に触れていた手がそれを筆取り取った。

「え、それ……」

額に咲く、赤い花。

「それと、ここまででいいです。今までありがとうございました」  
キャラバンの先頭まで進み、そう言っつてノアはお辞儀をした。  
その額にある痣を見て、動揺が漣のように伝わっていく。

「アドナさん」

呆然とするアドナに最後、ノアが声をかける。

反応が遅れて返事が出来なかったアドナに微笑みかけながら、ノアは拳を見せる。

「横っ面、殴りに行ってきます」

想定外のセリフだったのだろうか　アドナは堪りかねたように笑う。

その豪快な笑顔が心地よくて、ノアも笑う。

目の前の、何百　何千の兵を前に怖気づいてなんていられない。

「いっといで！！　思いつき殴ってやりな！！」

「はい！！」

そう答えながらノアは駱駝を急がせる。

いつもはゆつくりと歩を進める彼らも、急かせばかなり早く走ってくれるのだ。

軍へと近づくノアに気づいたのか、幾人かの兵が武器を構えた。ノアは髪を結んでいた布を解く。長い銀の髪が風に舞い上がった。

その美しさに、誰もが一瞬見惚れた。

そうして、導かれるように額の痣に気がつく。

ノアは息を吸い、高らかに、そして凜とした声で叫んだ。

「私はイシュヴィリアナの聖女、ノア・ルティスです！　どきな

太陽の消えた国、君の額の赤い花

「..」

## 41：深紅

赤。  
あか  
深紅。

音も色彩も失った世界の中で、その色だけはいつまでも褪せることなく私の目に焼きつく。

灰色の視界の中に、それは恐ろしいと感じるほど鮮やかに見えた。

『私は、あなたの味方になりに行く』

ロハムから手渡された手紙には、それしか書いていなかった。

ゲイルの望む罵るような言葉も、縁を切るような言葉も。それどころか彼女はまた、ゲイルを見放さないという。

出立前の慌しい時間に渡されたものだから、ノーアからの手紙は大事に懐に入ったままだ。

目の前には、美しい砂漠のオアシス。

到着してからそれほど経っていない。このまま数日様子を見て、イシュヴィリアナの王子が現れないかどうか賭ける。

全てが終わったら 彼女に会いに行ってもいいだろうか。

思いをもう一度伝えて、その答えを聞くことは許されるだろうか。彼女の家族ともいえる人を殺しても、彼女は自分を許すのだろうか。

複雑な気持ちを胸の中で燻らせたまま、ゲイルはじっとオアシス

を見つめた。

兵は皆浮き足立ってオアシスへの進軍の合図を今か今かと待っている。イシュヴィリアナを制圧した時の栄光がまだ忘れられないのだろう。

それでも日中の砂漠だ。皆口数が減り、静かだった。

その静寂を。

破る凜とした声が聞こえるまでは。

「私はイシュヴィリアナの聖女、ノア・ルティスです！　どきなさい！」

その声が発せられた周囲から徐々にざわめきか広がる。

自分が、彼女の声を、聞き間違えるはずがなかった。

人の群れを目の前に、ノアは毅然と自分の名前を高らかに名乗った。

動揺と困惑で兵は皆ざわめいた。イシュヴィリアナの聖女がこんなところにやって来るなんて誰も想像しないだろう。

風が舞うたびにマントを脱いだ顔に砂が当たる。少し痛いその自然の攻撃に、顔色一つ変えずにノアはただ一人を探した。

そして随分と遠く　兵の中心に、その人を見つけた。

マントから零れるあの赤い髪は、彼しかない。オルヴィスではありふれた赤毛も、ノアにとってあの鮮やかな赤はただ一人だ。

驚いて立ち上がり、ゲイルはマントを外した。その様色の瞳は見開かれている。

ノーアは駱駝からするりと下りて、駆け寄る。砂に足がとられてひどく走りにくいけれど、全速力で弾かれたようにゲイルも走り出す。

「ゲイル　……！」  
会えた。

間に合った。

「ノーア……どうしてこんなところに」  
未だに驚きを隠せない顔のまま、ゲイルが問う。  
自然と繋がれた手を握り締め、ノーアは微笑む。

「前に、言わなかったかしら。あなたもアジムも、私は選べない。どちらかが戦いを始めようとするのなら、私はそれを止めるって」  
「どちらも、失わないように　そういう選択しか、ノーアは出来ない。」

ゲイルは目を丸くして、そして吹き出す。

「　ああ、言ったな。その為だけに、こんなところまで来たのか？」

「その為だけなんて　大変だったんだから。エスコートを約束した誰かさんはすっぱかしてくれたいし」

「そう言いながらノーアが睨みつけると、ゲイルは苦笑しながら悪い、と謝った。」

「ここはやはり横つ面を殴っておくべきだろうか　そんなことを考えたノーアの足元に。」

トス、と。

一本の矢が刺さる。

矢が放たれた方向に振り返ったノーアの目に、雨のように降り注

ぐ矢が映った。

兵の一部が、弓を持ち、剣を持ってノアを狙っていた。

一瞬が永遠のように長く感じながら、心のどこかでノアは納得してしまった。

ああ　やはり私は邪魔な存在なんだ。

ゲイルと婚約するという形で押さえつけたものの、やはり消えたわけではないのだ。ノアを排除しようとする、反イシュヴィリアナの集団が。

咄嗟にゲイルを突き飛ばす。

彼に流れ矢が当たってはいけない。

どうせオルヴィス王がゲイルでなければ死んでいただろうし、自害しようとした時にゲイルに助けられなければ死んでいたのだ。二ルに刺された時も、毒を飲んだときも。

それに

『貴女はまだ死ねない。私の力を持つ者が貴女しかいないから。次の者が生まれるまでは、貴女の命は守られる』

そう、私はたぶん死なない。

神がそれを許さないから。

ならば降り注ぐ矢の全てが、私に当たればいい

！

「ノア！！」

目を閉じたノアに無数の矢が降り注ぐ。

鉄錆の匂い。

ぬるりと、血の感触がした。  
全身に感じる重み。

なのに、痛みがない。

「？」

ニルに刺された時も、毒を飲んだ時も痛みはあった。痛みを感じなかったのは、自害を止められた、あの時だけ。

ゆっくりと目を開けたノアの目に映るのは、赤。

包み、守るように覆いかぶさるいとおいしい人。

鮮やかな赤い髪と同じくらいに、彼の身体を染め上げる深紅<sup>あか</sup>。

「……………ゲ、イル……………」

彼の背中から生えるようにピンと立つ何本もの矢。

彼の腕を、足を、突き刺す数々の矢。

そこから流れる深紅は、鮮やかに、色褪せることなくノアの瞳に焼きつく。

それは、死を匂わせる血色。

ぶつ、と音が途切れたように聞こえない。

世界の色がすべて失われる。赤と、深紅以外のすべてが。

「い、いやあああああああああああ……………！！！！！！」



## 幕間：砂嵐

それは、巨大な砂の塊だった。

砂が人を飲み込んでしまうような柱を作り、突風と共にその地を荒らす。

人々の悲鳴は全て風の音でかき消され、ある意味では無音の状態だった。

なんだ、あれは。

ガジエスはしばし呆然と砂の柱を見た。

あれは、自然に現れたものなどではない。

ほんの数秒前までそんなものが起きる気配は微塵も無かった。そう、あの悲鳴が響き渡るまでは。

太陽の消えた国、君の額の赤い花

オルヴィス軍がオアシスのすぐ近くまで来ている。その情報を得て、ガジエスは主であるアジムに命じられて様子を見に来た。そこで聞いたのは、懐かしい声。

「私はイシュヴィリアナの聖女、ノア・ルティスです！　どきなさい！」

何故、貴女が。

長く美しい銀の髪は、遠めからでも充分に輝いて見えた。

その凜とした声は、記憶にあるものよりも少し大人びていた。

けれどそれは、自分の知る聖女以外のものではなかった。記憶が彼女が本物であると証明していた。

そして、呆然としている自分の目の前で矢の雨があの方に降り注ぎ

「ノア様！！」

助けは、間に合い、そして間に合わなかった。

遠くにいる自分が駆けつけ、助けられるわけがなかった。

あの方は赤毛の青年の　　確たる証拠はないが、おそらくオルヴィス王に大切に包み込まれ、守られていた。

その代わりにオルヴィス王が無数の矢を受けていた。

何故

オルヴィス王があの方を守るのか。

あの方はここに居るのか。

そんな疑問が脳内を巡っている間に、それは起きた。

「い、いやあああああああああああ……！！！！！！」

耳を貫き、身体を引き裂いてしまいたいほどに痛々しい悲鳴と共に、砂嵐が起こった。

人々の悲鳴をも飲み込む轟音。  
離れた場所にいる自分ですら吹き飛びそうなほどの風圧。

守った者と、守られた者、ただ一人を中心に、それはしばらく続いた。

幕間：砂嵐（後書き）

前回の続きであって続いてません（汗）

そして次回から物語は最終章に向かいます。

ノアとゲイルの運命　その行く末をどうか見守ってあげてください。

## 42：嵐のあと

見上げた天井は、見知らぬものだった。

それなのに心配げに自分の顔を覗きこんでくる人は　あまりにも懐かしい人だった。

すべてが、夢物語であったと告げるかのように。

「……ノア、良かった。気がついたんだな」

気遣わしげに囁かれた声がとても優しく、ノアの瞳からは涙が零れた。

銀の髪、青い瞳、右の瞳のすぐ横に、傷跡がある　イシュヴィ

リアナの王子。

「……………アジム」

優しく、硝子に触れるかのように繊細に頬を撫でるその手にノ

アの涙は零れ落ちた。

夢なんかじゃない。

夢であるはずがない。

この一年に満たない期間の全てが夢であったのなら　どれだけいいだろう。

目の裏焼きついたままのあの鮮やかな赤が、幻であったのなら

。「もう、大丈夫だ。ここはオアシス。危険なことはない。安心して眠っていいんだ。俺が側にいてやるから」

あやすように髪を撫でられる。

その腕を掴み、ノアは起き上がる。

「ゲイルは？」

不意を突かれたように目を丸くするアジムに、ノアはさらに問

いかけた。

「ゲイルは オルヴィス王は！？ あの人はどうなったの！？」

ノーアを守るためにその背には無数の矢が刺さった。手足を貫通した矢から滴るほどの血が流れていた。

どうして自分はここにいて、彼はいないのだ。

「ノーア、今はそれより休んで……」

「私のことなんてどうでもいい！！ ゲイルは無事なの！？ お願  
いだから教えて！！」

縋りつくノーアを、寝台から落ちないように抱きとめながらアジ  
ムは困惑していた。

瞳から熱い涙がとめどなく零れた。止める方法が分からない。

彼は、あんなにたくさんの矢を受けて

「……即死ではないにしろ、明らかに致命傷でした。おそらく助か  
らなかったでしょう」

静かに、冷静に、恐ろしい現実を告げる声。

「ガジエス！！」

アジムが弾かれたように振り返り、臣下である彼を叱責する。

しかしそんなことノーアにはどうでも良かった。

死んだ。

ゲイルが。

私を庇って。

私のせいで。

それからノーアは寝台から離れず、ただ抜け殻のように涙を流し続けた。

虚ろな瞳は何も映すことなく、ただ枯れることのない涙を溢れさせるだけ。

話しかけても反応をしないノーアを、アジムは扉から様子を見る。ノーアに冷たい言葉を浴びせ、あのような状態に追いやったガジェスには部屋での謹慎を言い渡した。

今のノーアに、あんな現実を知らせることはあまりにも残酷だ。

「　彼女、気がついたのね」

後ろから声をかけられる。

アジムが振り返るとそこにはオアシスの次期君主であり、紆余曲折を経てアジムの婚約者となった少女　クシャナが立っていた。

褐色の肌はオアシスの民であることを証明している。真つ黒な髪は真つ直ぐで、腰のあたりまで伸びている。つい最近までは未婚の証として被っていた黒いベールは取り外されていた。婚約者がいる者は被る必要がないのだ。

「ああ、でも」

アジムはちらりとノーアの様子を見る。

何も言わなくともクシャナは分かっているかのように頷いた。

「とてもまともに話せるような状況じゃないわね。当然か、婚約者の生死が不明のままなんだもの」

クシャナはため息を零し、心配そうにノーアを見つめるアジムを見上げた。

ゲイルの生死は、まだ定かではない。オルヴィス軍は突如起きた砂嵐によって撤退し、オアシスの平和は保たれた。

ガジェスの報告によればゲイルの生存は絶望的とのことだが、迂闊にオルヴィスに近づけない以上何の情報も入ってこない。商人から話を聞きだしたが、市民にも何の情報も渡ってきていないらしい。

軍がノーアを排除しようとし、その結果オルヴィス王が死亡したともなれば、それは国としてかなりの汚点だ。ましてゲイルはイシュヴィリアナの攻略した手腕ある王。民に事実が知れ渡ればオルヴィスの政治は地に落ちる。

「……随分と気にかけてるのね」  
クシャナはふて腐れたように呟く。

ノーアがひどい状態なのは理解している。実際ノーアは丸二日目を覚まさず、その間アジムは寝る間も惜しんでつきつきりだった。恋人で、婚約者であるクシャナを放置して。

政略だと知っていても、ノーアは元はアジムの婚約者の少女だ。クシャナも正直自分より優先されると面白くないだろう。

「そりゃあ、妹同然の存在だし。あんな状態の家族を無視できないだろ」

「そりゃそうですけど」

「何だよ、ヤキモチか」

アジムは笑いながらクシャナの髪を撫でる。

「ヤ、ヤキモチなんかじゃ……」

ない、と言い切れないのが悔しい。

くすくすと笑いながらアジムがクシャナの髪をくしゃくしゃにする。

「大人になれよ、俺の妹なら、将来のおまえの義妹だろ」

そうやって誤魔化されてなるものかとクシャナはアジムを見上げる。

いつも晴れ渡っている空に、鉛色の雲がやって来る。

ここは砂漠の中。雨雲なんてそう見れるものじゃない。それに、クシャナが見たものはかつて見たことないほどに大きい。砂漠の雨雲は、普通それほど大きさは無い。

「……………雨？」

一体、何ヶ月ぶりだろう。

砂漠に天の雫が降りだすのは。

「雨季でもないのに」

水の乏しいこの生活で、雨は喜ばしいものだ。しかし季節でもないのにあれほど巨大な　オアシスの民の誰もが見たことも無いほどの雲が現れるなんて、異常ではないだろうか。

「　まさか」

アジムが険しい表情で空を見上げ、そしてノアを見た。

その意味が理解できず、クシャナはただアジムを見上げる。

「ノア」

呼びかける声に、少女は反応しない。

真剣な顔のアジムにクシャナはただ何も出来ない。どうしてそんなに焦るのかも分からなかった。

そしてクシャナは数日後に知ることになる。

イシュヴィリアナの聖女の力を。

その雨の異常さを。

突然降りだした雨は三日経ってもやむことはなく、ノアの枯れない涙と呼応するかのようにオアシスを包み込んでいた。

### 43：オアシスの雨

「これが　イシュヴィリアナの聖女の力なの？」

クシャナは窓から重苦しい雨雲を見上げて、一人呟く。  
雨が降り出して、もう四日目になる。

最初は恵みの雨と喜んでいたオアシスの民も、これほど続くと異常さを感じざる得ない。砂漠の中でこれほど大粒の雨が一時も止むことなく降り続けるなど、異常現象以外のなにものでもない。

オアシスは神に愛される土地　そんな風に呼ばれても、超常の力を感じたことなど一度もない。ただ水不足に喘ぐ世界の中で、他より豊かな水源があるだけ。

「……ノアのは、特に強いものらしいからな」

後ろからそう声をかけられて、クシャナは振り返る。

声の主は考えるまでもなく、アジムだった。

「この雨は、あの子がやってることだと？」

「雨だけじゃない。おそらくオルヴィスが撤退する原因になった砂嵐もだ。どちらもノアが意識してやっているんじゃない、無意識に起きている。ノアの感情に引きずられて」

信じられない、とクシャナが呟く。

当然だろう　ノアを知るアジムでさえ、信じられずにいるのに。

「……でもそれほど、オルヴィス王のことを愛してるってことよね？」

ノアの流す涙はすべてオルヴィス王を思つてのもの。

「そういうことだろうな。悪い人ではなかったし、ノアも丁寧に扱われていたみたいだ。」

「一応婚約もしてるし」

「自分の国を滅ぼした張本人なのに」

クシャナのセリフは、疑問を含んでいた。そしてその響きには自分なら恋愛感情なんて芽生えないとでも言っているようだ。

「二人に何があったのかは俺達には分からないことだろ。たぶんノアは俺とオルヴィス王との間で悩んだだろうしな」

「反対しないの？ 一応は敵でしょう？」

アジムは苦笑して、しないよ、と答えた。

「ここまでできたら誰にも止められないだろう。オルヴィス王が生きているのかも今は分からないし 今ももう、敵じゃない」

俺はもう王子じゃないから。

その言葉はどこか切なさを含んでいた。王家の人間にも関わらず国と民を捨てたことを、アジムはいつまでも背負っていかなければいけない。

ノアを月の塔に帰そうにも雨で砂漠はいつも以上に渡りにくく、手紙で知らせようにもオルヴィスの監視がついているかもしれないと思うと行動できない。

砂漠に突然現れ、そして姿を消したイシュヴィリアナの聖女を、オルヴィスが探していないわけがない。もとよりノアを殺そうと起きた事件だ。ゲイルが生きているにせよ、死んでいるにせよノアを今のうちに始末しようと考えている者の方が多い。

ほとぼりが冷めるまではノアをオアシスに匿うしかない。

「……ノア」

呼びかけると、ノアはちらりとアジムを見た。

その目は赤くなって、目の周りは泣きすぎたせいで腫れている。それなのにまだ足りないかと涙は流れ続けていた。

「オルヴィス王が死んだとまだ決まったわけじゃない」  
だからもう泣くな、と言いたかった。

それは無理な話だと分かっているけど、これ以上にこの少女が悲しむ姿は見たくなかった。

こんなことなら、国を出る時に無理やりでも連れ出せば良かった。そうすればノアはゲイルと出会うことなく、もう少し長い時間をかえてオアシスまで辿り着き、穏やかに暮らせただろうに。

「泣くな……あんまり泣くとブスになるぞ」

幼い頃そう言ってノアを泣き止ませた。

手を伸ばし頬を濡らす雫を拭ってやるが、またすぐに頬は新しい涙で濡れていく。

「出会わなければ良かった」

ぼつりと、ノアが久しぶりに声を出した。泣き声を堪え続けたせいか、少しその声は枯れている。

それが誰のことなのか、分からないほどアジムは愚かではない。

泣くだけ泣いたが、ノアはまだ本当の意味で泣いていない。

「……そうかもな」

アジムは寝台に腰かけ、ノアの髪を優しく撫でる。

ノアはみつともなく、泣いて泣いて、ずっと溜め込んでいた心の底の悲鳴をあげなければいけない。ただじつと泣き続けても心は晴れない。

「私が、あの人と会わなければ、私が、こんなところまで来なければ、あんな……あんな怪我させなかったのに。だってあんなに血がいつぱい……でも来なくちゃ、ゲイルもアジムも失うと思ったから、ゲイルだって、こんなこと望んでなかったから、だから……」

子供のようにしゃくりあげ、途切れ途切れに言葉を紡ぐ。

アジムはただじつと、ノアの髪を撫でていた。下手な相槌なん

て必要ない。

「大切なものを、ぜんぶ、守りたかっただけなのにつ……」

悲鳴のような泣き声に、アジムは胸が締め付けられる。

月の塔で、限られた人とだけ交流を持って、大事に大事に育てられた少女。

この一年に満たない期間で　ノアはどれだけ傷つき、涙を流し、身を引き裂くような思いをしてきたんだろう。

外の雨は一向にやむ気配を見せず、大粒の雫が地表を打ち続けた。

見ているこちらが苦しくなるような顔で、アジムが戻ってきた。

どれだけ時が無慈悲に過ぎ去っても、ノアの心を癒すことが出来ないように、その彼女の傍らで慰めるアジムの心まで悲しみが蝕んでいるようだ。

それを妬む気持ちも少なからずあった。

どうして彼女を自分よりも優先するのかと。

その気持ちも、今となっては薄れてしまった。一つの可能性を思い出したのだ。

もし、ノアがオルヴィスを止めていなかったら　。

十中八九、クシヤナはアジムを失っていた。

オルヴィス軍がやって来た頃、アジムはオアシスの民に見えるように変装していた。しかしそれも長くは続けられなかっただろう。

一歩間違えばオアシスは戦場になっていたのだから。

オルヴィス王の生死は分からない。けれど、クシャナの恋人は守られ、ノーアの恋人は守られなかった。

それが分かった今、どうして彼女を恨むのか、妬むことが出来るのか。

「……私も、少し話してきてみる」

ノーアの部屋から戻ってきたアジムとは入れ違いになる形でクシヤナが部屋を出る。

「え、おい!？」

驚いたアジムが振り返ってクシヤナを呼び止めるが、クシヤナは止まらずに歩き続けた。

石と木で作られた、広いオアシスの宮。長く続く廊下を急ぎ足で歩く。渡り廊下が多いので油断するとこの天気では濡れてしまう。

客人用の西の離宮。そこにノーアは匿われている。オアシスは国ではないが、オアシスを束ねる君主の家ともなると一国の城並みの豪華さだ。

入り口から覗くと、ノーアはやはり頬を涙で濡らしたままだ。

彼女に感謝している。

彼女が早く元気になればいいと願う。

だけど、

アジムのやり方ではいつまでたっても彼女の涙は止まらない。

#### 44：あまりにも非力で、

慰めるなんて　もはや意味は無い。

彼女は傷を癒して欲しいんじゃない。傷跡が癒えることなく化膿し続けることを望んでいるのだ。

もし、傷を治せる人がいるとしたらそれは　オルヴィス王しかない。

「……いつまでそうやって泣いてるつもり？」

クシャナの低い問いに、ノーアは反応しない。

静かに室内に入り、寝台の脇に立ってノーアを見下ろす。

「いいかげんにしてくれない？　こうも雨がずっと商人達がオアシスから出れなくて困ってるの」

無視。

少しムツとしながらクシャナはノーアの肩を掴み、無理やりこちらを向かせた。

「自分のせいだとも思ってるの？　自分のせいでオルヴィス王が死んだとでも？　後悔してるんでしょう？　こんなオアシス見捨てて置けばよかつたって、オルヴィス王が帰ってくるのを静かに待っていればよかつたって！」

空虚だったノーアの瞳に、わずかに光が宿る。

「　　そうよ」

初めてクシャナに向けられたノーアの言葉は低く響き、それは悲しみと憎しみと後悔とが交じり合った重い言葉だった。

「私がこんなところにこなければ、ゲイルはあんな目に遭わなかったんだもの。馬鹿なの、私。こうなるまで一番大切なものが分からなかった。どれも皆等しく大事ななんて、そんなわけなかったのに！」  
クシャナにとってアジムがただ一人の人であるように ノーアにとつてのゲイルもまたそうなのだ。

アジムも、ゲイルも、どちらも守りたかった。どちらも同じように大切だと思ったから。でも違った。

アジムが処刑されると聞いた時の諦めにも似た感情　あのままアジムが死んでしまっても、ノーアは涙を流しはずれ過去として葬るのだらう。

でもゲイルは諦めきれない、諦めたくない。  
生きていて欲しい。どんなものを代償にしても。

「だったら奇跡でも起こしてみせればいいじゃない。イシユヴィリアナの聖女なんでしょう？　神の愛娘なんでしょう？　オアシスを救ってみせたあの砂嵐みたいに、あなたの力なら人だって蘇ることができるんじゃないの!？」

挑発だった。

怒りが悲しみに勝てばいいと　そう思って、クシャナはノーアに喧嘩を仕掛けた。

しかしノーアは自嘲気味に笑った。

「そうね、そうよね。私にはこんな力があるんだもの、あの時に彼の怪我を癒そうと思えば　出来たかもしれないわね」

無数に刺さった矢を全て消し去って。

流れた血も全て元通りにして。

傷跡も残らないように。

しかし、現実にはそんなこと起きなかった。

ノーアの激しい感情に反応して嵐が起きた。もともと制御する方

法も、使いこなすこともできない不安定な力で、怪我を癒すなんて出来るわけが無かった。

「なにがイシユヴィリアナの聖女よ！ 何が神の愛娘よ！ 大切なものを守れない力なんて意味ない！！」

ノーアは声の限りに怒鳴りつけ、握り締めた拳で寝台を叩いた。柔らかな寝具に包まれて、力いっぱい振り上げたはずの拳はそれほど痛まなかった。

痛いぐらいのほうがいい。

もう一度振り上げ、下ろされた拳をクシャナが受け止める。

「分かってる。あなたにとってアジムは最優先事項じゃない。彼を助けた結果を悔やんでいるとしても、私は言っわ。あ

りがとう、オルヴィス軍を止めてくれて」  
「ありがとう、アジムを助けてくれて。」

クシャナのその言葉は何よりも重かった。

ありがとうなんて、言われたくない。

アジムを失っても、ゲイルを失いたくないなんて思っている今の自分に。

優しくノーアの拳を包み込むその両手は、ノーアのものとは何ら変わりないほどに華奢で、細くて、頼りない。

いつの間にか止まった涙がこみ上げてきて、ぼたりと落ちる。  
「まだ泣くの？」

クシャナの声に、ノアは反射的に涙を拭った。  
泣きたくない。もう。

「いい子ね。あなたは泣いている暇なんてないでしょう。もしもオルヴィス王が死んでしまっているのなら、あなたはそれを償わなければいけない」

優しい微笑を浮かべながら、ノアに罪を科すその人は本当のノアの望みを理解してくれているんだろう。

慰めないでいい。同情しないでいい。だからどうか私に罰を。

「生きなさい。幸せに　誰もが羨むほど幸せに、生き抜きなさい」  
優しく、重く、厳しいその言葉は、死ぬことは許さないと暗に言っていた。

ノアの命は、たくさん犠牲の上にある。成功することがないとしても、自ら死を選ぶことなど許されない。

生きている者が死者に与えられるものなんて何も無い。

ただ死んでいった者のために精一杯、幸せに生きなければいけない。

そしてもしもゲイルが生きているとしても　彼にはもう頼れない。  
自分は彼にとっての毒でしかない。

もとよりオルヴィスにはもう帰れない。つまりそれは、イシユヴイリアナに帰れないのと同じことだ。

帰ればおそらく何者かに殺されるだけだ。

太陽の消えた国、君の額の赤い花

許されるのならこのまま

オアシスという不干渉の地で静かに。

彼の幸せを祈りながら。

太陽の消えた国、君の額の赤い花

44：あまりにも非力で、（後書き）

更新のペースが遅くなってきましたすみません…。  
春は何かと忙しい季節ですよね！？（言い訳）

#### 45：無力な自分。

長く続いた雨は嘘のように上がり、青く澄んだ空が久しぶりに顔を出した。

ノアはまるで泣かなくなり、周囲に笑顔を振りまくだけの元気はある。それが、空元気だとしても。

ノアがオアシスに匿われるようになって、もう二ヶ月以上が経とうとしている。

身の安全のことを考えて、ノアはオアシスの宮から出ないようになっている。月の塔から出ずに育ったノアにとってそれは苦痛にもならない。宮の中は月の塔よりも広い。

「……あれで良かったのか？」

見る者には明らかに作り笑顔だと分かるノアを見て、アジムが辛そうに呟く。

問いかけられたクシャナは困ったように微笑み、恋人を見上げる。「今のところはね。あのままじゃ体力がなくなって衰弱してたわ。アジムみたいにただ慰めるのって逆効果なのよ、ああいう子に対しては特に」

「でも」

あんなふうに笑って欲しかったわけではない。

時が傷を癒すということも ないわけではないのだから。

「あのね、甘やかすことが優しさじゃないのよ？ あの子はアジム

がいなくなつてからも一人でちゃんとしてきたんでしょ？　いつまでも子ども扱いするのは失礼だよ」

「子ども扱いしているわけじゃ　」

「甘やかすつてことはそういうことなの。女に関しては黙つて女に任せなさい」

クシャナは最初の頃はノアにやきもちを焼いていたというのに、今ではアジムと変わらないほどにノアを心配しているようだ。ノアも随分とクシャナに懐いたようだ。アジムが疎外感を感じるくらいに。

「ノア」

オアシスの中にある泉にいたノアを見つけて、クシャナが声をかける。

長い銀の髪が風に泳ぐ。座つて足だけを泉に浸しているノアの姿は同性から見ても素直に綺麗だと思えた。

泉はとても小さい。けれどこの世界で住まいの中に水が溢れる場所があるということがそれだけ力を示すものになる。

「クシャナ」

振り返つたノアが柔らかく微笑む。

少なくとも作り笑顔ではないその顔に、クシャナも少しだけ安堵した。最近では時々アジムやクシャナにそうやって微笑んでくれる。「町まで出てみない？　ベールで顔を隠せば大丈夫よ」

クシャナは手に持っていた黒いベールを持ち上げる。

オアシスでは婚約者のいない少女はベールで顔を隠す習慣があるのだ。クシャナもつい最近までは使っていた。

「え、でも……」

「髪はまとめれば平気だろうし。オアシスの中を全然見てないでしょう？ 女同士積もる話もあるしね」

ノアが戸惑うのもおかまいなしにクシャナはノアの手を引いて立たせる。

一緒にもってきていた道具でノアの長い銀髪をまとめ、ベールを被せた。輝いていた銀髪は黒いベールに包み隠され、白い肌は手くらいしか見えない。

「さ、行きましょ」

その黒いベールが 喪に服しているようだと、ノアは思った。

「この砂糖菓子美味しいのよ。昔から好きなの」

クシャナに手を引かれながらノアは混雑する町の中を歩く。

黒い髪に褐色の肌の人ばかり。時々いる違う毛色の人オアシスの外からやってきた行商人だろう。

オアシスには水路がありそれが暑さを和らげてくれるようだ。砂漠の中でも育つ丈夫な木々がオアシスを守るように囲う この外が砂漠だとは思えない光景だった。

「アジムつたらね……」

周囲に気をとられてばかりいるせいでクシャナの話を半分以上聞いていなかった。

「 だつたの？」

いつの間にか人の波は消え クシャナと二人、町が一望できる高台にいた。大きな木が一本だけあり、足元には草花が咲いている。クシャナの問いが自分に向けられたものと分かって、ノアは



思い出して泣かずにいられるほどの安い思いではない。

大きな木の元でしゃがみこむ。

自分の膝を抱えて、ノーアは一目をはばかることなく大声で泣いた。赤い空は美しい色を保ったまま、雨雲の影なんて少しもなかった。

クシヤナが宮まで戻ると、門の前が騒がしかった。

門兵に一人の青年が足止めされている。マントを被っているので顔どころか髪の色さえも見えなかった。

「だから、怪しい人間を通すわけにはいかないんだ。あんたオアシスの民じゃないだろう!？」

門兵が男を止めながら言う。彼の位置からなら肌の色くらいは見えるだろう。

「どうしたの?」

クシヤナは門兵に尋ねる。邪魔で中に入れなというのも理由のひとつではあるが、宮に入るオアシスの外の人間は基本的に通過証を持つてる。それ以外はアジムやノーアのように招き入れられた客人だけだ。

騒ぎを聞きつけてきたのか、門が内側から開けられてアジムもやって来た。

「この男がクシヤナ様にお会いしたいと」

「私に?」

本人がいるというのに青年は少しも動かない。クシヤナから顔も見えないが、知り合いではないのは確かだ。

「はじめまして、オアシスの姫君」

青年が振り返って挨拶する。

さっと隣に来たアジムが少し警戒するようにクシャナの前に立つ。

「……あなた、何をしにここまで来たの？ 私に何の用？」

訝しげにクシャナが問いかける。青年の手がするりと伸びて、マントのフードをはずした。

前に立つアジムが息を呑んだ。

現れたのは赤い赤い、夕焼けのような赤い髪。

「……………ノアを、迎えに」



## 46：訪れ

「……良かったの？」

隣に立つアジムの顔色を窺うように、クシャナが問う。

アジムは何も答えず、今さっきまで赤毛の青年が立っていた場所を睨むように見つめていた。

「仇……でしょ？」

「俺はもうイシュヴィリアナの王子じゃない……だから、もう敵ではない。戦争は命の奪い合いが基本なんだから、誰が死のうと相手を恨むのは少し違うだろ。お互い様なんだ。人の死は忘れてはいけないことだけど、個人に罪を着せるのはたぶん間違いだよ」

空が赤く赤く染まっていく。

夕焼けの中立つアジムとクシャナも夕日によって赤く染められていた。

「だったらそんなに怖い顔しなればいいのに」

アジムはいつまでも青年が走り去った方向を睨んでいる。

クシャナはため息と共にそう零すが、先ほどから婚約者の彼はちらりともこちらを見ない。

「過去のことには罪には問わない　けど、ノーアを傷つけるなら話は別だ。そうだろ？」

兄馬鹿ってやつね、とクシャナは笑う。

血のつながりなんてないというのに、見事な過保護ぶりだ。

「人の恋路を邪魔する人はろくな目に遭わないわよ。もう一人で立てるんだから、そっとしておきなさい」

それで、もう少し恋人に構ってくれないんじゃない？

年頃の女の子らしい、可愛らしい我儘にアジムは微笑んで、クシヤナの額に口づける。

温かな、柔らかな、懐かしい茜空　　それは、まるで。

眩しいほどに明るいつ夕焼けに、ノアは目を奪われた。

濡れた頬はそのまま、涙はようやくややく止まろうとしている。

時が止まったかのように　ずっと、ただ赤く染まる世界を見つめ続けた。いとおいしいその色を、目に焼き付けようと瞬きも忘れる。

赤は彼を思い出させる色。

ああ、でもあの人の方がずっと綺麗だ。

会いたい会いたい会いたい　　。

自分のせいで、彼があんな目に遭ったのに。無事かどうかも知る術がないのに。それでもこの砂漠を越えて、あの人に会いに行きたかった。

過ぎした日々はあまりにも遠く、懐かしい土地の思い出は儚くも色褪せる。

一滴、零れ落ちる涙が地面に染み込む。

どれほど座り込んだまま、夕焼けを見つめていたのだろう。

それほど長い時ではなかったはずだ。夕日は一日の中ではほんの一瞬のことだから。

空はなおも赤く、ノアを痛い過去へと導く。

さく、と後ろで草を踏む音が聞こえた。

その音を聞いて自分の耳がちゃんと機能していることに気づいた。ずっと夕日を見つめていたら音がなくなったかの錯覚に陥っていた。ノアがここにいると知っているのはクシャナだけだ。迎えに来たのだとしたら彼女かアジムだろう。

「……クシャナ？ それともアジム？」

泣いたせいで声が少し枯れていた。

これでは泣いたのが簡単に分かってしまうな、とノアは苦笑する。気づかないふりをしてくれるといいんだけど。

ノアの声は静かな夕日に飲み込まれる。

背後の人物は答えない。

一瞬の沈黙にノーアは首を傾げ、ゆっくりと立ち上がりながら振り返る。

夕日に染まってもなお、赤い。

息を呑んだ。

大きく見開いた目をなおも大きく見開く。

瞬きも忘れた。ただただ目の前に立つ人物を見つめていた。それくらいしか出来なかった。

身体が魔法にかかったかのように動かない。

幻だろうか。

それとも夢なのだろうか。

だって、こんなの、ありえない。

「……………ゲイル……………？」

呼ぶと、その人は微笑んだ。  
どの記憶よりも優しい、柔らかな笑顔だった。

身体が震えだす。  
止まっただけの涙が歓喜で湧き出した。

ああ、神様。

これが、幻でないのなら。

もう二度と、引き離さないで。

太陽の消えた国、君の額の赤い花

#### 46：訪れ（後書き）

次回で最終回になります。  
執筆急ぎますので待っていてください。

## 最終話：再会

ノーアは弾かれたように駆け出し、ゲイルの胸に飛び込む。

幻ではない彼はノーアを優しく抱きとめ、その腕で少し痛いと感じるくらいにきつく抱きしめた。

そのぬくもりが、強さが、現実なのだとノーアに訴えてくる。

「ゲイル、ゲイル、ゲイル、ゲイル」

何度呼んでも足りない。

ずっと求めていた人の名前だ。

「……悪い、遅くなった」

ゲイルはノーアの髪を優しく撫でながらそう言う。

低く響く、心地よい声。

ああ聞きたかった音だとノーアの瞳からまた涙が溢れる。

歓喜で何も言えなかった。ただノーアは首を横に振り、温かな彼のぬくもりに甘えた。

「掃除が、思ったよりも時間がかかってな」

ゲイルが苦笑しつつそう呟く。

「……掃除？」

いったい何のことだろうとノーアが首を傾げる。すぐ上のゲイルの顔を見上げると、ゲイルは柔らかなノーアの髪を撫でたまま微笑んだ。

「ノーアが憂いなく過ごせる場所を作るための掃除だ。オルヴィスで暗殺を目論んだ奴らを全部炙り出して　まあ、そういうことだ」

ノーアがオアシスに匿われている間、ゲイルはずっとノーアの為

に動いていたというのか。ノアはその事実を本人から聞かされ、顔を赤く染めた。

嬉しいと、そう思ってしまうのはいけないだろうか。

「怪我してたのに、どうしてそういう無茶するの」

私なんかの為に、という言葉は自惚れのように感じて言えなかった。

週単位で治るような怪我ではなかったはずだ。ノアの脳裏にはまだあの鮮血が焼きついている。

「どっかの寂しがり屋な聖女様を待たせるわけにはいかなかったからな」

かああ、と羞恥でノアは顔を真っ赤にする。

砂嵐が起きたことも、オアシスに異常な雨が降り続いたことも

ゲイルの耳に届いているのだろう。彼の言う人が自分を指しているのだと嫌でも分かる。

「あんまりオアシスに迷惑かけるわけにもいかないから、急いだんだ」

「……迷惑なんて」

かけてないと言い切れない自分が情けなかった。

保護者のようなゲイルの発言を気にしないでいられるほど、明確な関係があるわけでもない。ノアは思わずゲイルの胸を押して離れる。

その細腕をゲイルが逃がさないとも言いたげに掴んだ。

「悪い、違う」

ゲイルが低く呟く。

頼むから逃げないでくれ、とさらに言われてしまえば、ノアはもう動けなかった。

「俺が、早く会いたかったんだ」

大きな手がノアの頬に触れる。

榛色の瞳に心を奪われてしまったかのように何も考えられない。  
目が離せない。

「本当はもっと早くに迎えに来たかった。怪我をしてようが、敵が  
潜んでいようが 早く、こうして触れたかった」

いとおしげに見つめてくる目にノアは捕らわれたままだ。

苦しい。

口を塞がれているわけでも、水の中にいるわけでもないのに上手  
く呼吸ができない。胸に何かがいっぱい詰まって、そのせいな  
んだろうかとノアは思う。

ただここで言わなければならぬ言葉があることだけは、本能で  
分かった。

「 会いたかった」

私も、という言葉は声にならなかった。

ゲイルの唇がノアのそれを塞ぐ。

熱も、吐息も交じり合って、一つになる。

長い長い口づけの後で、ノアは真っ赤になったままの顔を隠す  
ように俯く。

「……どうしてキスするの」

ふて腐れたようにも聞こえるそのセリフに、ゲイルは意地悪げな  
笑みを浮かべて答えた。

「分からないか？」

頬に添えられた大きな手はそのまま、親指がノアの唇をなぞる。  
分かっていったって、言っただけの言葉はあるでしょう。

小さくノアがそう主張すると、ゲイルはくすくすと笑ってノー

アを優しく抱きしめた。その耳元で、そつと呟く。

耳にかかる吐息は熱く、ノアの体温はさらに急上昇する。言って欲しかった言葉に違いはなかった。けれどこれは心臓に悪い。

足に力が入らなくなって、ノアはゲイルにしがみつく。

そんなノアに追い討ちをかけるかのように

「ノア」

名を呼ばれてノアはゲイルを見上げた。優しいキスがノアの額の赤い花に落ちる。

「いつになったら、俺の後になる？」

ぬくもりはすぐに去り、吐息が額にかかる。

ならないという選択が残っていないことには不満はなかった。

顔を真つ赤にしながら見上げると、ゲイルは悪戯に成功した子供のように意地悪げに笑う。

こんな不意打ちは卑怯じゃないだろうか？

今すぐに、とそう答えても良かった。

でもそれはなんだか悔しくて　ノアはひらめく。

イシュヴィリアナにおいて国王は太陽の象徴で、聖女はその光を受けて輝く月だった。

太陽は一度消えた。月だけが輝きを失いながら夜空にひっそりと佇んでいた。

だけども、もう一度月が輝き始めた。  
月は新しい太陽を見つけ出した。

意地悪な彼に、ほんの少し意地悪な謎かけを。

「……あの国に、太陽が戻ったら」

太陽の消えた国、君の額の赤い花

## 最終話：再会（後書き）

長い間ご愛読ありがとうございました！

これにてひとまず『太陽の消えた国、君の額の赤い花』は完結になります。

この話の後に後日談（というか未来の話になるんですが）がありますので興味がありましたらどうぞ。読まなくても全然支障ありません。

この場をお借りして今までこの物語を読んでくださった皆様に最大の感謝を。

ありがとうございました。

## 太陽と月の国

温かな日差しが降り注ぐ、いつもと変わらない昼下がりに。

「ノイス、リオはどこに行ったの？」

ぎく、とノイスは身を縮めて目を逸らす。

そんな我が子の動きを見逃すような母親ではないことはもちろん知っていた。長年の経験から。

「ノイス？」

優しく、綺麗な声だがそこには有無を言わせないだけの迫力がある。この国で最強なのは絶対にこの人だろうとノイスは日頃から思っていた。だからもちろん逆らわない。

「姉上なら……オアシスへ行きました」

北オルヴィス 旧イシュヴィリアナは神に愛される土地・オアシスまでどこの国よりも最短で行ける。二十年前にオルヴィスは北オルヴィスへと首都を遷し、かつて小国であった頃の地域は南オルヴィスと呼ぶのがもう普通になっていた。

その行動だけでも、父がどれだけ母を愛しているのか分かる。遷都は言うほど簡単なことではない。

消え去るはずだったイシュヴィリアナという名は オルヴィスの王都として今も残ったままだ。

「あの子っいたら、一人で行ったら危ないって言うてるのに」

「ちゃんとキャラバンに同行させてもらうって言うてたから、大丈夫だとは思っけど」

姉のリオはことあるごとにオアシスに行く。オアシスの君主夫妻と親の代から交流が続いているので、その双子も含め家族のよう

なものだ。

「ジルダスに会いたいんだろうから止めないでやって」

ジルダスとは双子の一方のことだ。珍しい男女の双子で、もう片方はキアという。どうも姉のリオはジルダスに惚れているようだ  
と　それこそ昔から気づいていた。

「止めてはいないでしょう。一人じゃ危ないじゃない、一応女の子だし。キャラバンに入れてもらうのなら親としてもいろいろ挨拶とか……今度アドナさんに手紙書かないと」

どういいう経緯か、母はキャラバンの女性と知り合いだ。もともと王族ではないが、それに等しいくらい地位だったと周囲から聞いている。かなりの箱入りだったことも。長年の疑問なのだが聞けずにいる。

「まあ、仕方ないわね。リオには帰ってきたらお父様から叱っても  
らわないと」

「……母上が叱ったほうが効果あると思うけど。父上は姉上とシエラには甘いから」

つまりは娘に甘いのだ。

特に末っ子のシエラは家族総出で激愛している。

「じゃあそうしましょうか。ノイス、シエラを呼んで来て。久しぶりに家族でお茶にしましょう」

微笑みながら母は去っていく。

自分と同じ色の銀の髪が太陽の光できらきらと輝いていた。

活発な姉とは打って変わって大人しくしっかり者の末っ子を迎えるに部屋まで急ぐ。

案の定、妹のシエラは窓辺に腰掛けて優雅に読書を楽しんでいた。母親の活発なところを姉が、大人しいところを妹が受け継いだんだ

ろうなといつも父は笑う。そのくせ、根が頑固なところはどちらも似てしまった。

「シエラ」

読書に熱中している妹に声をかけると、ぱつと顔を上げる。

父似の真つ赤な髪、母譲りの青く澄んだ瞳。二人からそれぞれの色を分け与えられたのは結局シエラだけだ。

姉のリオは何の突然変異か金髪に、榛色の瞳で、自分はまるっきり母似の銀髪に青い目だ。両親の愛情に差はないが、少し羨ましい。「兄様」

笑うとまだ幼さが残る。妹はまだ十四歳だ。

「母上がお茶にしようって。姉上がいらないんだから、おまえまで不参加だなんて言うなよ。母上が悲しむ」

「姉様はまたオアシスに？」

「ああ、もう慣れたもんだよ」

苦笑する兄と並びながら両親が待つ部屋へと向かう。

いつもと変わらない、穏やかで優しい時間だ。

「おまえにだけは、言われたくないだろうなあ」

紅茶を用意しているノアに、ゲイルが後ろから声をかける。

「何が？」

「リオ」

短く答え、ゲイルはくすくすと笑う。

「砂漠を見たこともなくせにキャラバンに混じって砂漠越えしようとしたじゃじゃ馬はどこ誰だろうな？ 絶対にリオはノーアに似たんだよ」

「あら、無茶ばかりするのはお父様譲りだって皆言ってるじゃない」  
ここにロハムがいればどっちもどっちですよ、と言っただろう。

「ノーア」

ゲイルがおいでと手招きする。

大人しくノーアは歩み寄り、その腕の中に包まれる。

額に、頬に、そして唇に　口づけが落とされる順番はいつも一緒だ。

「愛してるよ」

彼はいつも二人きりの時しかそのセリフを言わない。

私も、という言葉はいつも唇で塞がれて声にならない。

遅れながらやって来た子供二人が部屋に入れずにしばらく扉の前で待っている姿は、この国ではそう珍しくなかった。

太陽の消えた国、君の額の赤い花

## あとがき

長い間本当にご愛読ありがとうございました。

これにて『太陽の消えた国、君の額の赤い花』は完結です。な、長かった……。

最初は高校時代の短編だったこの話がまさか四十話を超える話になるうとは誰が思ったでしょうか。当時の友人も見たら驚くでしょうね（笑）

本当にじれったくてなかなかくっつかない二人ですみませんでした。

しかも最終回でもはっきりと言ってない！ おいこらおまえら！

それでもまあ、再会したシーンはそれなりにラブラブだったんじゃないかなあと思います。最終回後にある『太陽と月の国』ではただの馬鹿夫婦ですが。

そういえばなぜ『太陽と月の国』を最終回にしなかったと言いますと、最初に書いたとおりこの話の原型は昔書いた短編です。なのでラストは一緒なんです。ラストのノーアのセリフはいくら分かりにくかるうと変えたくなかったのです。

ここだから謎かけの答えを書きますが、一番単純なのが、太陽<sup>II</sup>ゲイルがオルヴィスに戻ったら。つまり二人で一緒に帰ったらね、という感じ。

他にもイシュヴィリアナの復興が終わったら、とかいろいろ解釈できちゃいます。

タイトルの太陽の国はまんまイシュヴィリアナのことですが。

二人のその後が知りたい人のための話が『太陽と月の国』です。

ここからはどうでも良い話。興味がなかったら最後まで飛ばしてください。

ちなみにノア、ゲイルの子供が上からリオ（女）、ノイス（男）、シエラ（女）です。

オアシスの夫婦の子供が双子でジルダス（男）とキア（女）。ジルダスの名前はアジムの身代わりとなって死んでしまったあの人からです。アジムはたぶん息子が生まれたらそうつけるだろうなあ、と思ったので。そしてリオというのはジルダス（死）の恋人からノアが名づけました。『誰よりも愛した君へ』という短編の主人公二人です（宣伝）

そして両親の思惑通り（？）に子供の二人はくっつきます。ノイスはノア似の息子でマザコンです。聖女に憧れて、次代の聖女を探し回ってます。しかし聖女はまだ政治的な価値がある人なのでゲイルとノアが密かに保護してます。いつか出会って恋に落ちるか？

末っ子シエラはのちに新興国に嫁ぐ予定。

オアシスの双子の一方キアはどっかの国の放浪王子と出会って以下略。

……とまあこんな感じに子供世代までネタはあります（笑）

よつやくこの物語もここで終わりです。

本当に長い付き合いだったので感動もひとしおです。  
なによりこの物語を読んでくださった皆様に最大の感謝を。

そしてノーアやゲイルが皆様の心の中でこれからも生き続けてい  
きますように。

あなたの読書のひとときのお供になれたのなら幸いです。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7914c/>

---

太陽の消えた国、君の額の赤い花

2009年7月1日21時22分発行